諫早市文化財調査報告書　第13集

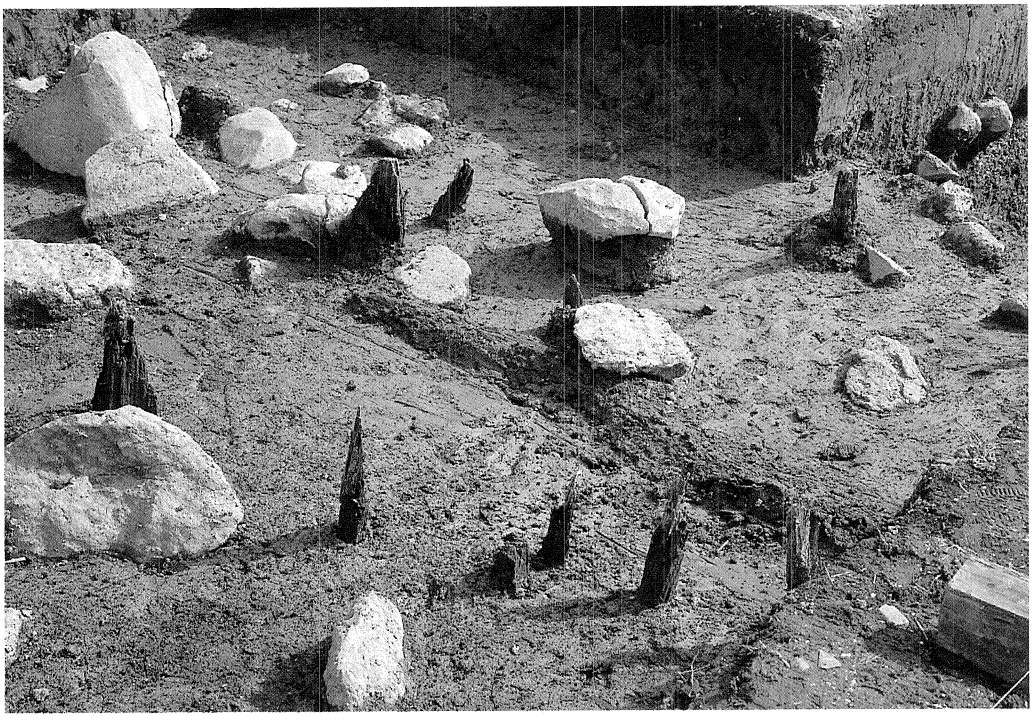
小野宗方遺跡

―市道宗方線交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書―

1994．3

諫 早 市 教 育 委 員 会

遺跡遠景（南西より）



E－F区　杭列出土状態

G—H区　西壁土層断面

動物遺存体出土状態（F区，イノシシ肩甲骨）

序　　文

小野宗方遺跡は，市道宗方線交通安全施設整備事業に伴い，平成３年度から５年度まで，３か年にわたり，発掘調査された遺跡であります。

当遺跡周辺には，周知の遺跡としての小野条里遺跡があり，その一部を構成する可能性があるものと，埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

その結果，当初の予測に反して，縄文時代の貝塚が確認され，貝層からは縄文時代前期の土器をはじめとして，石器・動物骨等の多数の遺物が出土したほか，同時代の海岸が確認されるなど，当時の自然環境を彷彿とさせる資料も多く見られています。時代を下って，弥生時代の水田に関連すると思われる杭列も確認され，稲作農耕の存在も予想されています。

今回の調査により，諫早における内湾性貝塚の実態，稲作農耕の実情など，郷土の歴史が更に解明されんことを心から期待するものであります。

なお，調査に際しまして，ご協力，ご理解いただきました関係各位に対し，心より感謝申し上げますとともに，本書が文化財保護の認識と理解，郷土史解明に少しでも役立てば幸いに存じます。

平成６年３月31日

諫早市教育長　　山　口　利　男

例　　言

1．本書は，市道宗方線交通安全施設整備事業に伴って，事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。

2．調査は，諫早市土木部道路課の依頼を受けて，諫早市教育委員会が実施した。

3．調査は平成3年度から平成5年度の3か年にわたって実施した。

4．遺物の整理・実測および写真撮影は，諫早市郷土館で行った。

5．調査により出土した遺物は，諫早市郷土館で保管・展示し，諫早市教育委員会文化課がその任にあたっている。

6．本書の挿図・図版・拓本は川瀬・古賀・秀島が行い，執筆・編集は川瀬が担当した。

7．本書に使用した高度値は海抜高であり，また方位は磁北を示している。

8．貝類の種同定にあたっては，山本愛三氏の御教示を得た。

9．動物遺存体の種同定にあたっては，木村幾多郎氏の御教示を得た。

10．植物種子の種同定・土壌分析については，㈱パリノ・サーヴェイに依頼した。

11．C^{14}年代測定については，㈱テレダイン・ジャパンに依頼した。

12．平成6年度発行の『長崎県遺跡地図』中の「宗方筒井遺跡」とは「小野宗方遺跡」のうち，貝塚のみを示す遺跡名である。「小野宗方遺跡」は，同遺跡を，広範囲に及ぶ「小野遺跡群」（小野条里遺跡・宮崎館遺跡を含む）を構成する遺跡の一つとして捉えて用いる遺跡名である。

目　　次

口絵カラー
□　遺跡遠景（南西より）
□　Ｅ－Ｆ区杭列出土状態
□　Ｇ－Ｈ区西壁土層断面
□　動物遺存体出土状態（Ｆ区・イノシシ肩甲骨）
序　　文
例　　言
第１章　序　　説
第１節．調査にいたる経緯と調査組織……1
第２節．遺跡の位置と地理的・歴史的環境……2
第２章　発掘調査……7
第１節．調査の方法……7
第２節．基本的層位……8
第３章　調査の成果……11
第１節．遺構……11
１．杭列……11
２．板列……15
３．Ｂ区土壙……16
第２節．遺物出土状況……18
第３節．遺物……24
１．土器・陶磁器……24
２．石器……38
３．木質遺物……54
第４章　理化学分析……57
１．小野宗方遺跡出土貝類からの考察……57
２．小野宗方遺跡出土の動物遺存体について……67
３．小野宗方遺跡出土の植物種子および土壌に関する自然科学分析……75
４．小野宗方遺跡のC^{14}年代測定結果……85
第５章　総　　括……86

挿　図　目　次

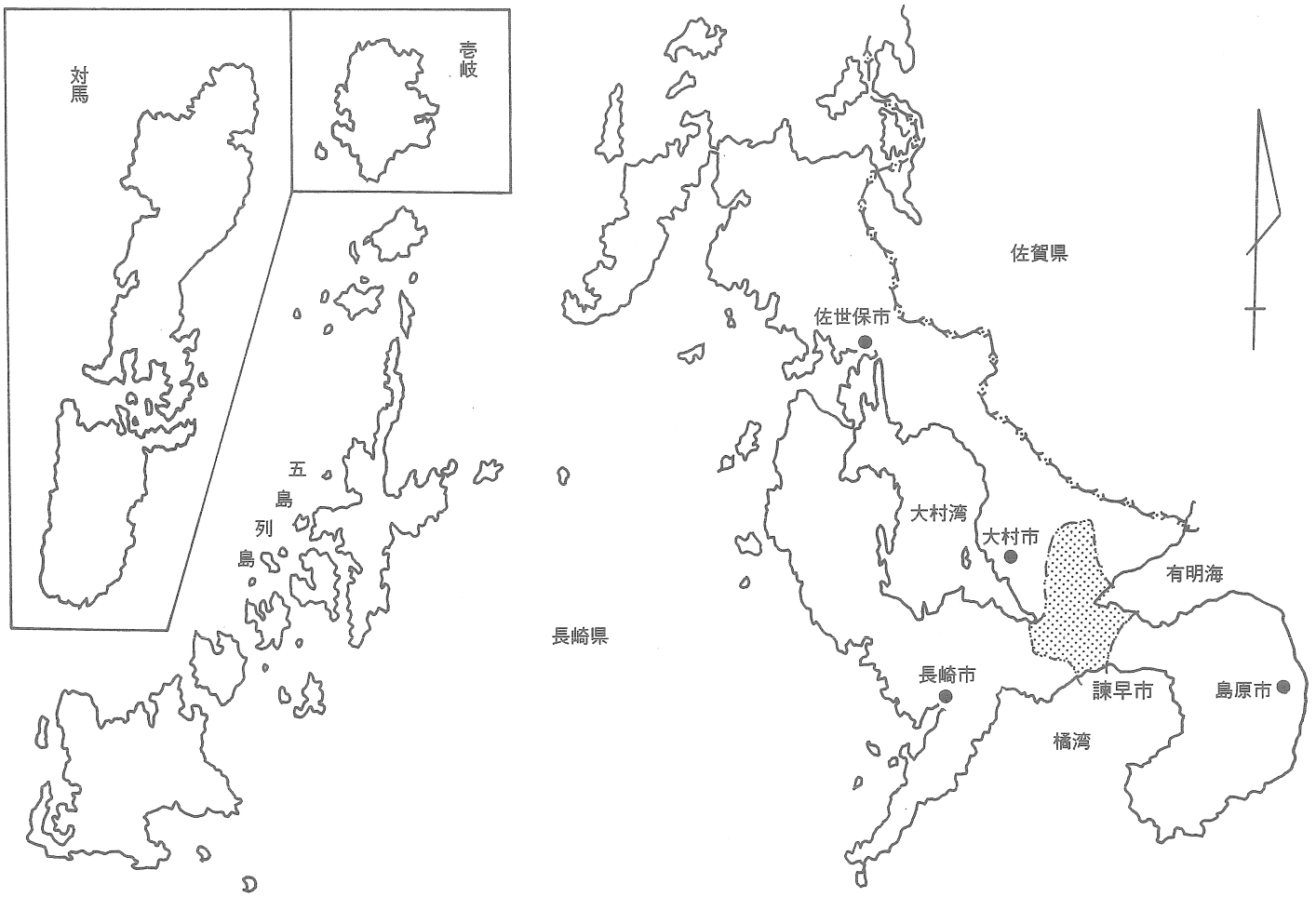
第１図　諫早市位置図
第２図　小野古墳石室実測図（１／80）……2
第３図　小野古墳周辺出土土師器（１／５）……3
第４図　坪地名字図……3
第５図　遺跡分布図（１／25,000）……4
第６図　遺跡周辺地形図（１／5,000）……6
第７図　基本的層位概念図……8
第８図　調査区設定図（１／200・１／1,000）……9～10
第９図　Ｅ－Ｆ区杭列実測図（１／30）……12
第10図　Ｏ′－Ｏ区杭列実測図（１／30）……13
第11図　Ｐ－Ｑ区杭列実測図（１／30）……14
第12図　Ｋ区杭列実測図（１／30）……15
第13図　Ｔ区板列実測図（１／30）……16
第14図　Ｂ区土壙実測図（１／20）……17
第15図　Ｇ－Ｈ区出土遺物平面・垂直分布図（１／30）……19～20
第16図　Ｏ－Ｐ区出土遺物平面・垂直分布図（１／30）……21～22
第17図　縄文土器実測図①（１／３）……25
第18図　縄文土器実測図②（１／３）……27
第19図　縄文土器実測図③（１／３）……29
第20図　弥生土器実測図①（１／３）……34
第21図　弥生土器実測図②（１／３）……35
第22図　土師器・陶磁器実測図（１／３）……37
第23図　石器実測図①（１／１）……39
第24図　石器実測図②（１／２）……41
第25図　石器実測図③（１／２）……43
第26図　石器実測図④（１／２）……44
第27図　木質遺物実測図①（１／２）……55
第28図　木質遺物実測図②（１／20）……56
付　図　調査区土層断面図（１／50）

表　目　次

第１表 遺跡地名表 …… 5
第２表 出土遺物集計表 ……23
第３表 縄文土器観察表①～③ ……30～32
第４表 弥生土器観察表 ……36
第５表 石鏃計測表 ……45
第６表 石器観察表①～② ……45～46
第７表 石材別一覧表 ……47
第８表 石器組成一覧表 ……47
第９表 石器器種別一覧表①～⑥ ……48～53
付　表 報告書抄録

図　版　目　次

図版１　Ｉ区貝層検出状態・Ｇ－Ｈ区基盤の状態
図版２　Ｇ－Ｈ区西壁・Ｈ区貝層（西壁）
図版３　Ｇ区貝層（西壁）・Ｇ区カキ殻付着状態
図版４　Ｇ区西壁・Ｇ区貝層（西壁）
図版５　Ｇ区からＥ区を見た状態・Ｇ区カキ殻付着状態
図版６　Ｊ－Ｌ区西壁断面・Ｌ区東壁貝層の状態
図版７　Ｂ区土壙
図版８　Ｔ区板列出土状態・Ｋ区杭出土状態
図版９　シカ（肩甲骨）出土状態・エイ（歯板）出土状態
図版10 弥生土器出土状態
図版11 弥生土器出土状態
図版12 Ｌ区木質遺物出土状態・Ｌ区木質遺物（部分）
図版13 土層の傾斜状態（Ｐ区）・Ｐ区からＯ′区を見た状態
図版14 Ｏ′区ポットホール・調査風景
図版15 縄文土器①
図版16 縄文土器②
図版17 縄文土器③
図版18 弥生土器①
図版19 弥生土器②
図版20 土師器・陶磁器
図版21 石器①
図版22 石器②
図版23 石器③
図版24 石器④
図版25 木質遺物
図版26 動物遺存体①
図版27 動物遺存体②
図版28 動物遺存体③
図版29 動物遺存体④
図版30 植物種子



第１図　諫早市位置図

第１章　序　　説

第１節．調査にいたる経緯と調査組織

市道宗方線は交通量が多く，かつ児童・生徒の通学路でありながら，歩道が無く，危険であるとの認識により，市道路課により歩道の整備が計画された。まず，平成５年10月１日付諫計第1156号により，市文化課に対して埋蔵文化財の取り扱いについての協議がなされた。同計画区域には周知の遺跡が存在しているため，これを受けて，その包蔵状況を確認するための調査を市文化課において実施した。同整備事業は工事予定区間を平成３年度から平成５年度の３か年に分割して施工される計画であったので，まず平成３年度予定区域の中に，５つのトレンチを設定した。その結果，縄文土器・石器・青磁・白磁など約100点が出土し，貝層が確認されたため，本調査が必要との判断がなされた。そこで，再度市道路課と協議を行い，平成３年度工事施工区間について平成３年12月18日から調査を開始し，初年度の調査は翌年の２月15日に終了した。平成４年度工事予定区間については，前年度と同様に試掘調査を行い，本調査が必要との判断のもとに，平成４年７月20日から同年12月３日の期間で調査を行った。

最終年度である平成５年度工事予定区間については，前年度調査地の隣接であり，前年度最終区の遺物出土状況から判断し，試掘は行わず，平成５年６月23日から同年９月１日の期間で調査を行った。調査の組織については以下のとおりである。

調査主体

　諫早市教育委員会文化課

調査総括

　吉原照子（諫早市文化課長・平成３・４年度）　廣田陽一郎（同・平成５年度）

　浦川謙司（諫早市文化課長補佐）

調査事務

　伊藤秀敏（諫早市土木部長）青木靖博（道路課長）喜多徳之（同課長補佐）

　川原和久（同技術吏員）大城晃一（監理課事務職員・平成３年度）

　西村慶治（同・平成４・５年度）西山恒子（同・平成３・４年度）

　高柳夫美子（同・平成５年度）

調査担当

　秀島貞康（平成３年度）　川瀬雄一（平成４・５年度）　古賀 力（平成３～５年度）

調査指導及び協力者

　古賀佐徳　橋本幸男　正林 護　諫見富士郎

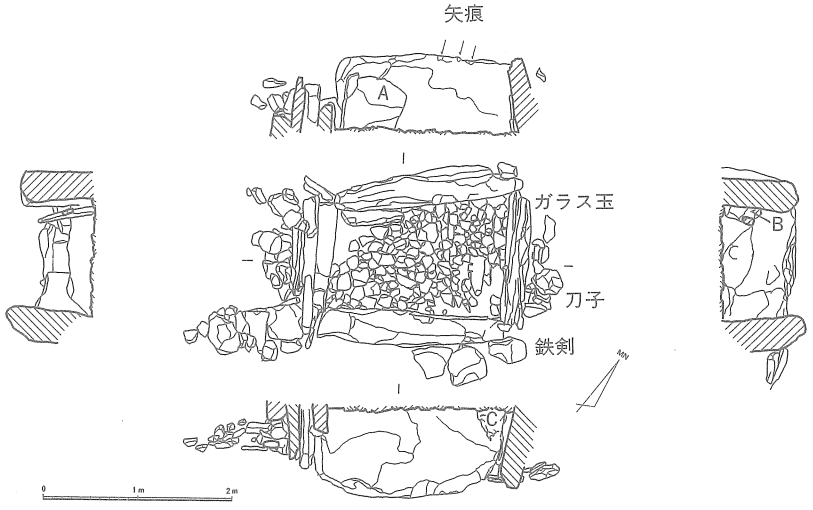
第２節．遺跡の位置と地理的・歴史的環境

諫早市は長崎県南域のほぼ中央に位置し，肥前半島から長崎・西彼半島と島原半島とが分岐する地峡部にあたる。東に有明海（諫早湾），南に橘湾（千々石湾），西に大村湾というように三方を海に囲まれ，県下第二の面積を持つ極めて肥沃な穀倉地帯，諫早平野を有する緑豊かな田園都市である一方，主要交通機関が離合・集散する要衝であるという地理的特性から近年では従来からの農業だけでなく，企業の進出など工業の面でもめざましい発展を遂げている。市北部，多良山系の一部をなす五家原岳を源流とする一級河川の本明川は市街地を貫流し，市東部の諫早平野を灌漑しているが，小野宗方遺跡は，この諫早平野の南部，小野地区の宗方町字「筒井」「柳井町」「藪崎」に所在し，北緯130度５分，東経32度49分に位置する。

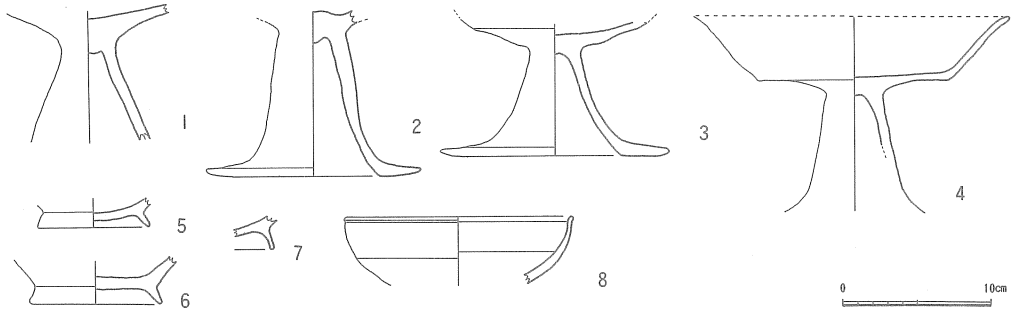
本遺跡南域は砂岩等を基盤岩類とする第三紀層から成っており，北面する丘陵先端部は，金比羅岳紫蘇輝石角閃石安山岩をはじめとする安山岩類の被覆が認められる。以西には，八天岳，金比羅岳，獅子喰岳など山陰系熔岩円頂丘が集合した長崎火山の中央部を成している。

本遺跡東側に位置する金比羅岳は標高247mを測り，その高度を北側に向かって逓減しながら派生する幾条もの丘陵は，標高50m付近でその傾斜角を変えて緩傾斜面を形成し，平野部へと貫入しているが，これまでにその傾斜面において，旧石器時代以降の人々の生活の形跡が残されている。主な遺跡としては下記のものが挙げられる。

・宮崎館遺跡　旧石器時代のナイフ形石器をはじめ，石鏃・フレーク等が検出され，また，弥生時代の土器・石器や古墳時代・中世期の土師器及び周辺の宅地造成に伴い，小野古墳[註1]が確認されている。



第２図　小野古墳石室実測図（Ｓ―１/80・『小野古墳』1978より）

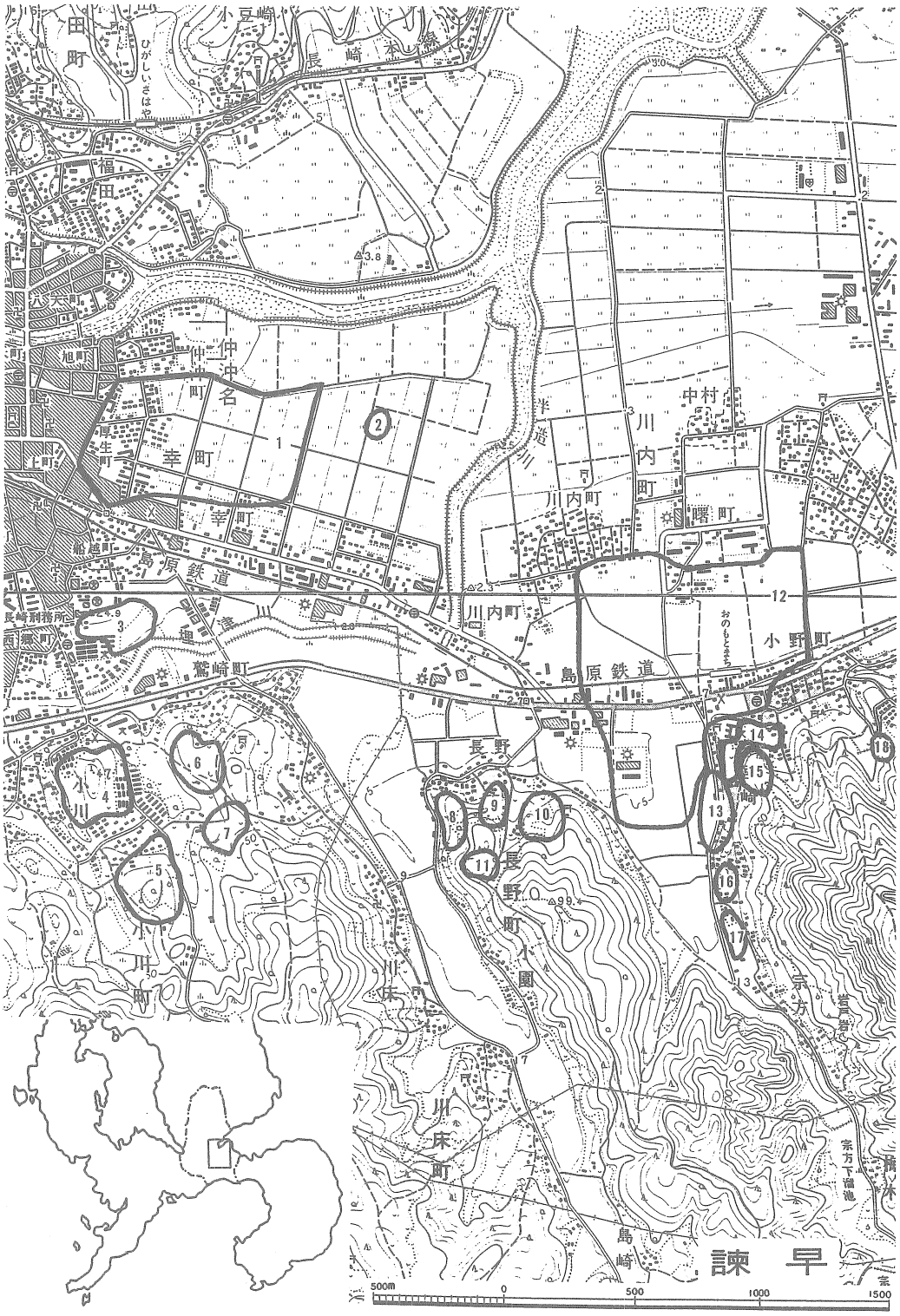


第３図　小野古墳周辺出土土師器（Ｓ－１／５・『小野古墳』1978より）

・小野城跡　宮崎館遺跡の後背地にあたる標高30ｍの丘陵に立地している。遺構は，本丸・空堀を残し，その規模約300×230ｍほどである。城跡東北麓には「館」という地名を残し，また，字「性空寺」を含めた周辺には天文年間（1532～55）の六地蔵石幢や多数の五輪塔及び宝筐印塔の残欠が存在している。[註2] また，『西郷記』には天正五年の小野城主として，西郷肥前守信尚の名を挙げている。[註3]

・小野条里遺跡　諫早から島原へ通じる国道57号の南北に広がっており，北側は現在殆どが水田として利用されている。標高４ｍ前後である。二ノ坪・三ノ坪・八ケ坪・大坪の坪数詞名が残っており，条里制地割の存在が予想される。1987～1989年に範囲確認調査を行い，[註4] 畦畔あるいは路肩等のために打ち込まれたと思われる杭列や溝が検出され，条里制に係わる遺構であると推測される。

第４図　坪地名字図（『宮崎館等範囲確認調査概報』1987より）

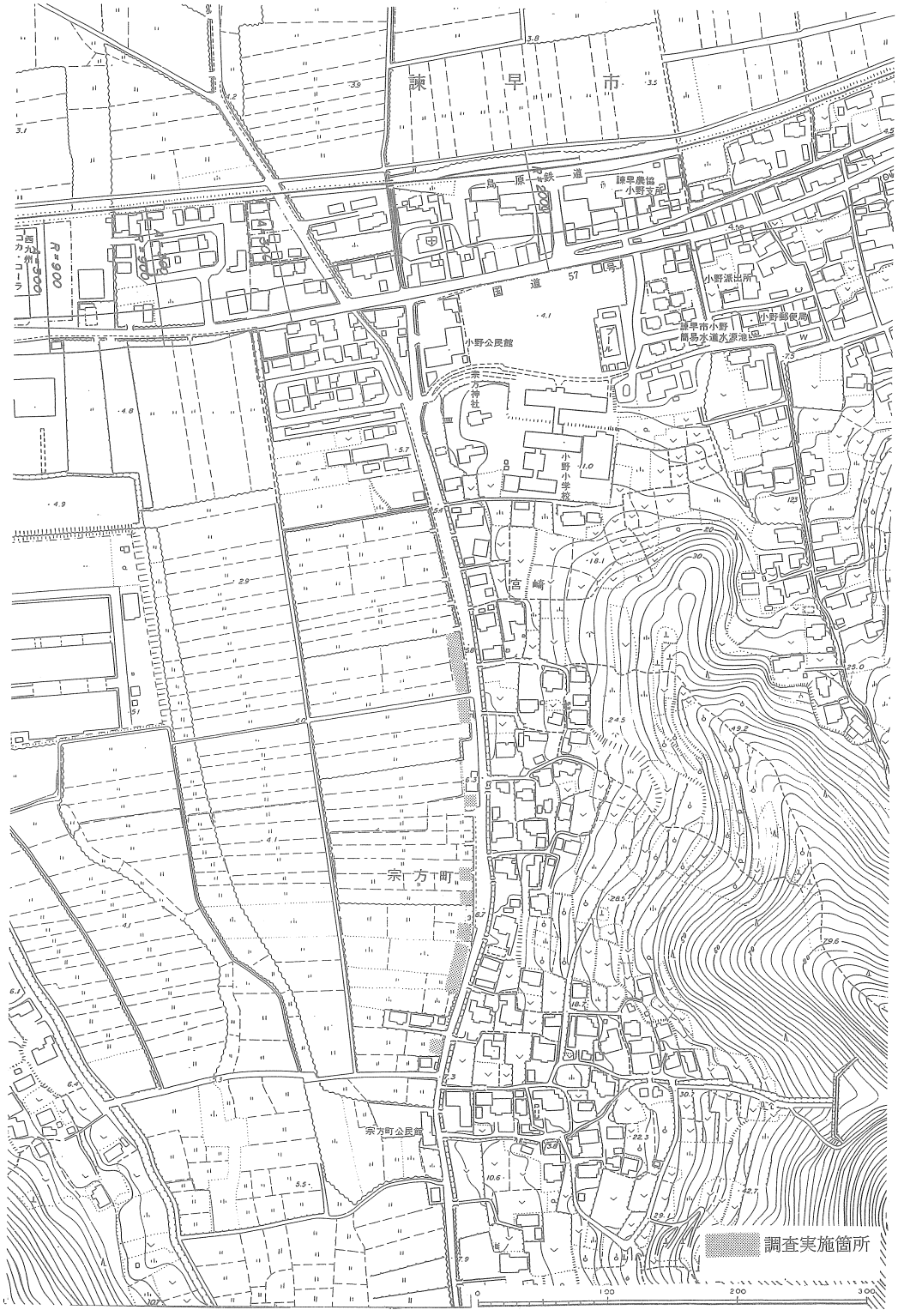


第５図　遺跡分布図（国土地理院発行１/25,000を使用）

第１表　遺跡地名表

	遺　跡　名	所　在　地	立　　地	標高	遺構・出土遺物等	時　期
1	田井原条里遺跡	諫早市幸町	水　　田	5 m		古代～中世
2	沖城跡	諫早市幸町	水田(微高地)	5 m	軒丸瓦，土管(瓦質)，陶器	
3	諫早農校遺跡	諫早市船越町	平　　野	10m	細型銅剣，弥生土器	弥　　生
4	林ノ辻遺跡Ａ地点	諫早市小川町	丘陵全域	40m	弥生土器，土師器，土師質土器，箱式石棺，中世墓，祭祀遺構	弥生～中世
5	〃　　Ｂ地点	諫早市小川町	丘陵全域	50m	弥生土器	弥　　生
6	十仙原遺跡	諫早市鷲崎町	丘陵頂部	40m	黒曜石剝片，剝片	弥　　生
7	源内谷遺跡	諫早市小川町	丘陵鞍部	30m	黒曜石剝片，剝片	弥　　生
8	崎田遺跡	諫早市長野町	丘陵先端部	25m	弥生土器，黒曜石剝片	弥　　生
9	大久保遺跡	諫早市長野町	丘陵斜面	30m	黒曜石剝片	縄　　文
10	水葉山遺跡	諫早市長野町		20m		縄　　文
11	長野城跡	諫早市長野町	山　　頂	100m		中　　世
12	小野条里遺跡	諫早市小野町，川内町，宗方町，長野町	水　　田	4 m	杭列，水路，弥生土器，土師器	弥生～中世
13	**小野宗方遺跡**	諫早市宗方町	水　　田	3 m	杭列，板列，縄文土器，弥生土器，中・近世陶器，青磁，白磁，石庖丁，石器多数	縄文～近世
14	宮崎館遺跡	諫早市宗方町	丘陵先端部	20m	ナイフ型石器，石鏃，弥生土器，土師器	旧石器～中世
15	小野城跡	諫早市小野町	丘陵頂部	40m	本丸，空掘，六地蔵石幢	中世～近世
16	水の手遺跡	諫早市宗方町	丘　　陵	10m		古　　墳
17	太郎丸遺跡	諫早市宗方町	平　　野	10m	弥生土器	弥　　生
18	小野貝塚	諫早市小野町	丘陵先端部	60m	弥生土器	弥　　生

註１．諫早市教育委員会：「小野古墳」『諫早市文化財調査報告書』第２集 1978
２．稲田三千年：「小野地区の遺構と古石塔の考察その(1)(2)」『諫早史談』第20・21号 1988・89
３．諫早市：『諫早市史』第１巻 1955
４．諫早市教育委員会：「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」『諫早市文化財調査報告書』第７・９集　1987・88
「宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書」同第11集 1989



第6図　遺跡周辺地形図（S－1/5,000）

第2章　発掘調査

第1節．調査の方法

平成3年度工事施工区間については試掘トレンチを5か所設定した。そのうち第1トレンチにおいて縄文土器・石器・動物遺存体などが確認されたほか，貝層が検出され，第2トレンチにおいて青磁片などが出土したため，この2か所を拡張する形で本調査を行った。5×4mの調査区を設定し，北側から順にA～I区と呼称する。平成4年度工事施工区間については試掘トレンチを3か所設定し，そのうちの2か所を拡張する形で，5×3mの調査区を設定して本調査を行った。調査区名は北側から順にJ～Q区である。前年度調査最終区（Q区）に隣接する平成5年度工事施工区間については，同区の状況から判断し試掘は行わず，本調査を行った。5×3mの調査区を設定し，北側から順にR～U区とした。調査区の総延長106m，調査面積380㎡である。なお試掘調査および本調査の位置については第8図の調査区設定図を参照されたい。また，本報告書内で用いられる標高については，宗方神社内の不動点からのレベル移動により算出している。

調査区域は既存の道路からおよそ2mの段差がついており，また歩道設置予定地ということもあり，非常に限られた狭い場所で，隣接する水田に影響を与えないように配慮したため排土作業が困難であった。調査箇所の一部については，完掘したグリッドの排土をそのグリッドに埋め戻してから，隣接するグリッドの調査に移った箇所もある。出土遺物の取り上げについては，原則として，出土位置を平面分布図に落とし，標高を測定したが，グリッド壁面から涌水が流れ出して来るという状況のもとでの，ポンプを常時作動させ排水しながらの調査となったため，涌水のために肉眼で出土位置を押さえられないものもあり，排土をメッシュで水洗しながら行うことで補った。

今回の調査では，動物遺存体・植物種子の出土が多く見られ，これらについては種別の同定を行った。また，出土した貝層の断面からブロックサンプリングを行い，構成種の同定も行った。C^{14}による年代測定については，貝層から採取した試料について3点，出土遺構（杭列・板列）を構成している板・杭などの木質遺物に関して5点行った。火山灰様土層については土壌分析を行った。

第２節．基本的層位について

総延長が長く，調査地点も飛び地であったため，全調査区を一連の土層で把握することは困難である。よって，ここでは全調査区Ａ～Ｕ区（アルファベット順・全23区，第８図参照）を土層の堆積状況により，Ａ～Ｄ，Ｅ～Ｉ，Ｊ～Ｌ′，Ｏ′～Ｕの４地点に分け，それぞれの地点の基準となる区の層位について記述する。各調査区土層断面図については巻末の付図を参照されたい。

●Ｂ区

Ⅰ．表土

Ⅱ．暗灰黒色粘土層

Ⅲ．青灰色粘土層　還元度の強い潟土

（以下　未掘）

●Ｈ区

Ⅰ．表土

Ⅱ．灰白色粘土層　１～２㎜大の凝灰岩風化礫多

Ⅲ．灰白色礫層　３～４㎜大の凝灰岩風化礫多

Ⅳ．灰白色粘土層　１～２㎜大の凝灰岩風化礫多

Ⅴ．茶色混土貝層　カキを主体とし，わずかにウミニナ・ハイガイを含む。

Ⅵ．青灰色混土貝層　同　上

Ⅶ．岩礁性礫層　灰黒色で１～５㎝大の円礫多

（基盤は凝灰角礫岩）

●Ｌ区

Ⅰ．表土

Ⅱ．褐色砂質土層

Ⅲ．青灰色粘土層　還元度の強い潟土

Ⅳ．青灰色砂質土層

Ⅴ．青灰色混土貝層　カキを主体とし，わずかにウミニナ・ハイガイを含む。

（基盤は凝灰角礫岩）

●Ｏ区

Ⅰ．表土

Ⅱ．茶褐色砂質土層

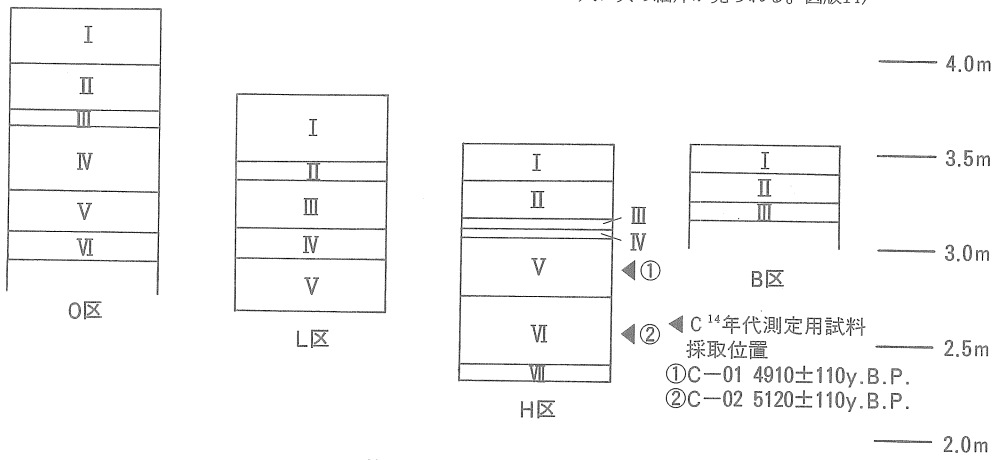
Ⅲ．黒褐色粘質土層

Ⅳ．青灰色粘土層　還元度の強い潟土

Ⅴ．青灰色砂質土層

Ⅵ．橙色礫層　拳大～人頭大の円礫多

（以下　火山灰様の土層が堆積，ポットホール状の穴に貝の細片が見られる。図版14）



第７図　基本的層位概念図

第８図　調査区設定図（１/1000，１/200）

第８図　調査区設定図（１/1000，１/200）

第３章　調査の成果

第１節．遺構

１．杭列（第９～12図，図版８）

・Ｅ－Ｆ区（第９図）

主軸は東西より僅かに南にずれている。標高は2.75～3.45mである。杭は長いもので70cmを測る。杭の頭部はいずれも後世の耕作により欠損しているため，さらに上位よりうちこまれたと思われる。杭は丸太を荒割りし，先端部を加工しているため，ほぼ断面は三角形状をなしている。このような例は，小野条里遺跡の調査でも確認された。土層断面で畦畔等の精査をしたが判然としなかった。しかし，その形状等からして水田に関連した遺構であろうと推察される。

・Ｋ区（第12図，図版８）

標高は2.6～3.3mである。本区基盤層の凝灰角礫岩にうちこまれている。

・Ｏ′区（第10図）

主軸は南北よりやや西にずれている。標高は3.25～3.7mである。杭の長さは40cmとほぼ均一である。いずれも頭部を欠損している。先端部は加工がなされているため，ほぼ断面は三角形状を呈している。この他に長さ１ｍのものが１点ある。上部の標高は先述のものと変わらないが，基盤までうちこまれており最下部の標高は2.8mである。

・Ｏ区（第10図）

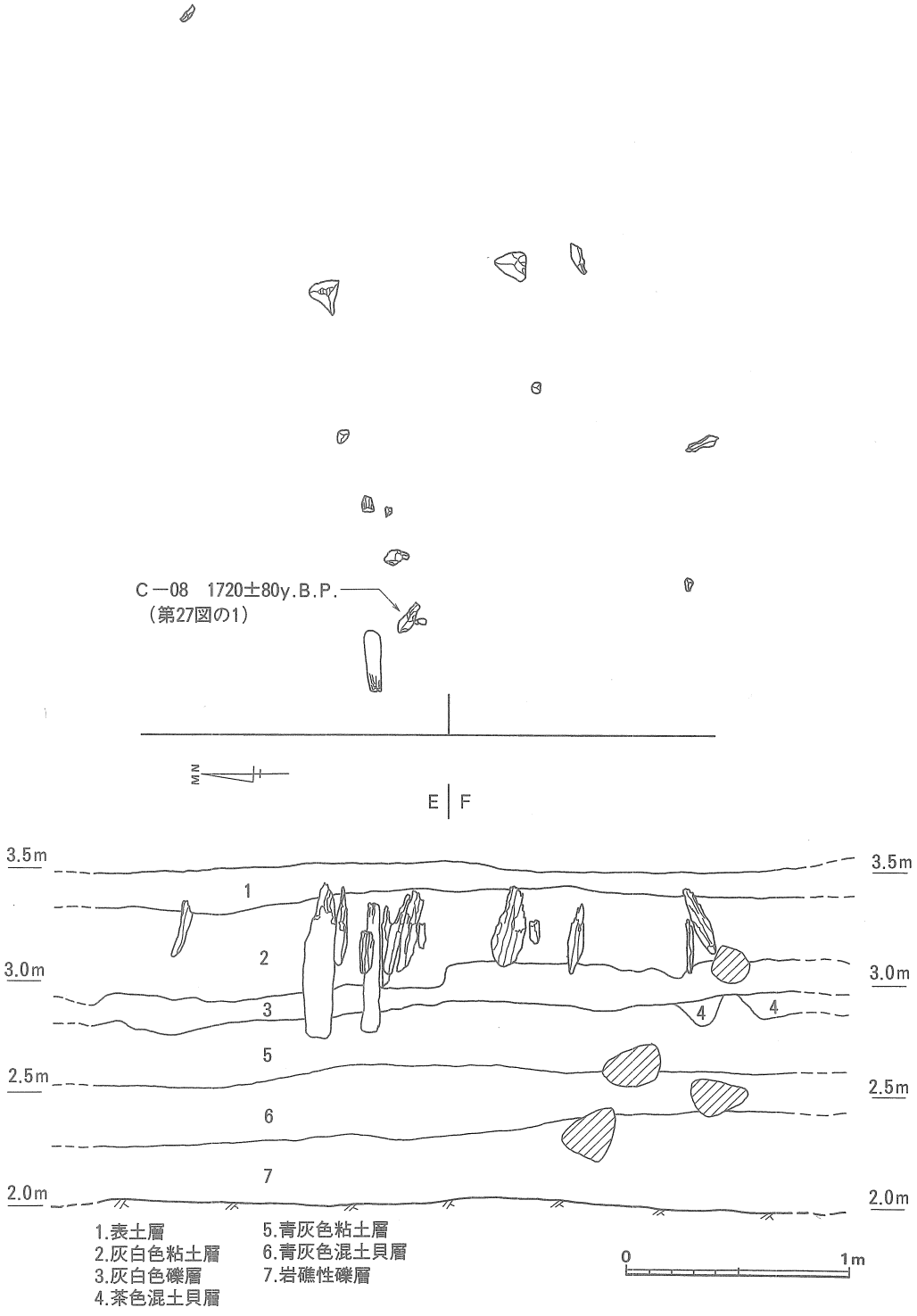
北側で見られる。標高3.11～3.66mで杭の長さは55cmである。直径10cmとＯ′区に見られる杭よりもやや太い。上部は欠損，先端部は加工がなされており，ほぼ断面が三角形を呈する。

・Ｐ区（第11図）

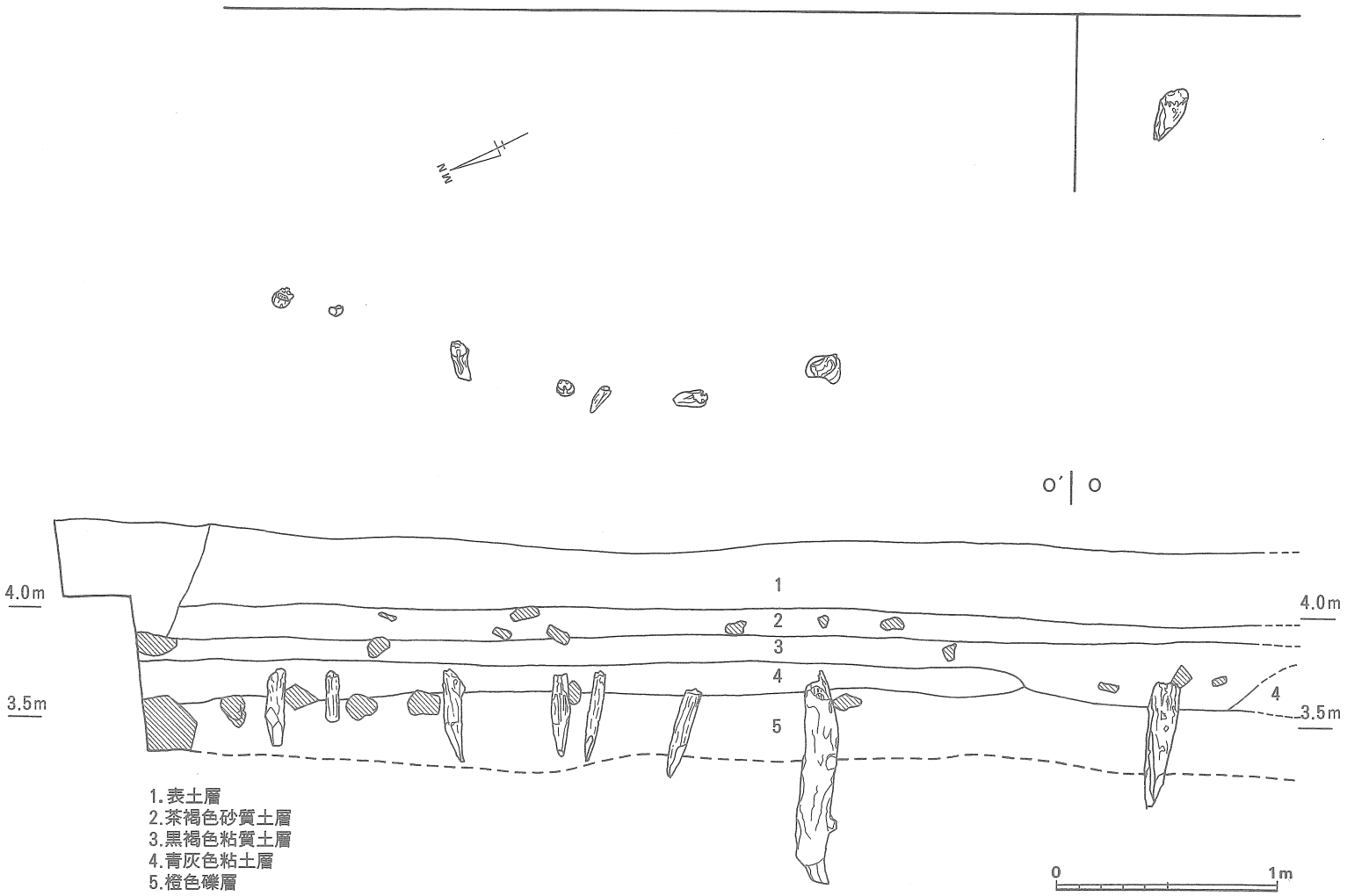
主軸は南北よりやや西にずれる。上部が東側に大きく傾いている。標高3.3～3.6mである。杭の長さは70cm・60cm，直径はともに12cmである。上部は欠損，先端部は加工がなされており，ほぼ断面が三角形を呈する。Ｏ区でみられた杭に近い印象を受ける。

・Ｑ区（第11図）

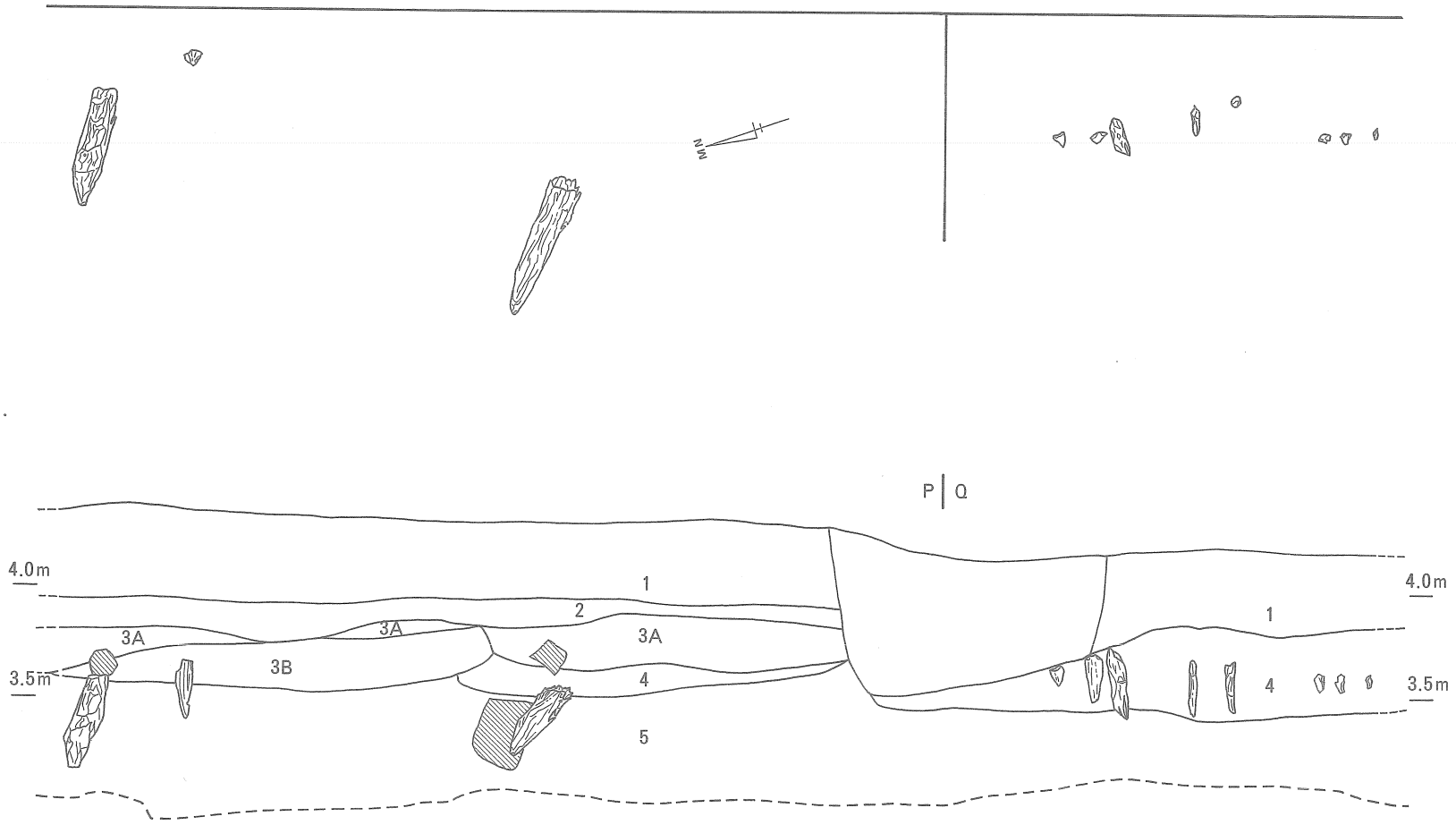
主軸は南北である。標高は3.5～3.77mである。上部は欠損しており，先端部は加工のためほぼ断面が三角形を呈している。南側の３点は残存部がわずかで，先端部をわずかに残すのみである。



第９図　Ｅ－Ｆ区　杭列実測図（１/30）

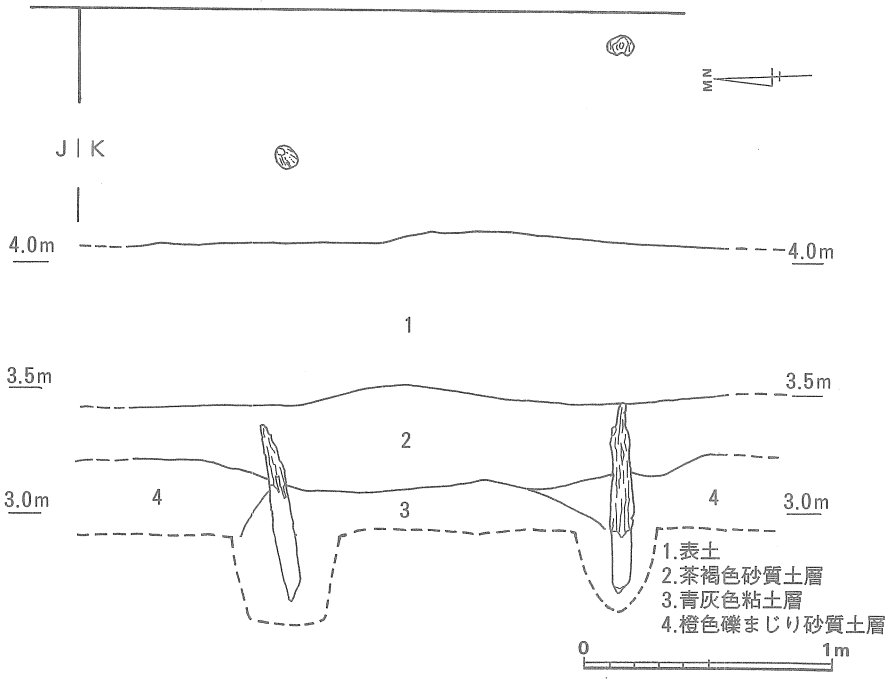


第10図　O′—O区　杭列実測図（1/30）



1 .表土層
2 .茶褐色砂質土層
3A.黒褐色粘質土層
3B.黒褐色砂礫層
4.青灰色粘土層
5.橙色礫層

第11図　P—Q区　杭列実測図（1/30）



第12図　K区　杭列実測図（S－1/30）

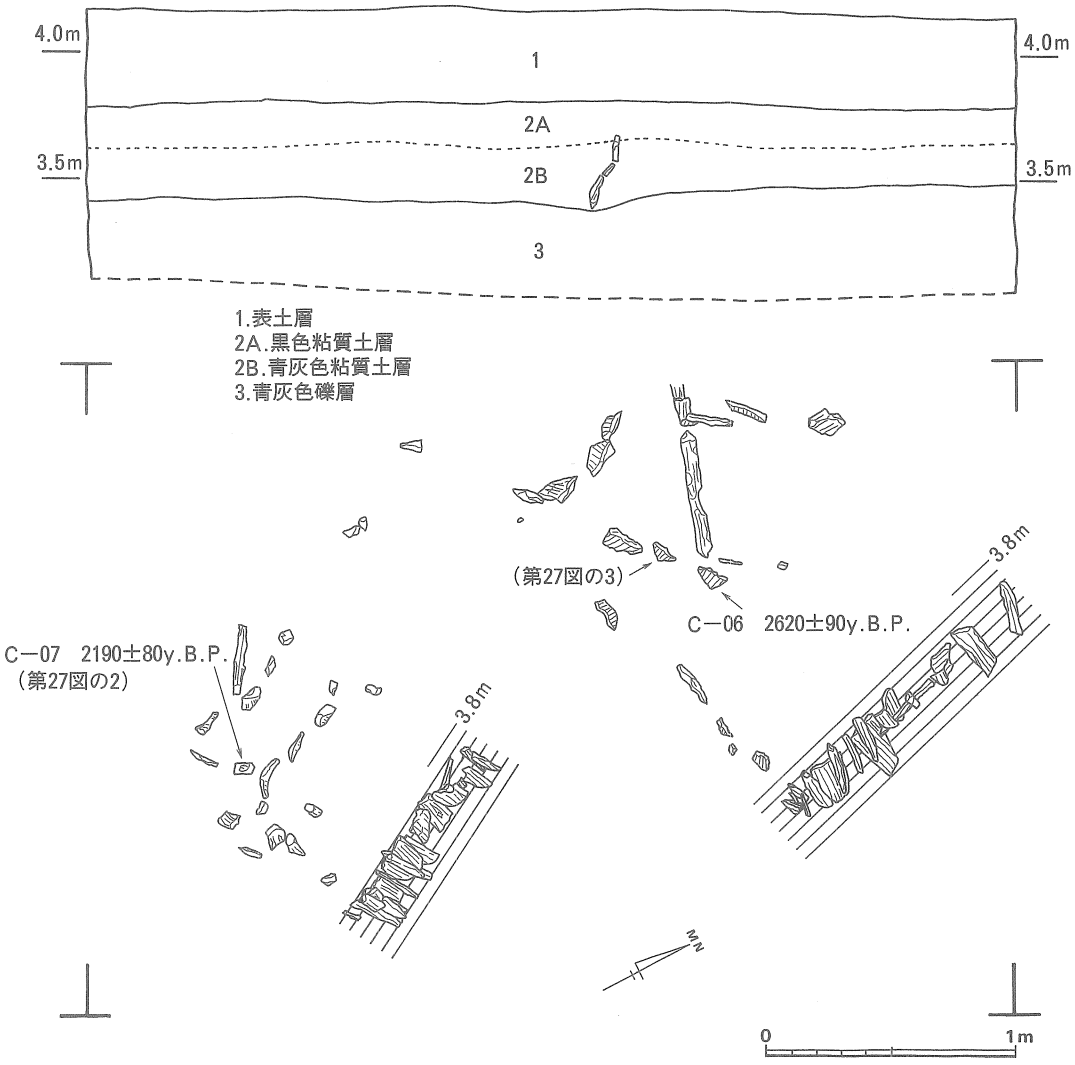
2．板　　列（第13図，図版8）

T区において板列が検出された。

本区土層の第2層中にあり，第3層の上面で止まっている。標高は3.45～3.75mである。板材はその上部が欠失しており，板材全体のうち下部のみが残されているが，その下部は先端部に向かって尖っている。材は打ち込んだというよりも，差し込んであるような印象を受ける。板材は厚さが2 cm程度といずれも幅が薄いことから，強度もなく，恒久的な遺構に伴うものではないと推測される。

検出時の状態では，主軸を北東にとる北側の1群と，主軸を北西にとる南側の1群に分かれているように思われる。両群が相互に関連するものであるかどうかは判然としない。南側部分は幅20cmの水路状に形成され，杭を伴う。北側部分は板材のみで形成されている。

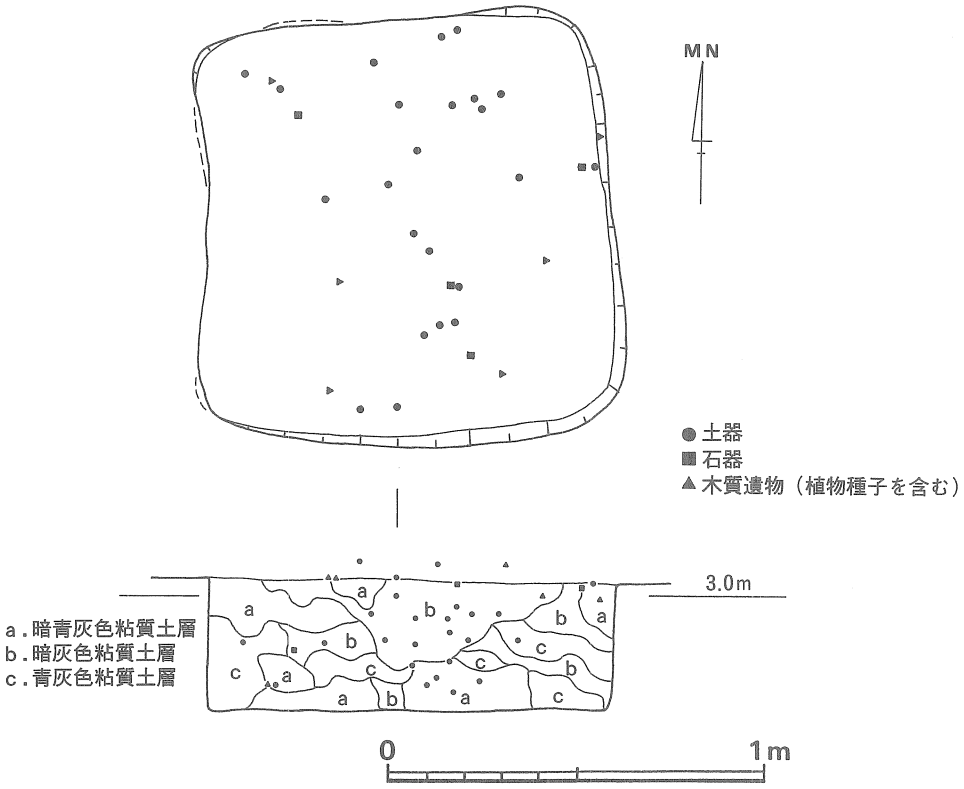
両群ともに壁面へ向かってさらに延長していくと思われるが，限られた範囲での調査であるため，その全体像を把握するに至らない点が惜しまれる。



第13図　T区　板列実測図（1/30）

3．B区土壙（第14図，図版7）

隅丸方形の土壙で，径1.1m，深さ35cm を測る。立ち上がりはほぼ直角に鋭く立ち上がる。覆土は非常に複雑で，a は暗青灰色粘質土，b はa より灰色がかった層，c は青灰色粘土層である。この覆土は土壙が掘られてあまり時間の経過がない段階で埋められたものである。遺物は土器・石器・木質遺物があり，出土遺物（第21図30，図版19）から，弥生前期後半の所産と思われる。柱穴状をしているがその痕跡はなく，機能は不明である。



第14図　B区土壙実測図（1/20）

第２節．遺物出土状況（第15・16図，第２表）

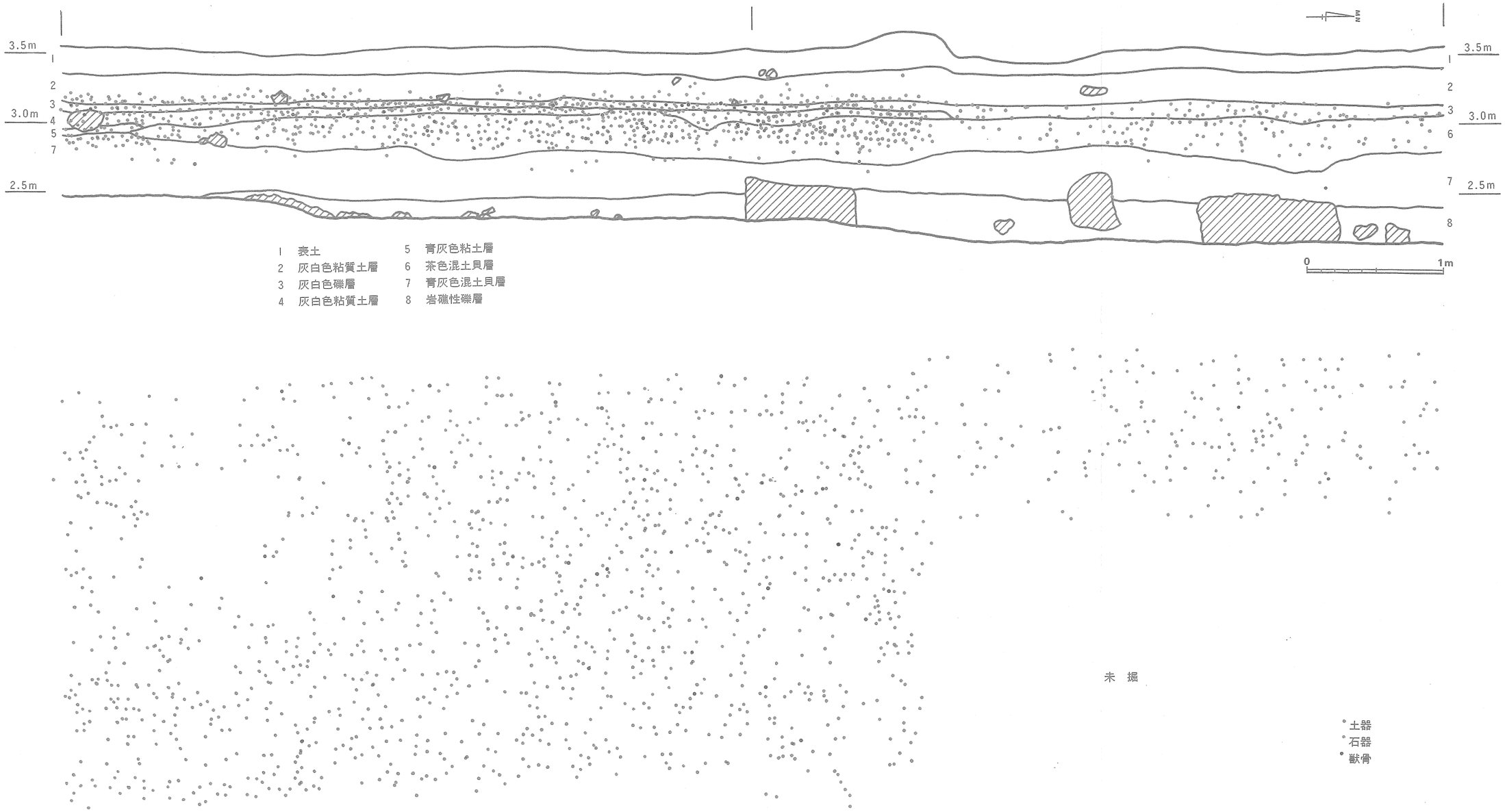
調査において出土した遺物は総数5,017点を数え，その内訳は土器2,113点，石器1,904点，動物遺存体93点，木質遺物（植物種子を含む）907点である。調査区ごとの出土点数については第２表のとおりであるが，Ｆ区からＬ′区の貝塚部分については，遺物の出土がＦ区からＩ区に集中しているのに対し，Ｊ区以降については出土数が極端に減少している。これは，貝層がＬ′区ではブロック状となり，貝層の終末部分となるという状況と符合していると思われ，この貝塚の主体部がＧ－Ｉ区の部分にあることが伺える。次に貝層が見られないＭ区以降についてはＯ－Ｑ区に出土が集中している。

出土遺物については，出土位置の平面図を作成し，標高を測定しており，これらを各調査区の西壁に投影している。ここでは紙面の都合上，貝層堆積地点についてはＧ－Ｈ区，貝層の存在しない地点についてはＯ－Ｐ区のものを掲載した（第15・16図）。

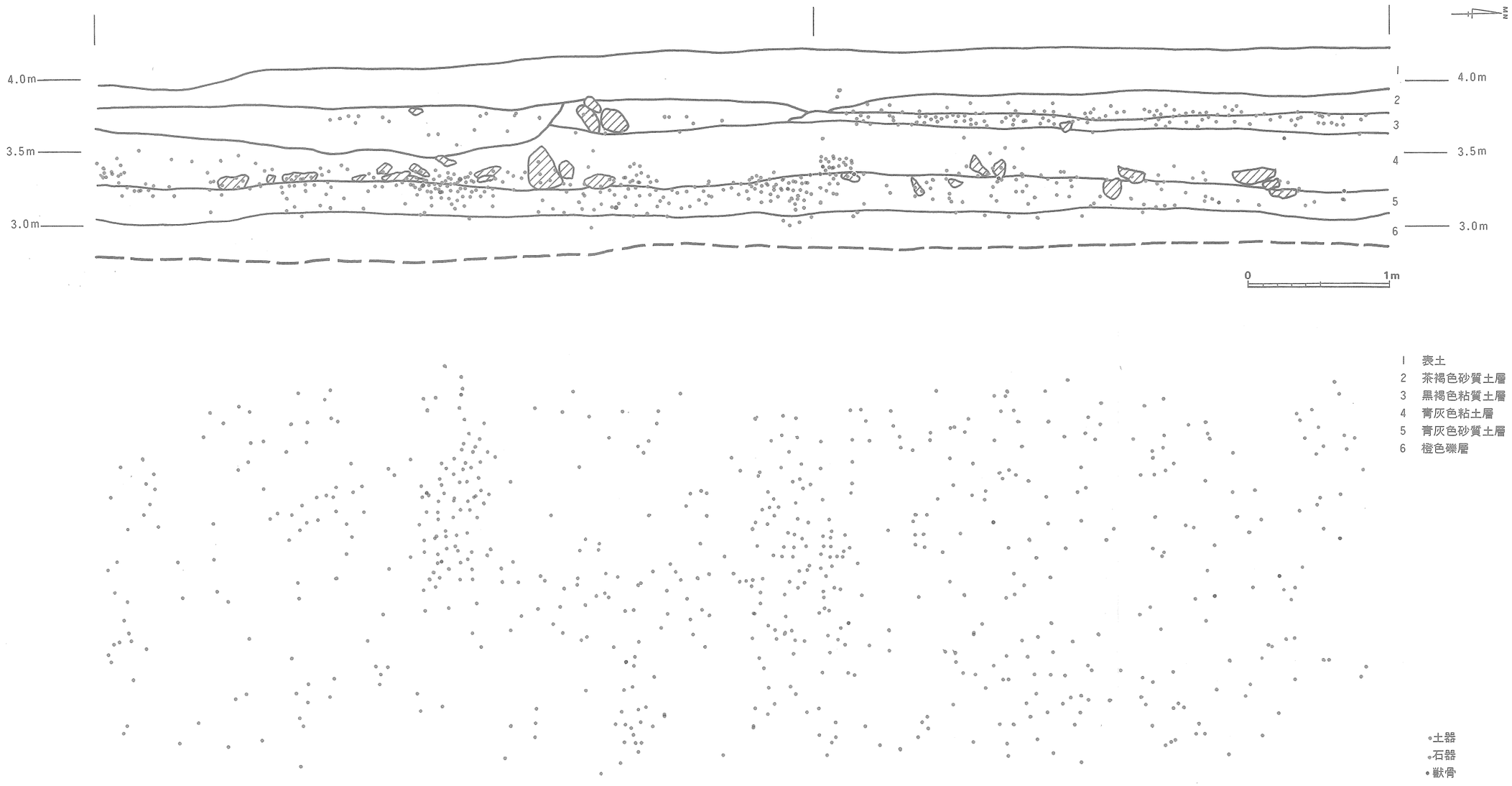
まずＧ－Ｈ区についてであるが，平面的には遺物が調査区のほぼ全面に散乱している状況である。垂直的には３層の灰白色粘質土層，４層の灰白色礫層，５層の茶色混土貝層に集中し，標高2.8～3.2ｍの間におさまる。

次にＯ－Ｐ区では，平面的にはＧ－Ｈ区と同じく遺物が調査区のほぼ全面に散乱している状況である。垂直的には２層の茶褐色粘質土層，３層の黒褐色粘質土層，５層の青灰色砂質土層に集中しており，４層の青灰色粘土層を間層とし，この上下の層に分離される。２層および３層の出土遺物としては弥生時代以降の土器，５層では縄文時代前期の土器が出土しており，時期的にも両者は分離している。

Ａ－Ｄ区については，弥生時代以降の土器が２層の暗灰黒色土層で出土し，標高3.2ｍ前後におさまるようである。なお，この区間については時間的制約のため基盤までを完掘できなかったが，Ｅ区の青灰色混土貝層が及んでおり，この層に縄文土器が含まれていると思われる。



第15図　G—H区出土遺物平面・垂直分布実測図（1/30）



第16図　O―P区出土遺物平面・垂直分布実測図（1/30）

第2表　出土遺物集計表（単位：点）

区	土　器	石　器	動物遺存体	木質遺物（植物種子を含む）	合　計
A	175	18	—	27	220
B	137	31	—	59	227
C	51	22	—	7	80
D	43	24	—	10	77
E	—	—	—	10	10
F	46	34	7	21	108
G	266	163	10	6	445
H	563	462	20	25	1,070
I	145	346	10	68	569
J	6	2	1	2	11
K	18	12	9	11	50
L	4	5	20	50	79
L′	3	1	1	1	6
M	7	20	—	—	27
N	10	—	—	1	11
O′	27	63	1	9	100
O	192	126	5	47	370
P	262	97	5	17	381
Q	108	155	4	9	276
R	21	84	—	15	120
S	25	153	—	71	249
T	3	86	—	217	306
U	1	—	—	224	225
計	2,113	1,904	93	907	5,017

第3節　遺　　物

1．土器・陶磁器（第17～22図，第3・4表，図版15～20）

本遺跡の調査により総数2,113点の土器・陶磁器が出土した。内容としては，縄文時代，弥生時代，古墳時代の土器，中・近世の陶磁器が含まれるが，その大半が小片で摩滅しており，そのため，土器文様の構成や残存部位について不明瞭な点が多い。本項では，その中でも器種が判明し，類別が可能と思われるものについて図化・分類を行い，所属時代の古い順に説明する。各土器についての詳細は土器観察表を参照されたい。

(1)　**縄文土器**（第17図～第19図，第3表，図版15～17）

縄文土器は，時期的に前期の曽畑式・轟式を主体としており，第1類から第10類に大別される。本来ならば1類の中に1土器型式のみ属することが望ましいが，土器が小片で文様構成や器種において不明瞭な点が多いこと，また摩滅しているため調整痕についても旧状をとどめていないものもあることから，型式を特定しえないものがある。そこで，まず，各土器片の共通点を拾い出すことで類を構成しているため，1類の中に別型式の土器が混在している場合があることをあらかじめ断っておく。型式が特定できるもの，ある型式に属する可能性があるものについては型式名を記述する。

第1類土器（第17図1～20，図版15）

A胎土に滑石を混入し，刺突文と沈線文を主文として，網代状文・鋸歯状文などの組帯文系と称される幾何文様が施文される類で，いわゆる曽畑式土器と言われるものである。

曽畑式土器は土器外面のほぼ全面に施文されるため，文様帯による区画などの土器全体での文様展開のあり方が問題となってくるが，本遺跡において出土する土器がいずれも小片であるため，土器全体での文様構成については論じることが困難であり，胎土や部分的な文様で判断せざるをえなかった。

①縦位または斜位の区画が施され，その間を沈線文で充塡するもの。（第17図1～4，図版15）

1はいわゆる鋸歯状文を有し，左上がりの斜位の沈線文の間を右上がりの短沈線文で充塡している。2は右2条，左1条の縦位の沈線文の間を横位の短沈線文で充塡している。3は，縦位と横位の沈線文が直行している，いわゆる網代状文を有する。1と3は色調・胎土ともに共通しており，1ではやや不明瞭なものの，ともに内面に横位の調整痕を残している。4は文様構成が判然としないが，区画文を有するものと思われる。12は縦位の沈線文の間を横位の沈線文で充塡していると思われる。

②鋸歯状文を有するもの。（第17図5，図版15）

5は文様に規格性がなく，乱れた鋸歯状文を有する。

第17図　縄文土器実測図①（S－1／3）

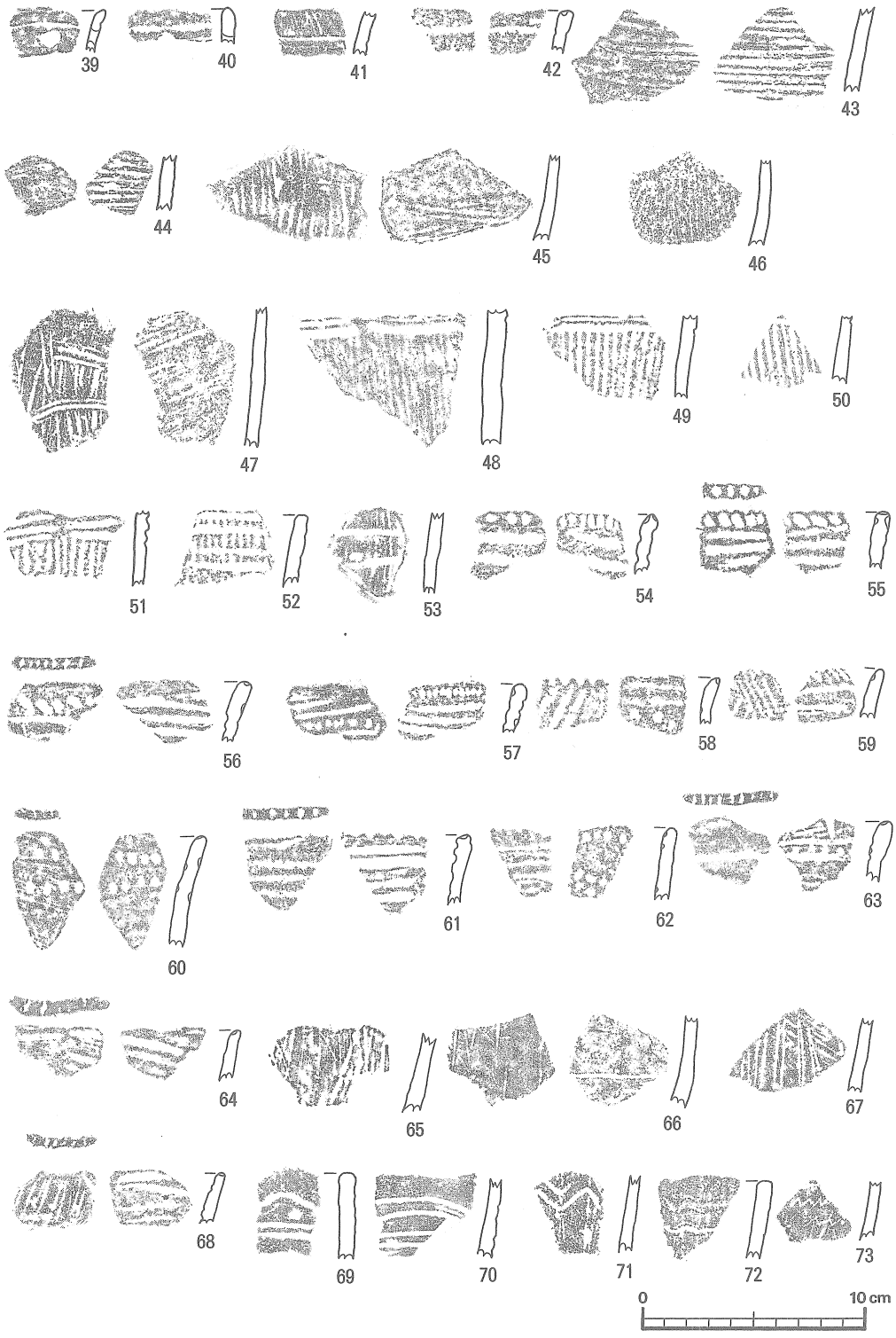
③横位の沈線文の上を斜位の沈線文が切るもの。(第17図６・７，図版15)
７は口縁部がやや外反し，内面最上部には２列の短沈線文を有する。外面の文様には太い棒状の施文具が用いられ，沈線は太くて深い。
④最上部に２列の刺突文を有するもの。(第17図８～10，図版15)
８は２列の刺突文の下位に横位の沈線文を有する。口唇部，内面にも刺突文を有する。９は外面２列，内面１列の刺突文を有する。10は外面に２列の羽状刺突文を有し，その下位に横位の沈線文を有する。内面は無文である。９・10はともに器壁が薄い。
⑤横位の沈線文を有するもの。(第17図11，図版15)
17は太い沈線文を有する。残存部からの判断のため，沈線文以外の文様を有する可能性がある。

Ｂ文様構成についてＡに似るが，胎土に滑石を混入しない，曽畑式土器である。
①縦位の区画が施され，その間を沈線文で充塡するもの。(第17図13～18，図版15)
13～17はいわゆる網代状文を施し，区画文とその間を充塡する沈線文が直行あるいは直行に近くなるもの。16が細沈線で構成されているほかは，沈線の太さはほぼ共通している。13は内面に貝殻腹縁による調整痕を残す。18は左上がりの沈線に対して同様の沈線を鋭角に充塡している。
②外面最上部に１列の刺突文，その下位に３条の横位の沈線文を有するもの。(第17図19・20，図版15)
19はやや外反する口縁部で，内面には２列の刺突文，その下位に横位の沈線文を有する。20は口縁部がやや厚く，刺突文を有する。内面には２条の横位の沈線文を有する。

Ｃ無文あるいは文様が不明瞭ではあるが，胎土に滑石を混入するものを一括する。
文様が不明瞭であるため，図化については割愛した。

第２類土器（第17図21～38・第11図39～42，図版16)
沈線文のみを有するもので，「プロト曽畑」に属すると思われる。
斜行沈線文を有するもの（30)，口縁最上部に横位の沈線文あるいは短沈線のみを有するもの（21～27・29・31・32)，ハ字状の短沈線を有するもの（33)，縦位の短沈線を有するもの（34～36)，横位の沈線文の上に斜行沈線文を付加するもの(37･38)がある。32は１列の，25･38は２列の刺突文を内面に有する。39・40は横位の沈線の下位に穿孔を有する。41・42は沈線の上部がやや肥厚する。

第３類土器（第18図43・44，図版16)
土器の内外面に貝殻腹縁による深い横位の条痕を有するもの。従来，轟Ａ式土器と言われるも



第18図　縄文土器実測図②（S－1/3）

のである。43は外面の貝殻条痕をナデ消している。

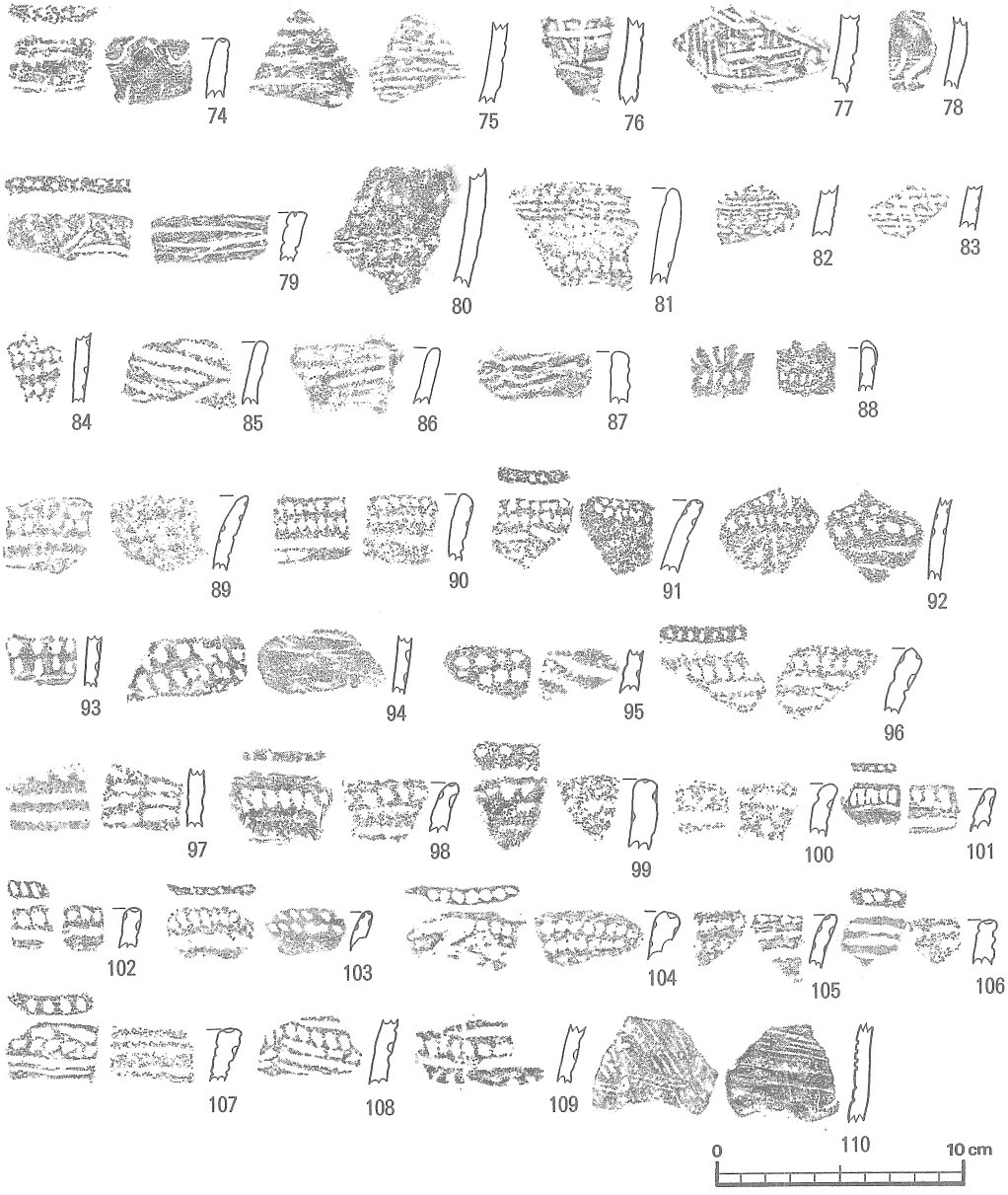
第4類土器（第18図45・46・65・66，図版16）
縦位の貝殻条痕のみを有するもの。

第5類土器（第18図47～64・67・68，図版16）
縦位あるいは横位の貝殻条痕と沈線文・刺突文が併用されるもの。
①縦位の貝殻条痕を有するもの。（第18図47～53，図版16）
47は縦位の貝殻条痕の上を横位の沈線（２本単位？）が切っている。内面には横位の粗い貝殻条痕を有する。48～51は区画文的な横位の沈線文・短沈線文の下位に貝殻条痕を有する。48は貝殻条痕の上をナデており，内面も横位のナデが施される。器壁が厚い。49は貝殻条痕を切る，横位の沈線文を有する。52・53は地文の貝殻条痕を切る，横位の沈線文を有する。施文のパターンとしては先述の47に似る。轟Ｃ式土器と思われる。
②横位の貝殻条痕を有するもの。（第18図54～64，図版16）
口縁最上部に刺突文を有し，その下位に横位の貝殻条痕を施すもの(54～56)，口縁最上部に横位の貝殻条痕を有するもの(57・61・62・64)，口唇部に貝殻腹縁による刻目を有するもの(63・64）がある。60は内外両面ともに，地文の貝殻条痕の上に２列の刺突文を有する。
③斜位の貝殻条痕を有するもの。（第18図58・59・68，図版16）
58は口唇部および内面の２条の沈線の下位に，59は内面最上部に刺突文を有する。

第6類土器（第18図69～73・第19図74～79・110，図版16・17）
沈線文が曲線化した文様をもつもの。
71・72・75は外面に，74は内面に波状文・山形文を有し，施文具はいずれも２本単位のものを使用していると思われる。75は内面に横位の貝殻条痕を有する。76はＶ字形の沈線の上を横位の沈線が切っている。77～79は縦位の貝殻条痕の上に，より深い曲線文を有する。110は地文の貝殻条痕の上に２本単位の曲線文が施される。内面には横位の貝殻条痕を有する。

第7類土器（第19図80～84，図版17）
貝殻を施文具とし，貝殻条痕を持たないもの。従来，轟Ｃ式土器と言われるものである。貝殻を押圧し，帯状の列点文を有するもの（80・81・83)，貝殻腹縁を横位に押引くもの（82)，巻貝の殻頂を刺した刺突文を有するもの（84）がある。

第8類土器（第19図85・86，図版17）
やや太めの棒状工具で施文するもの。



第19図　縄文土器実測図③（S－1/3）

85・86はともに斜めに交叉する沈線文を有する。

第 9 類土器（第19図87・88，図版17）

文様の構成要素として沈線文・刺突文以外の文様を有するもの。

87は２条の細い隆帯文を有する。88は内外面にヘラ状の施文具による刺突文を有し，口唇部にかかる２条の短い粘土ひも貼付を有する。

第10類土器（第19図89～109，図版17）

刺突文と沈線文を有するもの。

Ａ口縁最上部に刺突文あるいは刺突押引を有するもの。（第19図89～106，図版17）

刺突文には２列のもの（89～95）と１列のもの（96～103）があり，いずれもその下位に横位の沈線文・短沈線文を有する。104～106は横位の沈線文を引く途中で刺突を施し，沈線文状を呈する。93の刺突文も押引き状を呈する。

Ｂ刺突文の上位に横位の沈線文を有するもの。（第19図107～109，図版17）

107・108は１列の刺突文の上下に横位の沈線文を有する。

第 3 表　縄文土器観察表①

分類	図	番号	出土区	層位	標高(m)	器形	部位	色調		胎土	焼成	調整・施文			備考
								外	内			外	内	口唇	
1A	17	1	I	青貝	2.666	不明	不明	黒	褐	1，3，5	良	1→A	1		
		2	I	灰白粘	2.927	〃	〃	茶褐	赤茶	1，3，5	〃	1→A	1		
		3	I	〃	2.844	〃	〃	黒	黒褐	1，3，5	〃	1→A	1		
		4	G	茶貝	2.683	〃	〃	黒褐	黒褐	1，3,4,5	〃	1→A	1		滑石少量
		5	H	〃	2.84	〃	〃	茶褐	赤茶	5，6	〃	1→A	1		
		6	G	〃	2.846	〃	〃	茶	黒褐	5	〃	1→A	1		滑石多量
		7	Q	青灰粘	3.31	深鉢	口縁部	茶褐	茶褐	1，5	〃	1→A	1→A		滑石多量
		8	G	灰白粘	3.041	〃	〃	灰黒	灰黒	3，5	〃	1→B	1→B	D	滑石多量
		9	Q	青灰粘	3.328	不明	〃	褐	褐	3，5	〃	1→B	1→B		
		10	O	〃	3.419	深鉢	〃	黒褐	茶褐	1，5	〃	1→A，B	1		滑石多量
		11	H	茶貝	2.855	不明	不明	茶褐	黒褐	1，5	〃	1→A	1		滑石少量
		12	H	灰白粘	3.033	深鉢	口縁部	赤茶	黒	3，5	〃	1→A	1→A		滑石多量
1B		13	F	茶貝	2.869	〃	胴部	灰黒	灰	1，4	〃	1→A	2		
		14	H	灰白粘	3.034	〃	〃	褐	褐	1，2，4	〃	1→A	1		
		15	G	茶貝	2.955	〃	口縁部	黒褐	茶褐	1，3，4	〃	1→A	1		
		16	T	橙礫		不明	不明	茶	茶	1，2，4	〃	1→A	1		

※標高の記入のないものは水洗による

胎土：１―石英，２―雲母，３―クサリ礫，４―角閃石，５―滑石

調整：１―ナデ，２―貝殻ナデ

施文：Ａ―沈線，Ｂ―刺突，Ｃ―貝殻腹縁刺突，Ｄ―刻目

縄文土器観察表②

分類	図	番号	出土区	層位	標高(m)	器形	部位	色調 外	色調 内	胎土	焼成	調整・施文 外	調整・施文 内	調整・施文 口唇	備考
1B	17	17	I	青灰貝	2.82	深鉢	胴部	黒褐	褐	1,2,3	良	1→A	1		
		18	S	橙礫	3.471	不明	不明	茶褐	黒褐	1,4	〃	1→A	1		
		19	O	青灰砂	3.259	〃	口縁部	褐	黒	1,3,4	〃	1→A,B	1		
		20	P	〃	3.242	〃	〃	茶褐	灰白	1,4	〃	1→A	1→A	B	
2		21	Q	〃	3.217	〃	〃	茶	茶	1,3	〃	1→A	1→A	B	
		22	G	灰白粘	3.061	〃	〃	明褐	明褐	1,3,4	〃	1→A	1		
		23	H	〃	3.12	〃	〃	灰白	灰白	1,3,4	〃	1→A	1		
		24	I	青灰貝	2.875	〃	〃	灰	灰	1,3,4	〃	1→A	1→A		
		25	G	茶貝	2.917	〃	〃	黒褐	黒褐	1,2,4	〃	1→A	1→B	D	
		26	G	灰白粘	3.174	〃	胴部	赤茶	赤茶	2,3,4	〃	1→A	1		
		27	Q	青灰粘	3.359	〃	口縁部	黒褐	黒褐	1	〃	1→A	1→A	D	
		28	F	灰白粘	3.049	〃	〃	黒褐	褐	1,2	〃	1→A	1→B	B	
		29	P	青灰砂	3.208	〃	〃	灰褐	灰褐	3,4	〃	1→A	1→A		
		30	G	茶貝	2.856	〃	〃	黒褐	灰	1,4	〃	1→A	1		
		31	O′	青灰砂	3.214	〃	〃	茶	灰	1,2,3,4	〃	1→A	1	B	
		32	G	茶貝	2.879	〃	〃	黒褐	黒褐	1,2,4	〃	1→A	1→B	B	
		33	P	青灰砂	3.229	〃	不明	茶褐	茶褐	1,3,4	〃	1→A	1		
		34	S	橙礫		〃	〃	灰	茶	1,2,3	〃	1→A	1		
		35	S	橙礫	3.496	〃	〃	灰褐	灰褐	1,2,3	〃	1→A	1		
		36	Q	青灰粘	3.379	〃	口縁部	茶褐	灰褐	1,4	〃	1→A	1→A		
		37	O	青灰粘	3.174	〃	不明	黒褐	黒褐	1,4	〃	1→A	1→A,B		
		38	G	茶貝	2.977	〃	口縁部	茶褐	黒褐	1,4	〃	1→A	1→A		
	18	39	F	灰白粘	3.05	〃	〃	黒	茶褐	1,4	〃	1→A	1		
		40	G	茶貝	2.865	〃	〃	灰	灰褐	1,4	〃	1→A	1		
		41	H	灰白粘	3.021	〃	不明	褐	灰褐	3,4	〃	1→A	1		
		42	H	〃	3.056	〃	口縁部	黒褐	黒褐	1,3,4	〃	1→A	1	B	
3		43	S	橙礫	3.466	深鉢	不明	黄褐	黄褐	1,4	〃	2	2		
		44	S	〃		不明	〃	茶褐	茶褐	1,3	〃	2	2		
4		45	G	茶貝	3.006	深鉢	胴部	黒褐	黒褐	1,2,4	〃	2	2		
		46	O′	青灰粘	3.698	〃	〃	灰褐	黒褐	1,3,4	〃	2	1		
5		47	O′	青灰砂	3.234	〃	〃	黒	黒	1,3,4	〃	2→A	1		石英多量
		48	G	灰白粘	3.048	〃	〃	灰	灰	2,3,4	〃	2→A	2		
		49	H	〃	3.041	〃	〃	黒褐	黒褐	1,2,4	〃	2→A	1		
		50	G	茶貝	2.949	〃	〃	黒褐	黒褐	2,4	〃	2→A	1		
		51	H			〃	不明	灰	灰	3,4	〃	2→A	1		
		52	G	灰白粘	3.115	不明	口縁部	茶褐	赤茶	1,3	〃	2→A	1		
		53	H	茶貝	3.051	〃	不明	灰	黒褐	1,3	〃	2→A	1		
		54	H	〃	2.931	〃	口縁部	赤茶	赤茶	1,4	〃	2→B	2→B		
		55	F	〃	2.803	〃	〃	赤褐	赤褐	1,3,4	〃	2→B	2→B	B	
		56	G	〃	2.824	〃	〃	赤褐	赤褐	1,3,4	〃	2→B	2		
		57	H	灰白粘	3.022	〃	〃	赤褐	赤褐	1,2	〃	2→B	2→B		
		58	F	〃	3.01	〃	〃	赤茶	赤茶	1,2,4	〃	2	2→B		
		59	G	〃	3.012	〃	〃	茶	赤茶	3,4	〃	2	2→B		
		60	G	茶貝	2.929	〃	〃	黒褐	黒褐	2,3,4	〃	2→B	2→B	D	
		61	G	灰白粘	3.125	〃	〃	黒	黒	1,3,4	〃	2	1→B	B	細砂混入
		62	H	茶貝	2.938	〃	〃	黒	黒	1,2,4	〃	1→A	1→B		
		63	F	〃	2.99	〃	〃	灰	灰	3,4,5	〃	1→A	1→A,B	C	滑石少量

縄文土器観察表③

分類	図	番号	出土区	層位	標高(m)	器形	部位	色調 外	色調 内	胎土	焼成	調整・施文 外	調整・施文 内	調整・施文 口唇	備考
5	18	64	G	灰白粘	3.076	不明	口縁部	黒	灰	1，4	良	2	2	C	微量の貝殻粉末混入
4		65	H	〃	3.012	深鉢	不明	黒褐	黒褐	1，4	〃	2	1		
		66	H	茶貝	2.948	〃	〃	茶	黒褐	1，4	〃	2	1→A		
5		67	I	青灰貝	2.947	〃	〃	灰黒	灰褐	2，4	〃	2	1→A		細砂混入
		68	G	茶貝	2.942	不明	口縁部	灰	灰	3，4	〃	2	2	B	
6		69	P	青灰砂	3.253	〃	〃	赤茶	茶	1，3，4	〃	1→A	1		細砂混入
		70	H	茶貝	2.837	深鉢	胴部	灰	灰	1，2，4	〃	1→A	1		細砂混入
		71	H	灰白粘	3.197	〃	〃	茶褐	灰褐	1，3	〃	1→A	1		
		72	G	〃	3.061	〃	口縁部	黒褐	灰白	2，4	〃	1→A	1		細砂混入
		73	Q	青灰砂	3.222	不明	不明	黒	褐	1，4	〃	1→A	1		石英多量
	19	74	G	灰白粘	3.025	深鉢	口縁部	黒褐	黒褐	1，3，4	〃	1→A	1→A	B	
		75	H	〃	3.097	〃	胴部	茶褐	灰白	1,2,3,4	〃	1→A	2		
		76	G	茶貝	2.935	不明	不明	黒褐	黒褐	1，4	〃	1→A	1→A		
		77	H	灰白粘	3.032	深鉢	胴部	灰褐	灰褐	2，3	〃	2→A	1		
		78	I	〃	3.088	不明	不明	黒褐	黒褐	1，4	〃	2→A	1		
		79	H	〃	3.009	深鉢	口縁部	褐	褐	1，4	〃	1→A	1→A	B	
7		80	H	〃	3.137	〃	胴部	黒褐	茶	1，4	〃	1→C	1		
		81	H	〃	3.115	〃	口縁部	灰褐	茶	1，3，4	〃	1→C	1		
		82	H	〃	3.136	不明	不明	灰黒	灰	1，3，4	〃	1→C	1		
		83	G	〃	3.069	〃	〃	赤茶	黒褐	1，4	〃	1→A，C	1		
		84	H	〃	2.951	〃	〃	黒	黒	1，3，4	〃	1→B	1		
8		85	H	灰白粘	2.988	深鉢	口縁部	黒褐	黒褐	1，3，4	〃	1→A	1		石英多量
		86	G	〃	3.029	不明	〃	黒褐	灰褐	1，3，4	〃	1→A	1		石英多量
9		87	H	〃	3.12	〃	〃	茶褐	茶褐	1,2,3,4	〃	1	1		隆帯あり
		88	I	〃	3.109	〃	〃	黒褐	黒褐	1，4	〃	1→B	1→B		口唇部に短い粘土ひも貼付
10A		89	G	茶貝	2.962	深鉢	〃	黒褐	黒褐	1，4	〃	1→A，B	1→B		
		90	H	灰白粘	3.123	不明	〃	赤褐	赤褐	1，3	〃	1→A，B	1→A，B		
		91	O	青灰粘	3.321	〃	〃	褐	褐	1，2，4	〃	1→A，B	1→B	B	
		92	H	灰白粘	3.14	〃	〃	黒褐	黒褐	1，3	〃	1→B	1→A，B		
		93	F	茶貝	2.84	〃	不明	赤褐	赤褐	1，3，4	〃	1→A，B	1		
		94	I	灰白粘	2.684	〃	〃	灰黒	灰黒	3，4	〃	1→B	1		
		95	P	青灰砂	3.257	〃	〃	黒褐	茶褐	1，3，4	〃	1→B	1→A		
		96	G	茶貝	2.891	〃	口縁部	黒	灰黒	1，4	〃	1→B	1→B	B	
		97	P	青灰粘	3.286	〃	〃	黒	茶	1，4	〃	1→A	1→A	B	
		98	G	灰白粘	3.069	〃	〃	茶褐	茶褐	1，4	〃	1→A，B	1→B	B	
		99	P	青灰砂	3.305	〃	〃	黒褐	黒褐	1，2，4	〃	1→A，B	1→B	B	
		100	P	〃	3.22	〃	〃	灰褐	黄灰	1，4	〃	1→A，B	1→A		
		101	H	灰白粘	3.021	〃	〃	黒	黒褐	1，2，3	〃	1→B	1→B	B	
		102	F	茶貝	2.984	〃	〃	黒	黒	1，4	〃	1→A，B	1→B	B	
		103	H	〃	2.935	〃	〃	赤褐	赤褐	3，4	〃	1→B	1→B	B	
		104	P	青灰砂	3.212	深鉢	〃	赤茶	赤茶	3，4	〃	1→A	1→A	B	
		105	H	茶貝	2.958	不明	〃	黒	黒	1，4	〃	1→B	1→B	B	
		106	K	青灰粘	3.003	〃	〃	黒	黒	1，4	〃	1→A	1→A	B	
10B		107	O	青灰粘	3.287	〃	〃	黒褐	茶褐	1，4	〃	1→A，B	1→A	B	
		108	H	灰白粘		〃	不明	赤褐	赤褐	2，3，4	〃	1→A，B	1		
		109	F	〃	3.086	深鉢	胴部	茶褐	茶褐	1，3	〃	1→A，B	1		
6		110	I	〃	2.996	〃	〃	明褐	明褐	1，3，4	〃	2→A	1		

(2) **弥生土器**（第20・21図，第４表，図版18・19）

甕形土器（第20図，第21図29～40，図版18・19）

１～４・７・８は口縁及び口縁下に２条の突帯をもつものである。１はやや内傾する口縁下方に刻目突帯をもつ。口唇部は丸くおさまり，内面に指頭圧痕を有する。胎土に多量の砂を含む点で，他の土器と異なる。また，胎土や胴部が張らない器形，調整の面で縄文的な様相が認められる。復元口径約22cm。２～４は内傾する胴部に小さい平坦口縁を有し，口縁下に突帯を有する。６～18は口縁部の形状が断面三角形を呈するもので，口縁下方に刻目突帯を有するもの（７・８），口縁部に刻目を有するもの（10・13・14～16）などがある。８・10は内面に指頭圧痕を有する。９の断面はカマボコ形に近く，内側にわずかに突出している。外面はタテ方向のハケ目調整を施したのちに横位の沈線を施す。内面はナデる。19・20は三角形の口縁に刻目を施す。21は口縁部にかけて内傾する器形を有する。22～36は胴部で，22は２条，他は１条の突帯を有する。22は復元口径約30cm。38～40の外面はハケ調整を施す。甕形土器の胴部と思われるが判然としない。

壺形土器（第21図41～50，図版19）

41～45は肩部で，41は沈線を施し，二枚貝による重弧文を施文する。42～45はいずれも１～２条の沈線を有する。41は丹塗の痕跡が認められる。46は頸部で，３条の沈線を有する。50は口縁部で，口唇部をナデており，口唇部上下に刻目を施す。金海式タイプかと思われる。

器形不明土器（第21図47～49，図版19）

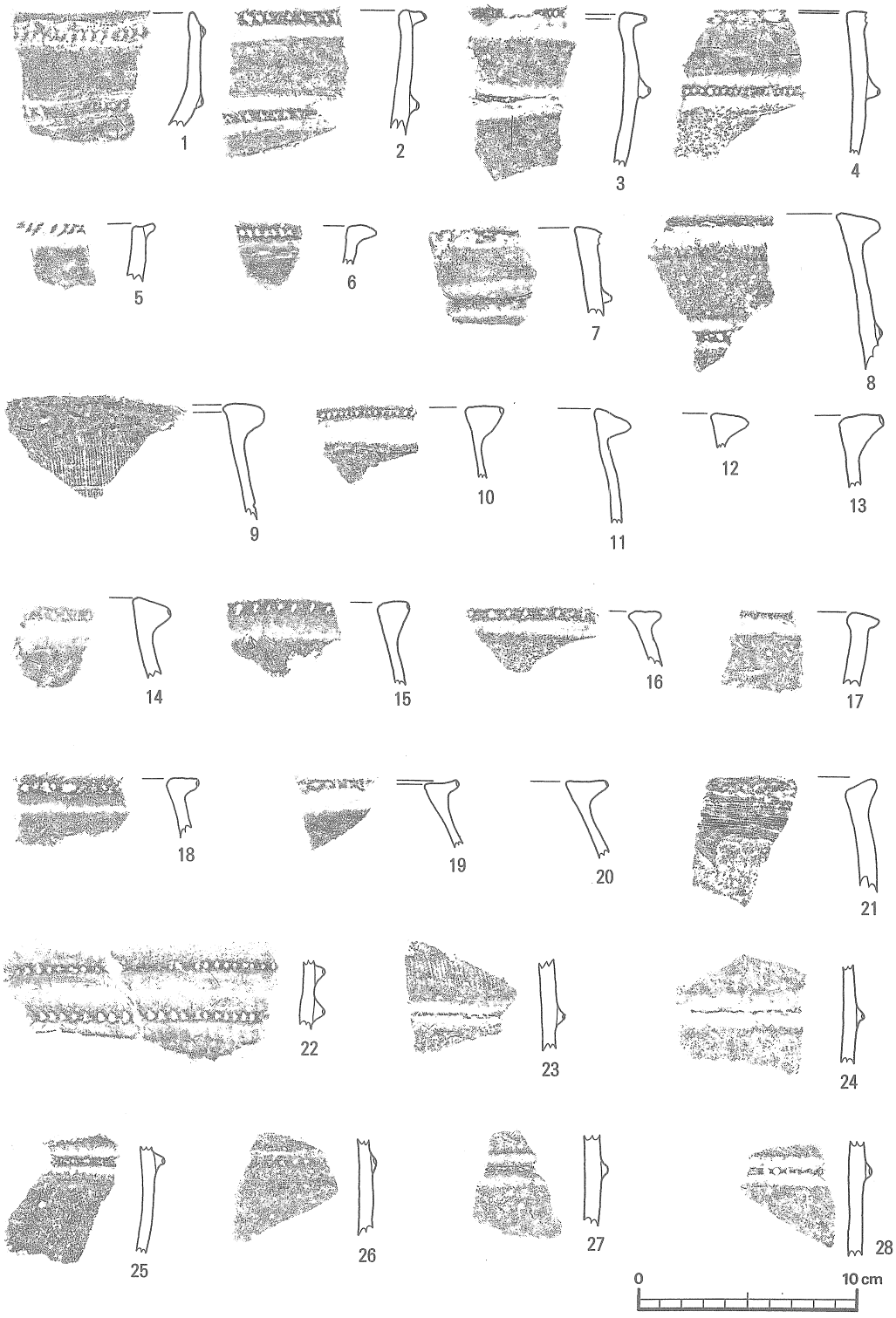
47～49は三角形の貼付突帯の上下にていねいな横方向のナデが施される点，ススの付着が見られない点，胎土が精緻である点から，壺形土器の可能性があるものの明確でないものである。

底部（第21図51・52，図版19）

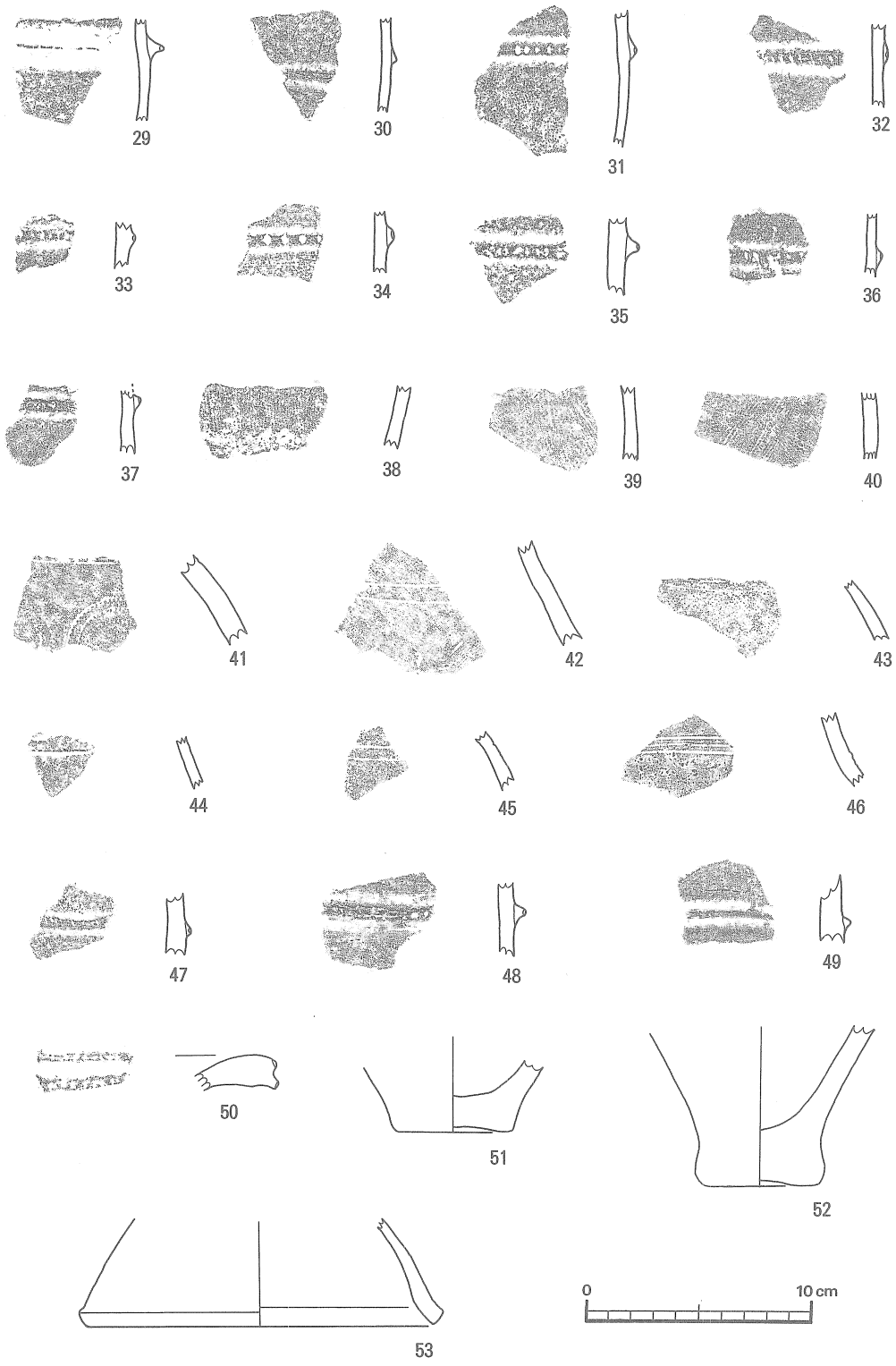
いずれも甕形土器の底部である。51は上げ底の底部で指頭圧痕を有する。52も同じく上げ底の底部であるが，51と比べて中央部が厚く，重量感がある。最下部外周に指頭圧痕が強く残される。

台付鉢形土器（第21図53，図版19）

53は台部分で内外面に稜を持つ特徴を有している。



第20図　弥生土器実測図①（S－1/3）



第21図　弥生土器実測図②（S－1／3）

第4表　弥生土器観察表

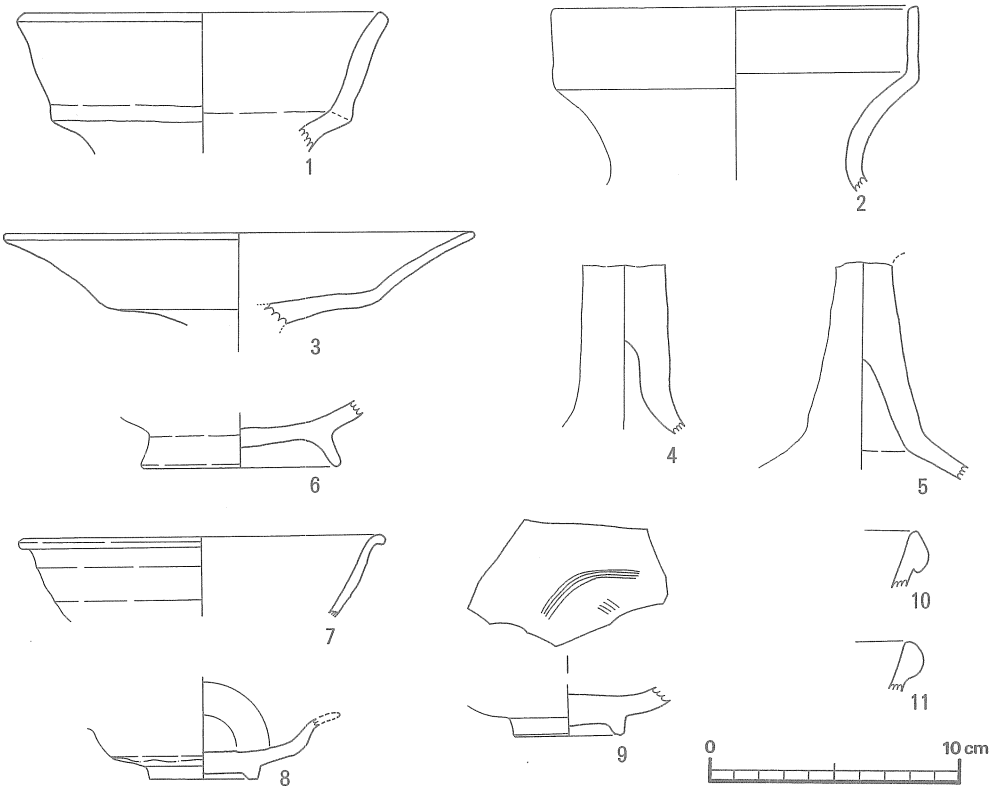
図	番号	出土区	層位	標高(m)	器形	部位	色調 外	色調 内	胎土	焼成	調整・施文 外	調整・施文 内	備考
20	1	P	茶褐砂	3,229	甕	口縁部	黒褐	黒褐	多量の砂を含む	良	1→A	1	外面スス付着，口縁内側指頭圧痕
	2	B	暗灰黒	3,238	〃	〃	黒褐	黒褐	細粒を含む	〃	1→A	1	外面スス付着
	3	A	〃	3,292	〃	〃	黒褐	黒褐	細粒を含む	〃	1→A	1	外面スス付着
	4	1T			〃	〃	黒褐	黒褐	〃　〃	〃	1→A	1	〃
	5	A	暗灰黒	3,233	〃	〃	黒褐	黒褐	〃　〃	〃	1→A	1	〃
	6	1T			〃	〃	黒褐	黒褐	〃　〃	〃	1→A	1	〃
	7	B	暗灰黒	3,22	〃	〃	灰褐	黒褐	〃　〃	〃	1→A	1	〃
	8	A	〃	3,121	〃	〃	黒褐	黒褐	細粒を含む	〃	1→A	1	外面スス付着，口縁内側指頭圧痕
	9	B	〃	3,238	〃	〃	灰褐	黒褐	〃　〃	〃	2	1	外面スス付着
	10	A	〃	3,271	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	11	A	〃	3,243	〃	〃	灰褐	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	口縁内側指頭圧痕
	12	1T			〃	〃	黒褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	13	A	暗灰黒	3,287	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	14	A	〃	3,106	〃	〃	淡褐	黒褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	15	A	〃	3,198	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	16	B	〃	3,2	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	17	B	〃	3,198	〃	〃	茶褐	茶褐	細粒を含む	〃	1→B,C	1	沈線・刺突
	18	B	〃	3,413	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	口縁内側指頭圧痕
	19	A	〃	3,258	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	外面スス付着
	20	B	〃	3,318	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	〃
	21	A	〃	3,238	〃	〃	黒褐	灰褐	細粒を含む	〃	1	1	〃
	22	A	〃	3,227	〃	胴部	黒褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
	23	A	〃	3,187	〃	〃	淡褐	灰褐	細粒を含む	〃	2→A	1	〃
	24	A	〃	3,287	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
	25	1T			〃	〃	黒褐	黒褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
	26	B	暗灰黒	3,267	〃	〃	黒褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
	27	A	〃	3,246	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1	1	〃
	28	A	〃	3,272	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
21	29	A	〃	3,258	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
	30	B	土壙	2,958	〃	〃	灰褐	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	
	31	1T			〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	外面スス付着
	32	A	暗灰黒	3,328	〃	〃	黒褐	黄褐	細粒を含む	〃	2→A	1	〃
	33	A	〃	3,21	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	〃
	34	A	〃	3,21	〃	〃	黒褐	黒褐	細粒を含む	〃	2→A	1	〃
	35	A	〃	3,205	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	?→A	?	
	36	1T			〃	〃	褐	褐	細粒を含む	〃	1→A	1	外面スス付着
	37	B	暗灰黒	3,309	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	38	A	〃	3,297	〃	〃	淡褐	淡褐	粗粒を含む	〃	2	1	外面スス付着
	39	A	〃	3,215	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	2	1	
	40	A	〃	3,195	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	2	1	
	41	A	〃	3,317	壺	肩部	赤褐	黒褐	細粒を含む	〃	1→B	1	沈線十重孤文
	42	A	〃	3,225	〃	〃	褐	褐	細粒を含む	〃	1→B	1	沈線
	43	A	〃	3,258	〃	〃	灰褐	灰	細粒を含む	〃	1→B	1	沈線
	44	A	〃	3,297	〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→B	1	沈線
	45	A	〃	3,238	〃	〃	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1→B	1	沈線
	46	A	〃	3,22	〃	頸部	灰褐	灰褐	粗粒を含む	〃	1→B	1	沈線
	47	1T			〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1→A	1	
	48	B	表採		〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	外面スス付着
	49	1T			〃	〃	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	
	50	A	暗灰黒	3,213	〃	口縁部	灰白	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	口唇に刻み
	51	1T			不明	底部	黒褐	灰褐	細粒を含む	〃	1	1	器壁最下部指頭圧痕
	52	A	暗灰黒	3,212	甕	底部	灰褐	灰褐	細粒を含む	〃	1	1	
	53	A	〃	3,212	鉢形	台部	淡褐	淡褐	細粒を含む	〃	1	1	

調整：1ーナデ，2ーハケ
施文：Aー刻目，Bー沈線，Cー刺突

※出土区の「1T」は試掘時のもの

(3) **土師器・陶磁器**（第22図，図版20）

1は複合口縁壺で，口唇部はササラ状のものでナデている。復元口径約15cm。2は複合口縁壺である。肩から頸部が外反しながら立ち上がり，さらに内傾気味の口縁を作る。胎土に細砂を含むものの焼成良好で，色調は内外面ともに赤褐色である。3は高坏坏部で，浅い坏部から外面に稜を僅かにつけて口縁部が外反しながら付く。口唇部は丸くおさめる。調整不明。復元口径約19cm。4は高坏の円筒状の脚部で，僅かに屈折しながら裾部を作る。5は高坏の脚部で，細身の脚部から屈折しながら裾部を作る。脚部はヘラ状のものでナデつけしたものか，僅かに稜線が見える。6は高台付椀で，高く踏ん張る高台を持つ。調整は不明。胎土は精良で，焼成は良好である。7は中世陶器椀と考えられる破片で，胎土・焼成は良好である。青灰色の緻密な粘土を使用している。灰釉かと思われる。ロクロ挽き。8は近世陶器の平縁の皿と思われる。内面は蛇の目はぎで，灰釉である。9は青磁の椀で，ケズリ出しの高台を持つ。釉はすんだ緑色で，畳付には施釉しない。内面見込み部に4条のクシ描き文を有する。内外面に嵌入。胎土は粘りのある灰色粘土を使用する。焼成は良好である。10，11はともに白磁の玉縁の椀で灰白色の釉。焼成は良好である。



第22図　土師器・陶磁器実測図（S－1／3）

2．石器（第23～26図，第５～９表，図版21～24）

石器では石鏃37点，削器・掻器136点，石錐11点，石匙２点，尖頭状石器２点，彫器６点，礫器17点，使用痕のある剥片396点，碇石１点，砥石１点，磨製石斧片５点，石庖丁１点，剥片585点，石核50点，二次加工石器10点が出土した（総数1,904点）。

使用された石材は，黒曜石が最も多く，全体の60.03％を占める。これに次いで安山岩が34.92％を占め，２つの石材に対する依存度は94.95％となり極めて高い(第７表)。各種石器への利用率についても特定の器種以外については，石材は黒曜石・安山岩で占められており，特に黒曜石については原石の出土も多いことから，これらに対する石材としての依存度の高さが窺える(第９表)。実測図として掲載したものは出土総数のごく一部に過ぎないが，以下器種ごとに記述していく。

石鏃（第23図，図版21）

出土資料はすべて無茎のもので，いわゆる凹基式のものである。

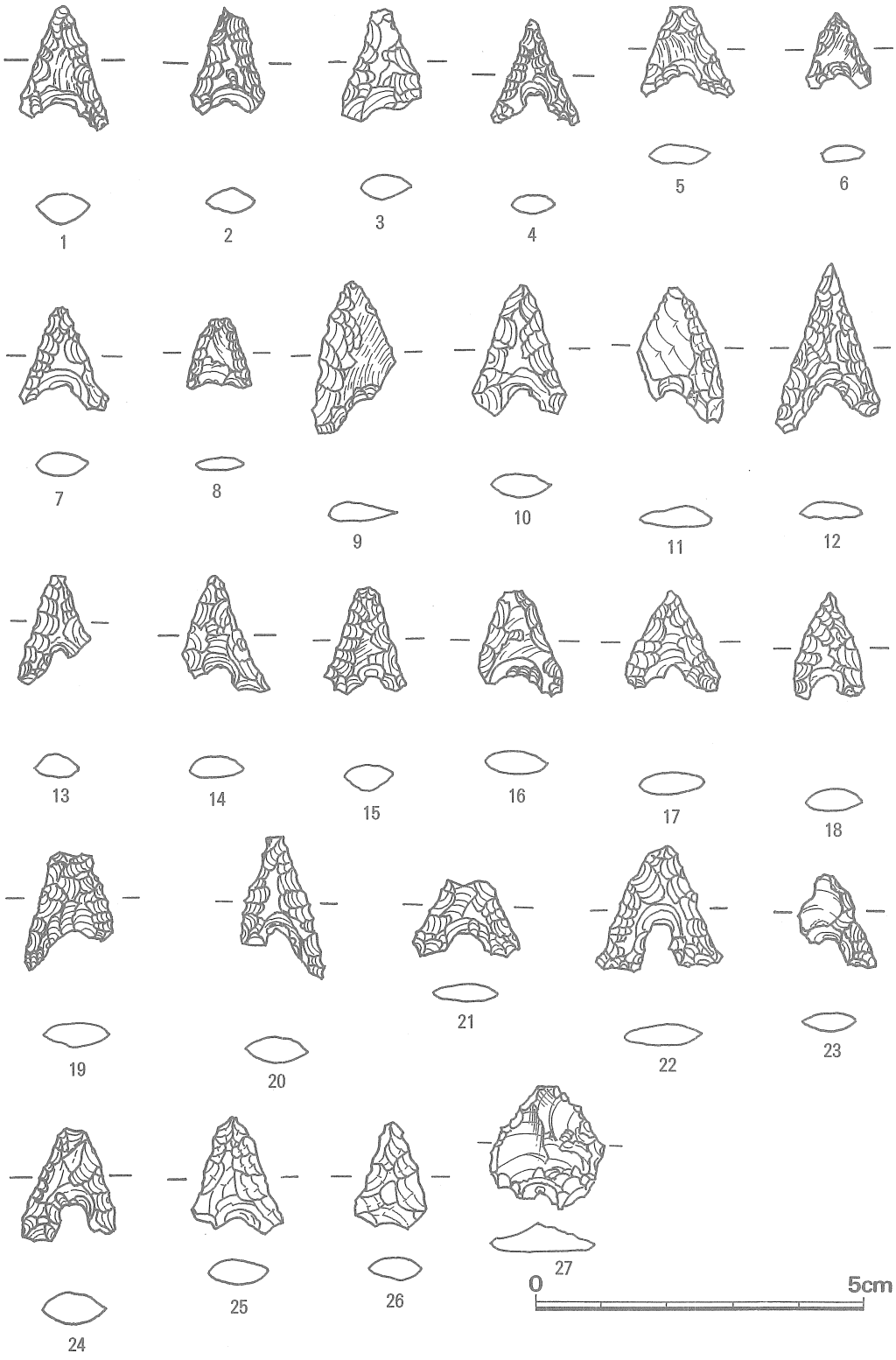
ａ類　基部に浅い抉りを有し，脚部の作出が弱いもの。２・３・８・26・27がこれに該当する。27は一部鋸歯状を呈する剥片鏃である。

ｂ類　基部に小さい抉りを有し，短い脚をもつもの。１・５～７・９～11・13・15～19・21・25がこれに該当する。７は石鏃と思われるが，左右対称でなく，一方の側縁のみに細かい剥離を施していることから，別の用途も考えられる。18の両側縁はやや外湾している。

ｃ類　基部の抉りが深く，明確に脚部を作出するもの。４・12・14・20・22～24がこれに該当する。鋭角な抉りを有するもの（12・20）と脚端部が直線的で隅丸方形状の抉りを有するもの（４・14・22～24）がある。後者はいわゆる鍬形鏃である（24を除く)。14の両側縁はやや内湾する。20の両側縁は鋸歯状を呈する。

削器・掻器類（第24図28～46，図版22）

28はブランティングに近い剥離を施す。ヴァルヴは取り除かれていない。打面調整を有する。漆黒色の黒曜石製。29は小剥片の端部・周縁部にリタッチを施し，微細な急角度のスクレーパー面を作っている。若干ローリングが認められるものの，表面に線状の擦痕が観察される。漆黒色の黒曜石製。30は薄手のサヌカイトの剥片の両側面にリタッチを施している。31は打面は狭小でほとんど残さず，左側縁にリタッチを施す。灰色の黒曜石製。32はサヌカイト製で上部は若干凹刃状を呈している。33・35・36は全体に粗い剥離であるが，刃部は両面から細部加工を施している。34の刃部は鋸歯状を呈する。安山岩製。37は90度ずつ打点を変える石核より剥離された，やや大形の剥片を利用している。安山岩製。38は一部に自然面を残す安山岩の剥片の片側縁に腹面側から鋸歯状の剥離を施す。39の細部加工は片面からのみ施されている。40は自



第23図　石器実測図①（1/1）

然の転石を用いており，自然面が摩滅している。全体にエッジを付ける。灰色の黒曜石製。41は灰色の黒曜石の小型剝片を用い，周縁に急角度のリタッチを施す。42はやや厚めの剝片を使い，周縁に急角度のリタッチを施す。稜線上に使用痕が認められ，主要剝離面にも擦痕が観察される。漆黒色の黒曜石製。43は小石核から剝離した漆黒色黒曜石の小さな剝片を利用し，その端部に鈍角のリタッチを施しスクレーパーとしている。打面は自然面を残し未調整である。ローリングを受け，稜線がつぶれている。44は小型の縦長剝片を利用し，端部にノッチ状の鈍角のエッジを作る。灰色の黒曜石製。45は小剝片の右側縁にノッチを作出し，周縁には微細な使用痕が見られる。ローリングのため稜線がつぶれている。漆黒色の黒曜石製。46はやや厚手のサヌカイト製で，縁辺部下端を粗く調整したのち，両面に細部加工を施して，スクレーパー面を作出している。上部も同様にして凹刃状のスクレーパー面を作出している。

石錐（第24図47～52，図版22）

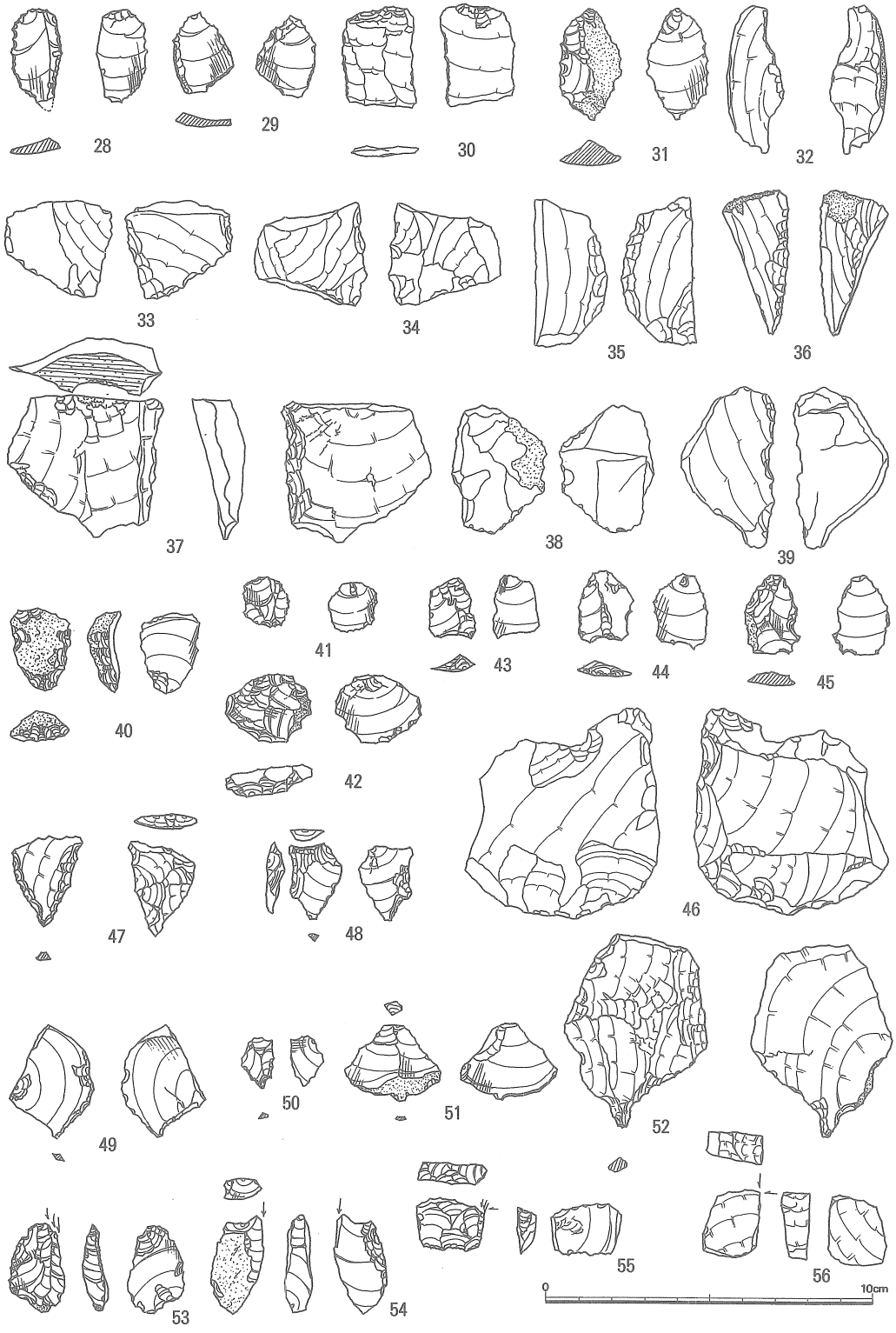
47は表から主要剝離面の方へ急角度のエッジを付ける。サヌカイト製。48は黒曜石剝片の左側縁にノッチを施し，その端部に断面三角形のドリル面を作出する。49は灰色の黒曜石製で，細部加工のみによりスクレーパー面・ドリル部を作出する。50は灰色の黒曜石を素材とし，その形状に大きな変更を加えることなく，部分的な加工によりドリル部を作出する。51は小石核から剝離された剝片を使用し，端部にリタッチで小さなドリル部を作り出す。一部に自然面を残す。光沢の著しい漆黒色の黒曜石製。52は大型の石錐である。サヌカイトのやや肉厚の剝片を素材とし，端部に両面からの加工によりドリル部を作出する。主要剝離面に自然面を残す。

彫器（第24図53～56，図版22）

53は剝片の先端を表から裏へ調整し，その後３条の樋状剝離で彫刻刀面を作り出している。ローリングによるものか稜線がつぶれている。54は剝片の打面を除去(一部残存)し，３条の樋状剝離とこれに直交する１条の樋状剝離を施して，彫刻刀面を作り出している。石材はいずれも漆黒色の黒曜石である。55はバルブを横からの加撃で除去したあと，１条の樋状剝離で彫刻刀面を作り出している。一部に自然面を残す。全体的にローリングを受けているため稜線がつぶれている。黒曜石製。56は四角柱に近い剝片を利用し，彫刻刀面を作る。石材は安山岩である。

剝片（第25図57・58，図版23）

57はかなり大型の石核から剝離されており，自然面を多く残し，不純物も多い。通有の石核の使い方と同じで打面を90度ずつ変えながら作られている。光沢の著しい漆黒色の黒曜石製である。58は良質の漆黒色の黒曜石製の薄い剝片で，打面に自然面を残す。



第24図　石器実測図②（1／2）

使用痕のある剝片（第25図59～65，図版23）

59は光沢の著しい漆黒色の黒曜石製。一部に自然面を残し，先端部に微細な使用痕を残す。60はやや厚手のサヌカイト製で，一部に自然面を残し，両側縁に微細な使用痕を残す。61は灰色の黒曜石製で，主要剝離面を残し，断面は三角形を呈する。62・63はいずれも薄いサヌカイト製で，周縁に微細な使用痕を残す。64はやや縦長の剝片で周縁に使用痕がある。透明度の高い黒曜石製。65は打面調整を施した小石核より剝離した剝片を使用し，３縁辺に使用痕を残す。漆黒色の黒曜石製。

尖頭状石器（第25図66～68，図版23）

66は打面を残しており，縁辺部には片面からのみのリタッチを施している。67は横広の厚い剝片を素材としている。断面三角形である。左側縁は表裏からの調整により刃部を作出しているが，右側縁は調整の後が見られるものの，刃部を形成するには至っていない。68は表裏ともに入念な加工が施され，胴部に最大の厚みをもち，形状は三角形状を呈する。いずれも安山岩製。

石核（第25図69～71，図版23）

69は自然面を一部残し，４周よりフレークを剝離している。安山岩製。70は裏面に打点を残し，主要剝離面には打面調整の跡が見られる。サヌカイト製。71は打面を作出せず剝離している。安山岩製。

石匙（第26図１・２，図版24）

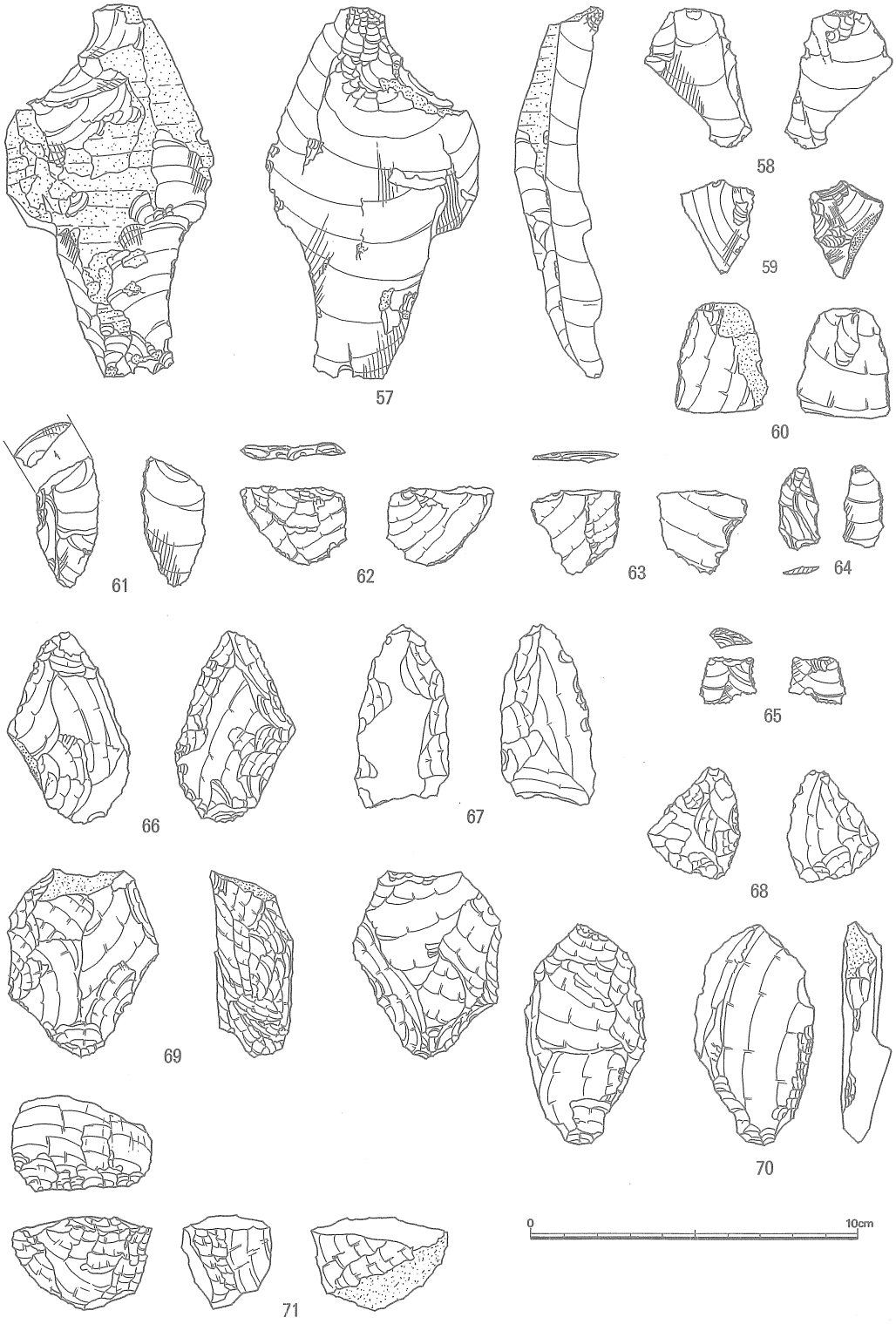
72は幅広のつまみ部をもつ縦型石匙である。サヌカイト製。73は横型の石匙で，周辺のみ二次加工が施され，刃部，つまみ部を作り出している。つまみ部は抉りが浅く，小さい。表裏両面から調整が施され，刃部はジグザグ状を呈している。

礫器（第26図74～77，図版24）

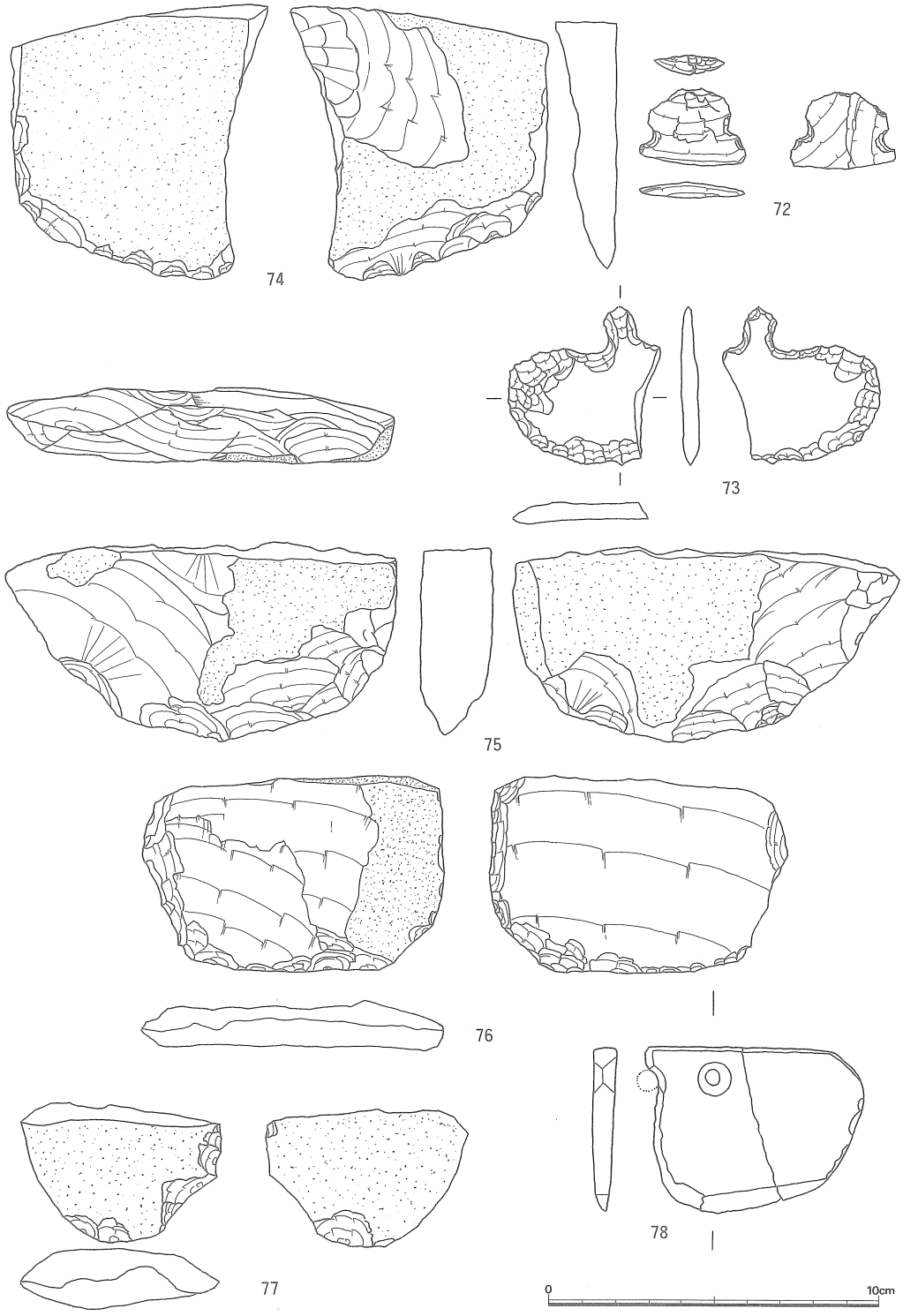
74は偏平な輝石安山岩を利用し，細かい剝離を両面から施して一辺に刃部を作り出している。自然面を多く残す。75は偏平な安山岩を利用し，一辺に両面から交互に剝離を施してジグザグ状の刃部を作り出している。76は偏平な安山岩の礫を使用しており，厚さを減ずるため，周縁よりリタッチ，その後刃部を作り出す。77は安山岩の自然転石を利用してリタッチで刃部を作る。

石庖丁（第26図78，図版24）

78は硬質粘板岩製で，明瞭な片刃を有する。復元全長11cm。断面形は背部から左右端部にかけてしだいに薄くなる。刃部にかけてはほとんど厚さを減じない。左右の肩は下がる。



第25図　石器実測図③（1/2）



第26図　石器実測図④（1/2）

第5表　石鏃計測表

図	番　号	出土区	標高(m)	出土層位	石　材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
23	1	I	3.175	灰白粘	ob.	1.9	0.8	0.5	0.65	
	2	H	3.13	〃	〃	2.0	0.7	0.4	0.45	
	3	H	3.167	〃	〃	2.2	0.8	0.4	0.45	
	4	L′	2.911	青　砂	〃	1.7	0.7	0.3	0.3	鍬形
	5	P	3.195	橙　礫	〃	1.7	0.9	0.3	0.4	
	6	I	3.053	茶　貝	〃	1.3	0.7	0.25	0.25	小型
	7	P	3.639	茶　褐	〃	1.7	0.8	0.3	0.4	
	8	S		橙　礫	〃	1.3	0.8	0.2	0.2	小型
	9	G	3.132	灰白粘	〃	2.4	1.1	0.3	0.8	
	10	G	3.11	〃	〃	2.5	1.0	0.4	0.8	
	11	G	3.068	〃	An.	2.3	1.1	0.3	0.7	
	12	G	2.983	〃	ob.	2.6	0.9	0.3	0.7	
	13	H	3.185	〃	〃	1.9	0.7	0.4	0.35	
	14	H	3.194	〃	〃	1.8	0.8	0.3	0.45	鍬形
	15	H	3.147	〃	〃	2.3	0.7	0.4	0.35	
	16	H	3.145	〃	〃	1.9	1.0	0.4	0.5	
	17	I	3.159	〃	〃	1.7	1.0	0.4	0.5	
	18	I	3.114	〃	〃	1.6	0.8	0.2	0.35	
	19	I	3.08	〃	〃	2.2	1.0	0.4	0.5	
	20	P	3.635	茶　褐	〃	2.4	1.0	0.4	0.6	鋸歯
	21	R		橙　礫	〃	1.9	1.0	0.3	0.4	
	22	H	2.857	茶　貝	ob.	2.3	1.2	0.3	0.65	鍬形
	23	F	2.955	灰白粘	〃	1.5	0.8	0.3	0.3	〃
	24	I	3.114	〃	〃	1.9	0.9	0.5	0.65	
	25	O	3.785	茶　褐	An.	2	0.9	0.4	0.6	
	26	O	3.773	黒　褐	ob.	2	0.8	0.35	0.45	
	27	F	3.077	灰白粘	〃	2.1	1.6	0.45	1.25	鋸歯

第6表　石器観察表①

図	番　号	出土区	標高(m)	出土層位	器　種	石材	備　　考
24	28	H	2.92	茶　貝	スクレーパー	ob.	打面調整を有する
	29	O	3.712	青　粘	〃	〃	表面に擦痕
	30	H	2.902	茶　貝	〃	An.	
	31	T		橙　礫	〃	ob.	
	32	Q	3.26	青　砂	〃	An.	凹刃状を呈す
	33	C	3.349	暗黒灰	〃	〃	
	34	1T			〃	〃	鋸歯状の刃部
	35	1T			〃	〃	
	36	C	3.349	暗黒灰	〃	〃	
	37	D	3.37	灰　白	〃	〃	
	38	O′	3.375	青　粘	〃	〃	鋸歯状の刃部

石材：ob.―黒曜石，An.―安山岩

※標高の記入のないものは水洗による
出土区の「1T」は試掘時のもの

石器観察表②

図	番　号	出土区	標高(m)	出土層位	器　種	石材	備　　考
24	39	O′	3.28	青　砂	スクレーパー	An.	片面のみの細部加工
	40	F	2.933	茶　貝	〃	ob.	
	41	H	2.926	〃	〃	〃	
	42	O′	3.378	青　粘	〃	〃	使用痕を有する
	43	P	3.338	〃	〃	〃	打面末調整，磨滅
	44	H	2.983	茶　貝	〃	〃	
	45	H	3.129	灰白粘	〃	〃	使用痕を有する
	46	I	3.16	〃	〃	An.	
	47	Q	3.202	青　粘	石錐	〃	
	48	H	3.059	灰白粘	〃	ob.	
	49	P	3.25	青白砂	〃	〃	
	50	T		橙　礫	〃	〃	
	51	C	3.377	暗黒灰	〃	〃	
	52	Q	3.017	灰白粘	〃	An.	
	53	I	3.11	灰白粘	彫器	ob.	３条の樋状剥離
	54	O	3.166	青　粘	〃	〃	３条の樋状剥離とこれに直交する1条の樋状剥離
	55	H	3.135	灰白粘	〃	〃	１条の樋状剥離
	56	S		橙　礫	〃	An	
25	57	O	3.837	黒　褐	剥片	ob.	
	58	P	3.739	茶　褐	〃	〃	
	59	I	2.842	青灰砂	使用痕のある剥片	〃	
	60	Q	3.331	青　粘	〃	An.	
	61	B	3.178	暗黒灰	〃	ob.	
	62	H	2.861	茶　貝	〃	An.	
	63	H	3.116	灰白粘	〃	〃	
	64	H	3.163	〃	〃	ob.	
	65	H	2.859	茶　貝	〃	〃	３縁辺に使用痕を残す
	66	1 T			尖頭状石器	An.	打面を残す
	67	1 T			〃	〃	断面三角形,片面にのみ刃部作出
	68	D	3.349	灰白粘	〃	〃	断面三角形,全面に入念な加工を施す
	69	B	3.273	暗黒灰	石核	〃	４周より剥片を剥離
	70	L	3.049	青　粘	〃	〃	打面調整あり
	71	D	3.367	灰白粘	〃	〃	打面を作出せず
26	72	H	2.948	茶　貝	石匙	〃	縦型
	73	R		橙　礫	〃	〃	横型
	74	H	2.884	灰白粘	礫器	輝安	
	75	K	2.809	青　貝	〃	〃	
	76	P	3.752	茶　褐	〃	An.	
	77	Q	3.306	青　粘	〃	〃	
	78	H		表　土	石庖丁	粘板岩	片刃

第7表　石材別一覧表

石材 / 調査区	黒曜石	安山岩	輝石安山岩	砂岩	結晶片岩	蛇紋岩	石英	軽石	凝灰岩	計
A	6	10			1				1	18
B	12	18				1				31
C	11	11								22
D	14	9						1		24
E										—
F	29	3	1			1				34
G	100	54	5			2	1	1		163
H	277	152	30			1		2		462
I	225	109	7		1	3		1		346
J	1	1								2
K	4	5			1	1		1		12
L	5									5
L′	1									1
M	10	10								20
N										—
O′	30	31				2				63
O	88	36				2				126
P	53	40	3			1				97
Q	101	47	7							155
R	54	26	3	1						84
S	86	64	3							153
T	36	39	7			2	1			86
U										—
計	1,143	665	67	1	3	16	2	6	1	1,904

第8表　石器組成一覧表

器種 / 調査区	剥片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸？	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石？	砧石？	原石	計
A	4	1	1		2	8		1							1			18
B	10	5	5		6	5												31
C	4	3	5	1	3	3			2	1								22
D	9	2	3		2	4							2				2	24
E																		—
F	3	19	4		1	3		2									2	34
G	39	44	57	1	3	3		5						2			9	163
H	194	71	128	3	5	20	2	11			1			9			18	462
I	112	75	95	2	1	13	1	8	3					4		1	31	346
J	1				1													2
K	2	4	2		1							1		1			1	12
L	2				2												1	5
L′								1										1
M	8	1	4		1	4											2	20
N																		—
O′	16	19	7		2	15		2				1					1	63
O	54	29	18	1	3	13	1	2	1			2					2	126
P	22	22	18	1	3	18	1	3	2			1					6	97
Q	41	28	19		12	15			1					1			38	155
R	14	22	19	1		1		1			1						25	84
S	36	40	35		1	7	1	1									32	153
T	14	11	32		1	4			2								22	86
U																		
計	585	396	452	10	50	136	6	37	11	1	2	5	2	17	1	1	192	1,904

第 9 表　石器器種別一覧表①

石材：黒―黒曜石，安―安山岩，結片―結晶片岩，凝―凝灰岩，蛇―蛇紋岩，軽―軽石，輝安―輝石安山岩

	石材	器種／層位	剝片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸？	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石？	磨石？	原石	計
A	黒	暗灰	2	1				2												6
	安	〃	2					6												10
	結片	〃			1															1
	凝	〃															1			1
	計		4	1	1		2	8		1							1			18
B	黒	暗灰	1	3	3		4													11
		遺構						1												1
	安	暗灰	9	1	1		1	3												15
		遺構		1			1	1												3
	蛇	遺構			1															1
	計		10	5	5		6	5												31
C	黒	暗灰	2		4	1		1			2	1								11
	安	暗灰	2	3	1		3	2												11
	計		4	3	5	1	3	8			2	1								22
D	黒	灰白	5	2	2			1											1	11
		暗灰	2		1															3
	安	灰白	1				2	2							2					7
		暗灰	1					1												2
	軽	灰白																	1	1
	計		9	2	3		2	4							2				2	24
F	黒	灰白		12	2			3		2										19
		茶貝	3	5	1		1													10
	安	灰白			1															1
		茶貝		2																2
	蛇	灰白																	1	1
	輝安	茶貝																	1	1
	計		3	19	4		1	3		2									2	34

石器器種別一覧表②

	石材	層位 \ 器種	剝片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸?	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石?	砧石?	原石	計
G	黒	灰白	8	20	22		1	1		3									6	61
		茶貝	8	16	4	1	1	2		1										33
		青貝	1	4															1	6
	安	灰白	10	3	23		1			1										38
		茶貝	11		3															14
		青貝	1	1																2
	輝安	灰白			1															1
		茶貝			1															1
		青貝			1											2				3
	石英	灰白																	1	1
	軽	〃																	1	1
	蛇	〃			2															2
	計		39	44	57	1	3	3		5						2			9	163
H	黒	灰白	89	12	65	3	3	7	2	9									12	202
		茶貝	14	34	11		2	8		1									2	72
		青貝		1						1									1	3
	安	灰白	73	5	40			3												121
		茶貝	8	17	2			2					1							30
		青貝		1																1
	輝安	灰白	10	1	3											3				17
		茶貝			5											6			1	12
		青貝			1															1
	蛇	灰白			1															1
	軽	〃																	2	2
	計		194	71	128	3	5	20	2	11			1			9			18	462

石器器種別一覧表③

	石材	層位 \ 器種	剝片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸?	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石?	砧石?	原石	計
I	黒	灰白	47	66	47	2		9	1	8	3								28	211
		青砂	3	3			1	1												8
		青貝	3		2														1	6
	安	灰白	58	4	40			3												105
		青砂		2																2
		青貝	1															1		2
	輝安	灰白			2											2				4
		青砂			1															1
		青貝														2				2
	蛇	灰白			3															3
	軽	〃																	1	1
	結片	〃																	1	1
	計		112	75	95	2	1	13	1	8	3					4		1	31	346
J	黒	青粘	1																	1
	安	青砂					1													1
	計		1				1													2
K	黒	青粘		3																3
		青砂					1													1
	安	青粘	1	1	1															3
		青砂	1		1															2
	軽	青砂																	1	1
	蛇	青粘												1						1
	輝安	青貝														1				1
	計		2	4	2		1							1		1			1	12
L	黒	青粘	1																	1
		青砂	1				2													3
		青貝																	1	1
	計		1				2												2	5
L′	黒	青砂								1										1
	計									1										1

石器器種別一覧表④

	石材	層位 \ 器種	剝片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸?	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石?	碇石?	原石	計
M	黒	橙礫	5	1	1		1												2	10
	安	〃	3		3			4												10
	計		8	1	4		1	4											2	20
O′	黒	青粘	1	3	4			2											1	11
		青砂	4	5	1			3		2										15
		橙礫	1	3																4
	安	青粘	1	3				6												10
		青砂	7	2	1		2	3												15
		橙礫	2	3				1												6
	蛇	青粘												1						1
		青砂			1															1
	計		16	19	7		2	15		2				1					1	63
O	黒	茶褐	1	1		1													2	5
		黒褐	3	1	3			1												8
		青粘	36	17	11		1	8	1											74
		青砂	1																	1
	安	茶褐								2										2
		黒褐	1					1												2
		青粘	12	9	4		2	3	1		1									31
		青砂		1																1
	蛇	青粘												1						1
		青砂												1						1
	計		54	29	18	1	3	13	1	2	1			2					2	126

石器器種別一覧表⑤

	石材	層位 \ 器種	剝片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸?	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石?	礎石?	原石	計
P	黒	茶褐	1					1		1										3
		茶褐砂	2	1						1										4
		青粘		1	3		1	4												9
		青砂	7	10	3	1	1	8											6	36
		橙礫								1										1
	安	茶褐						1												1
		茶褐砂			1															1
		青粘	2	3				2	1		1									9
		青砂	10	7	8			2			1									28
		橙礫					1													1
	蛇	青砂												1						1
	輝安	〃			3															3
	計		22	22	18	1	3	18	1	3	2			1					6	97
Q	黒	青粘	23	13	1		7	1											38	83
		青砂		4	3		4	4												15
		橙礫	3																	3
	安	青粘	7	6	6		1	4								1				25
		青砂	8	4	2			6			1									21
		橙礫		1																1
	輝安	青粘			2															2
		青砂			3															3
		橙礫			2															2
	計		41	28	19		12	15			1					1			38	155
	黒	橙礫	6	15	8	1				1									23	54
	安	〃	8	7	8			1					1						1	26
	輝安	〃			3															3
	砂	〃																	1	1
	計		14	22	19	1	12			1			1						25	84

石器器種別一覧表⑥

	石材	器種 / 層位	剝片	U-f	chip	二次加工石器	石核	scraper	彫器	石鏃	石錐	石鋸?	石匙	磨製石斧	尖頭状石器	礫器	砥石?	礎石?	原石	計
S	黒	橙礫	17	30	5			1		1									32	86
	安	〃	19	10	27		1	6	1											64
	輝安	〃			3															3
	計		36	40	35		1	7	1	1									32	153
T	黒	黒褐		2																2
		橙礫	3	6	3			3			1								18	34
	安	黒褐	1																	1
		橙礫	10	3	23			1			1									38
	輝安	黒褐																	1	1
		橙礫			4														3	7
	蛇	〃			2															2
	石英	〃					1													1
	計		14	11	32		1	4			2								22	86

3．木質遺物（第27・28図，図版12・25）

調査において確認された遺構（杭列・板列）に伴うものとして，多数の杭・板が出土しているが，C^{14}年代測定に提出した試料および類似試料として以下の4点を図示した。（1～3―第27図・4―第28図）

1．E－F区杭（出土位置については第9図参照）

材は不明である。荒割りの後，先端部を正面および両側面から加工しており，明瞭な加工痕を残す。先端は鋭く，断面三角形を呈す。長さ40cm，直径5.8cmである。

2．T区杭（出土位置については第13図参照）

材は不明である。隅丸方形の材を加工しているが，その痕跡は不明瞭である。先端部はつぶれている。残存部の長さ19cm，厚さ4cmで，断面は隅丸方形を呈す。

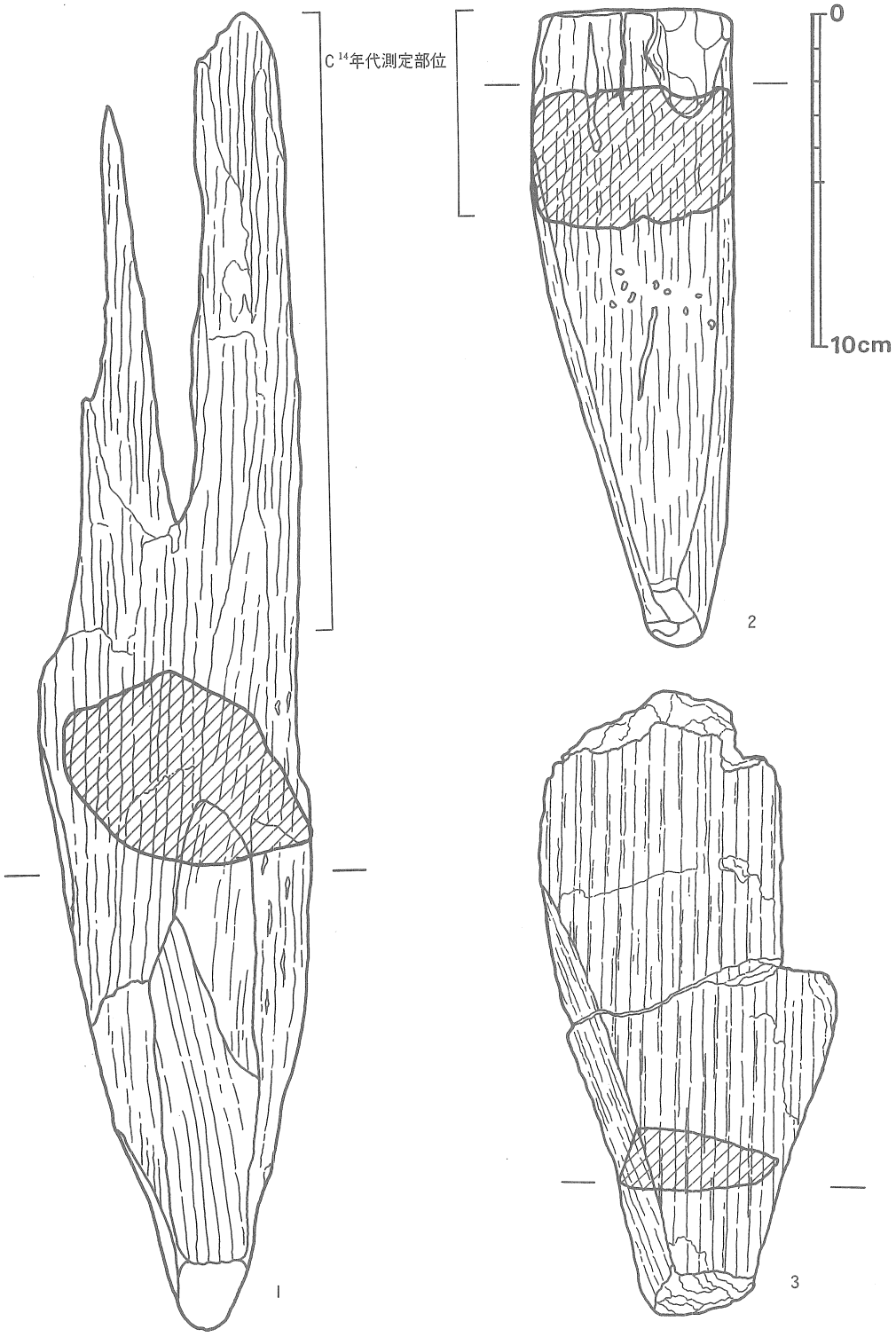
3．T区板（出土位置については第13図参照）

材は不明である。矢板状の板で上部は欠損し，先端部はつぶれている。先端部は両側面から加工されている。残存部の長さ19cm，厚さ2cmである。

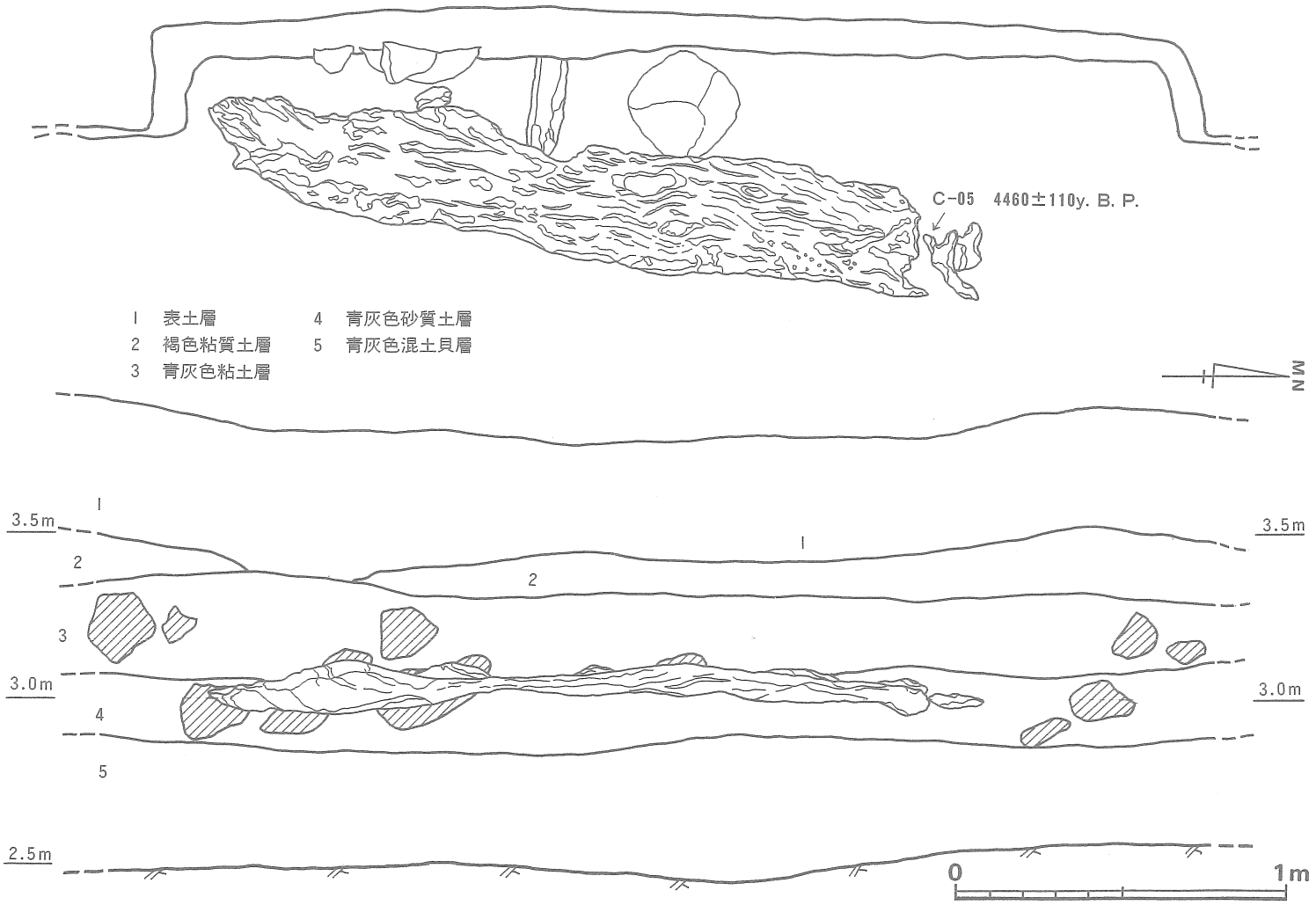
4．板状木質遺物（第28図）

青灰色の砂質土に乗った，ほぼ水平の状態で出土し，出土位置は標高3mを測る。長さ2.1m。その形態から丸木舟ではないかと思われたが，枝部分のこぶ状の部位が大きく残り，加工痕も不明であることから，自然遺物と判断した。出土区の基盤は凝灰角礫岩で，カキの付着が認められ，また遺物包含層に木片が滞留・堆積した状態が見られ，この遺物も漂着物であると推察される。このことから，出土標高が当時の最高水位を示すと思われる。

C^{14}年代測定は，1・2・4の実測図中で示した部位について，3については，同一遺構内の隣接する資料について行った。測定結果については，遺構実測図中に記載している（第9・13・28図）。



第27図　木質遺物実測図①（S－1/2）



第28図　木質遺物実測図②（S－1/20）

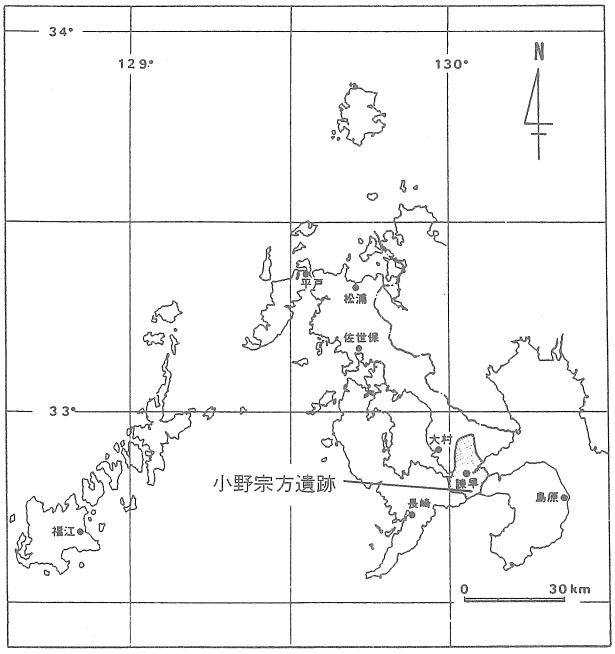
第４章　理化学分析

１．小野宗方遺跡出土貝類からの考察

日本貝類学会会員　山　本　愛　三

１．序

本遺跡は，平成３年12月～平成４年２月，同年７月～12月，平成５年６月～９月の３か年度にわたって調査がなされた。今回，この間に出土した貝類を中心とするブロックサンプルの分析依頼を受けた。この機会を与えて下さった元諫早市文化課秀島貞康氏，同川瀬雄一氏，同歴史資料調査員古賀力氏を始め関係諸氏に深甚の謝意を表するものである。



第１図　諫早市位置図

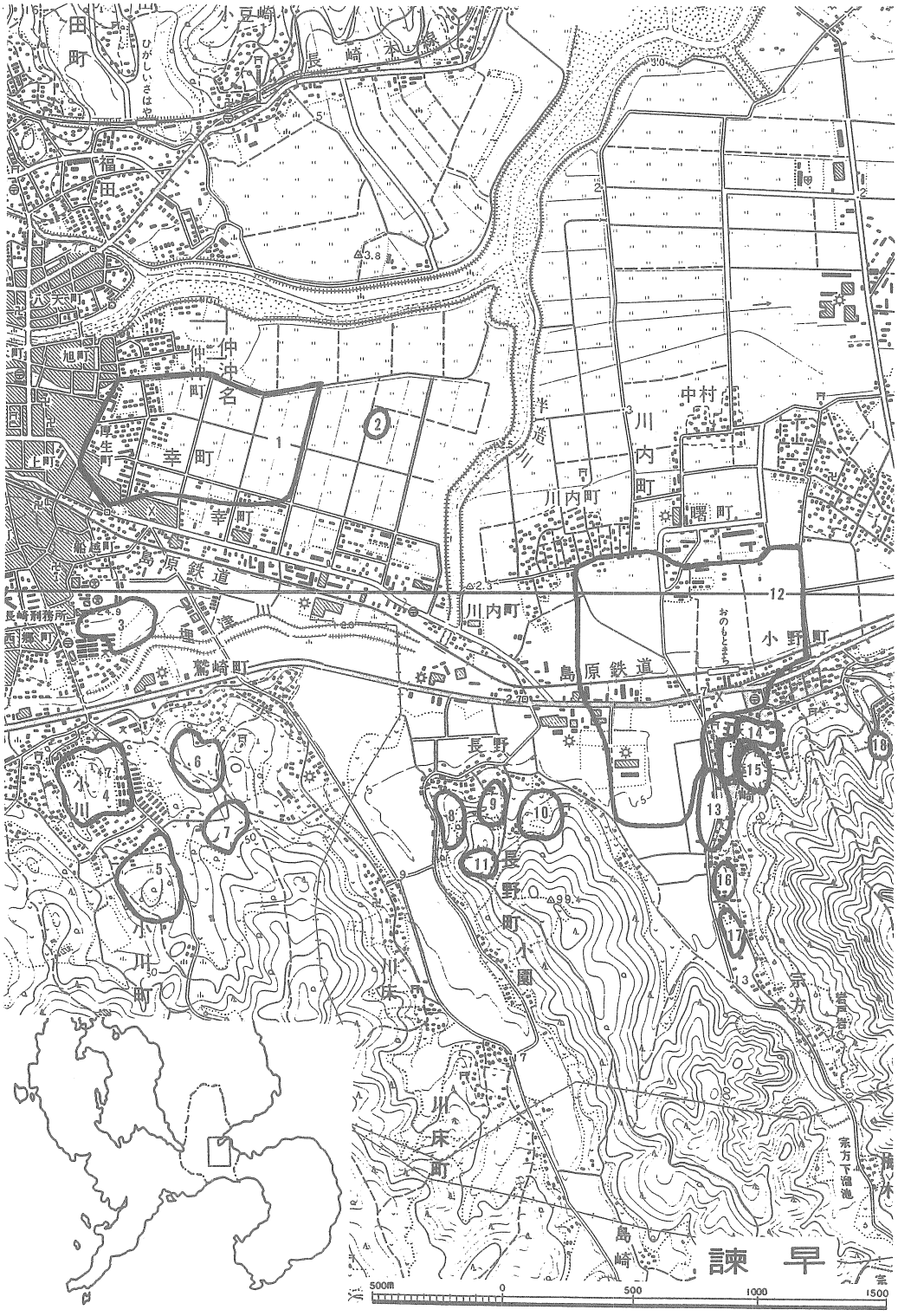
２．遺跡の所在と発掘概況

本遺跡は，第１図，第２図に示すように長崎県諫早市宗方町に所在し，市道宗方線の通学路としての歩道設置の整備事業に伴う調査として実施され，市道宗方線の西側を路線拡張の形で行われた。なお，第２図で示されたように本遺跡周辺には既知の遺跡が散在する。調査にあたっては，第３図に示すように，５ｍ間隔に分割し，Ａ～Ｕの計23のトレンチが設定された。

３．各トレンチの発掘概況

（弥生の層順について）

Ａ－Ｂでは表土の直下に暗灰黒粘土層があり，この層は亀ノ甲タイプの土器を主体とする包含層で弥生前期後半と査定された。この層はＣ区周辺ではかなり薄くなり，Ｄ区では消滅している。Ｅ－Ｆ区では杭列が確認されている。Ｇ・Ｈ・Ｉと続くがＫ・Ｅでは茶褐色粘質土層に



第２図　遺跡分布図（国土地理院発行１/25,000を使用）

第1表　遺跡地名表

	遺　跡　名	所　在　地	立　　地	標高	遺構・出土遺物等	時　期
1	田井原条里遺跡	諫早市幸町	水　　田	5 m		古代～中世
2	沖城跡	諫早市幸町	水田(微高地)	5 m	軒丸瓦，土管(瓦質)，陶器	
3	諫早農校遺跡	諫早市船越町	平　　野	10m	細型銅剣，弥生土器	弥　　生
4	林ノ辻遺跡A地点	諫早市小川町	丘陵全域	40m	弥生土器，土師器，土師質土器，箱式石棺，中世墓，祭祀遺構	弥生～中世
5	〃　　B地点	諫早市小川町	丘陵全域	50m	弥生土器	弥　　生
6	十仙原遺跡	諫早市鷲崎町	丘陵頂部	40m	黒曜石剝片，剝片	弥　　生
7	源内谷遺跡	諫早市小川町	丘陵鞍部	30m	黒曜石剝片，剝片	弥　　生
8	崎田遺跡	諫早市長野町	丘陵先端部	25m	弥生土器，黒曜石剝片	弥　　生
9	大久保遺跡	諫早市長野町	丘陵斜面	30m	黒曜石剝片	縄　　文
10	水葉山遺跡	諫早市長野町		20m		縄　　文
11	長野城跡	諫早市長野町	山　　頂	100m		中　　世
12	小野条里遺跡	諫早市小野町，川内町宗方町，長野町	水　　田	4 m	杭列，水路，弥生土器，土師器	弥生～中世
13	**小野宗方遺跡**	諫早市宗方町	水　　田	3 m	杭列，板列，縄文土器，弥生土器，中・近世陶器，青磁，白磁，石庖丁，石器多数	縄文～近世
14	宮崎館遺跡	諫早市宗方町	丘陵先端部	20m	ナイフ型石器，石鏃，弥生土器，土師器	旧石器～中世
15	小野城跡	諫早市小野町	丘陵頂部	40m	本丸，空掘，六地蔵石幢	中世～近世
16	水の手遺跡	諫早市宗方町	丘　　陵	10m		古　　墳
17	太郎丸遺跡	諫早市宗方町	平　　野	10m	弥生土器	弥　　生
18	小野貝塚	諫早市小野町	丘陵先端部	60m	弥生土器	弥　　生

変わる。横断道路設置の影響と思われる。L－L′では再び出現するが20～30ｃｍ大の礫を含むようになる。O－O′では厚さを増し，礫は小型化する。これら弥生の層順で特筆すべきことは，E－F区で認められる杭列や大型木板の出土である。この弥生の層順の直下からは灰白色粘土層が薄く堆積している。この層はH区でことに顕著である。分析の結果，この層はグライ土壌と断定した。即ち，水田の底盤層として発達する水田特有の土壌である。なお，このグライ土層に随伴して高師小僧が多数出土している。高師小僧は地下水等で溶解した鉄分が地中の植物遺体のまわりに褐鉄鉱として沈殿したもので，褐色中空の団塊を示すもので，水田であったことの証拠と考えられる。前記した杭列や大型木板も当時の水田の関係品ではないかと考えている。

（縄文前期の層順について）

前記，弥生前期後半の層順の直下に貝層が出土する。この貝層はE区では青灰色混土貝層として出現するが，F区では，茶色混土貝層と青灰色混土貝層が青灰色粘土層を挟んで現れ，貝層は２段になって出現する。この両貝層は時期を異にするものと思われる。G区ではサンドイッチ状に挟まれた青灰色粘土層は姿を消し，茶色混土貝層の直下に青灰色混土貝層が出現する。この傾向はH区でも同様であるが，I区では茶色混土貝層は姿を消し，この傾向はK・L・L′区も同様である。O′・O・Q区では貝層は姿を消す。これらの貝層は曽畑式土器を含み，縄文前期の層と査定された。

（基盤の層順について）

前記，縄文前期の貝層の下層は岩礁性礫層，更に基盤層になっており，E～L′区では凝灰角礫岩の露頭が見られる。そこでは１ｍ大の岩が点在し，所々にマガキガイの付着半片が見られる。H・I区ではビーチロック化が見られ，半凝固状態のものが発見された。上記貝層の底面は標高2.5mにあるが，H・I区方向すなわち南方向に進むにつれて傾斜して高度を増し，I区では標高2.5mでは基盤層は現れない。K区では貝層の上面では標高3.0m位になる。この傾向はL・L′区でも同様である。O′・O・P・Q区では貝層そのものが姿を消す。以上より海岸の凹地に投げ捨てられた形で貝塚が形成されたと考えられる。

４．資料の分析とその考察

ブロックサンプルとしての資料は，パンボックス３箱あり，貝類と土壌を主とするものであった。土壌分析用標準櫛で分別し，処理した。一部はH_2O_2法で抽出を行った。分析結果は第２表にまとめた。

表中のＢＳはブロックサンプルの意味である。ＢＳⅢは第４図，H区の縦線枠内より表土を

第３図　調査区設定図（１／1,000，１／200）

第３図　調査区設定図（１／1,000，１／200）

除き，10cmごとに抽出し上位より①→⑪とした。ＢＳⅣは第４図，Ｆ区の縦線枠内より同様に抽出したことを意味する。

５．貝類より見た遺跡形成時の地形の復元

基盤と考えられる岩盤にカキが付着していること，出土する貝類がすべて汀線帯に生息する種であることや前述したような貝層出現状況などより，本遺跡縄文前期相当の貝塚は汀線帯に形成された貝塚であると考えられる。更に詳細に観察するとL′区の北壁では貝層の上に炭化した小さい木片が一列に薄い層を形成しているのが発見された。これは汀線の窪地に投げ捨てられたカキ殻等の遺物が波で攪拌され，木片は浮力を増して，水面に浮いて一層を形成したと考えられる。このことは本遺跡の縄文前期の最高水位が標高2.8m付近にあった証拠であると判断してよいと考えている。

更に，出土貝類を中心に観察することにする。

マガキ　*Crassostra gigas*（Thunberg．1793）

潮間帯の岩礁に着生するか，砂礫底に密集してカキ礁を作ることもある。産卵適温は23°～30°ｃ，干出時間は総時間の59％を限界としているが，それ以上干出する所では生存できない。海水の比重も24.0を限度としているが，天然では汽水域でより繁殖する。分布は北海道，本州，四国，九州，朝鮮，中国であるが，より北上するほど大型化する。以上のマガキの特性と本遺跡の99.3％がマガキであること，そのすべてが異常に小型であることから，本遺跡形成の自然環境は内湾で川の流入があり，温度も現在より高かったと考えられる。

ヒネカネモリガイ　*Ochetoclava preifferi*（Dunker．1877）

潮間帯の岩礫の間にたまった砂地に生息する。

ハイガイ　*Tegillarca granosa bisenensis*（Schencn et Reinhardt．1938）

内湾の泥底に生息する。出土率が少ないので本遺跡周辺では泥底地の発達はなく，より離れたところに泥底地はあったと考えられる。

タマキビガイ　*Littorina brevicula*（Philippi．1844）

高潮帯の岩に着生する。小型で食料に不適であり，自然状態の混入と思われる。

イワフジツボ　*Chthamalus challengeri*（Hoek．1930）

高潮帯の岩礫に着生して内湾でもかなり奥まで分布する。食料には不適で自然混入と思われる。

６．まとめ

以上を総合すると，縄文前期，本遺跡形成時の自然環境は内湾岩礫海岸の汀線に発達した遺跡であることはタマキビ，イワフジツボ，フシカニモリ，マガキ等の出土からも言える。陸貝

が発見されないところから，陸貝の生息には不適な汀線に近い環境であったと考えられる。又，泥底地から離れていたことはハイガイの出現率の低いことからも推測される。マガキの出土量の多いことから，川の流入もあり適度に汽水化していて，マガキの生息に適した環境であったと考えられる。しかし，そのいずれもが矮小でケガキほどの大きさであることから，前述したように当時気温がかなり高かったのが原因ではないかと考える。

なお，当時の最高潮位線は標高2.8〜3.0m付近にあったことは前述した木炭薄層の存在から証明できる。その後，海退期を迎え汀線は遠くに退き，弥生前期後半になると湿潤で水田に最適な地形を形成するようになった。グライ土層が確認されたことから，筆者は本遺跡の弥生前期後半の遺跡は，水田の遺構であり出土した杭列や大型木板は水路構築の関係品であると考える。したがって，住居跡は市道をはさんだ丘陵地帯にあったと思われる。

7．今後の課題

今回の発掘面積が限定されており，その全貌を知る術もないのが残念である。しかし，それぞれ重要な示唆をあたえる遺構と思われるので要点を列記することにする。

1．弥生前期後半の遺構について

遺跡は水田の遺構と思われるが，杭列や大型木板の意味するものは推測の域を越えるものではない。今後，本遺跡の近くで同時代，同類の遺跡が発見されることによりその意味付けと全貌が明らかになると思われるので，より正確な記録と出土木片のC^{14}による絶対年代の測定の必要を痛感する。

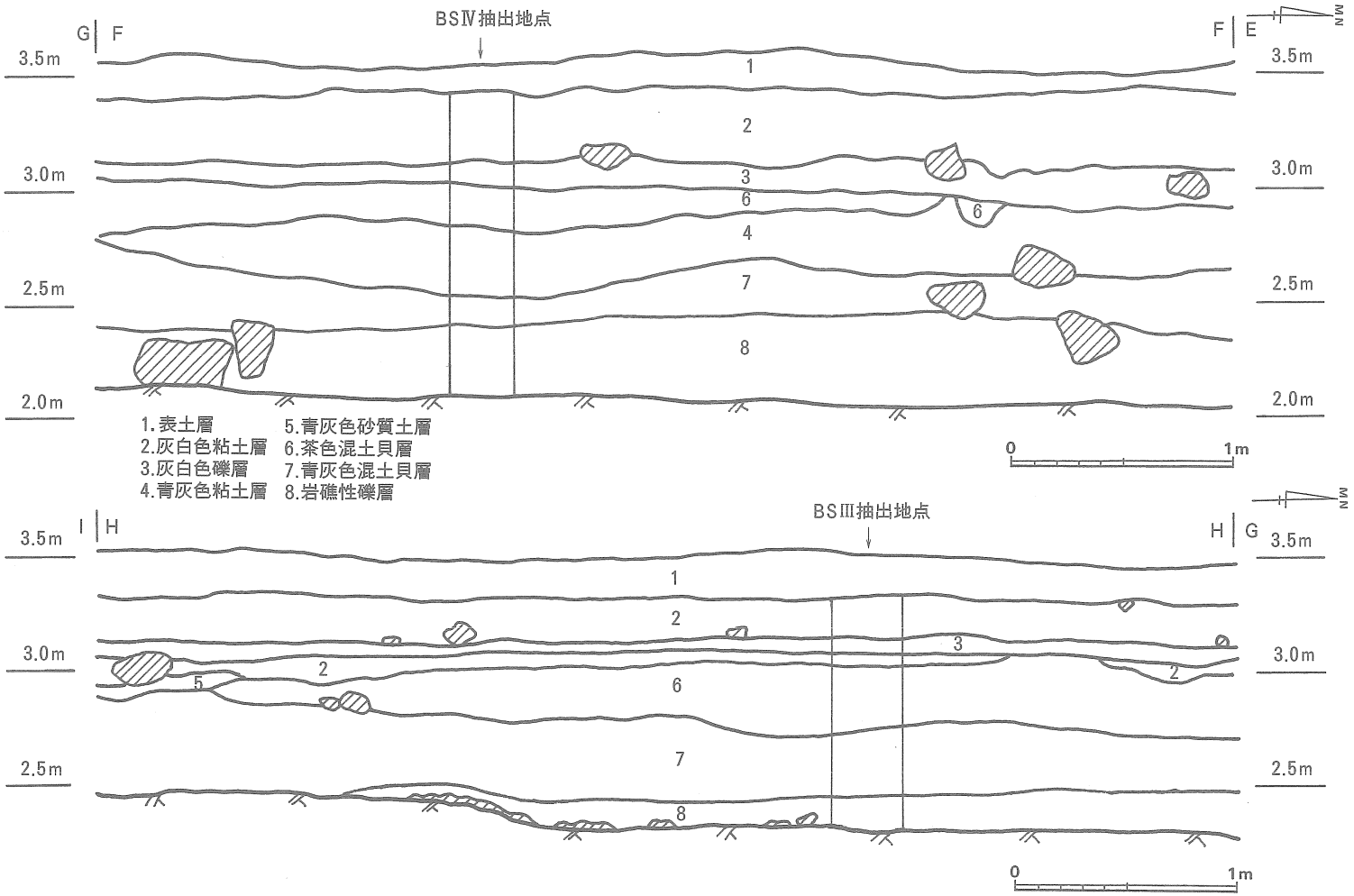
2．縄文前期遺構について

縄文前期の海進はよく知られたところであるが，最高海水準を実証する遺跡は少ない。本遺跡L′区北壁において木片炭化小片が薄い層状になって発見されたことは前述の通り最高潮位を示す証拠として重要であり，この木炭層直下の貝層のカキによるC^{14}による絶対年代の測定の必要性を痛感する。

なお，貝層には２種があり，Ｆ区でことに顕著である。この茶色混土貝層と青灰色混土貝層は如何なるものか筆者は前者は陸上堆積，後者は水中堆積ではないかと考えているが，両者に年代的差があるものか，土器学とC^{14}両面からの考察が望まれる。

第2表　ブロックサンプルによる層別出土貝類（含・蔓脚類）

	マガキ	タマキビ	ハイガイ	ヒメカニモリ	クロフジツボ
ＢＳⅢ―①　灰白粘土層	0				
ＢＳⅢ―②　灰白粘土層	0				
ＢＳⅢ―③　灰白礫層	0				
ＢＳⅢ―④　茶貝層	190				
ＢＳⅢ―⑤　茶貝層	360	1	1		
ＢＳⅢ―⑥　茶貝層	170		2	1	
ＢＳⅢ―⑦　青灰貝層	340	2			
ＢＳⅢ―⑧　青灰貝層	180				
ＢＳⅢ―⑨　青灰貝層	210				
ＢＳⅣ―①　灰白粘土層	0				
ＢＳⅣ―②　灰白粘土層	0				
ＢＳⅣ―③　灰白粘土層	0				
ＢＳⅣ―④　灰白礫層	0				
ＢＳⅣ―⑤　灰白礫層	0				
ＢＳⅣ―⑥　茶貝層	110				
ＢＳⅣ―⑦　青灰貝層	140	1		2	2
ＢＳⅣ―⑧　青灰貝層	110	1		2	1
ＢＳⅣ―⑨　青灰貝層	200				
ＢＳⅣ―⑩　青灰貝層	60				
ＢＳⅣ―⑪　岩礁	0				
ＢＳⅣ―⑫　岩礁	220	2			
ＢＳⅣ―⑬　岩礁	170				
ＢＳⅣ―⑭　岩礁	230				



第４図　小野宗方遺跡Ｆ区・Ｈ区西壁土層図（１／30）

2．小野宗方遺跡出土の動物遺存体について

大分市歴史資料館館長　木　村　幾多郎

発掘によって得られた動物遺存体は，貝殻を除いて96片ほどであるが，その多くは小片である。遺存体の多くは，縄文時代前期の曽畑式の包含層（茶色混土貝層・青灰色混土貝層）を中心に採集されている。

動物種名として次の７種が査定された。

哺乳類

1．イノシシ　Sus scrofa leucomystax(TEMMINCK & SCHLEGEL)

2．シカ　Cervus nippon TEMMINCK

3．ネコ　Felis catus

4．イルカ　Globicephala s.p.

鳥類

5．カモ　Anas s.p.

魚類

6．エイ類　Batoidei s.p.

7．サメ類　Lamina fami

以上の動物のうち，数量的に多い種は，イノシシとシカであり，種不明の骨小片も多くはどちらかに属すると思われる。

発掘区は幅３ｍのトレンチで，面積的には広くないが，対象地区全長は約300ｍと長い。そのうち，Ｅ～Ｉ区・Ｊ～Ｌ′区の40ｍ程の範囲に貝層が検出され，その部分に動物骨も比較的多く出土している。貝層を伴わないＯ′～Ｑ区には散発的に出土しているだけである。骨片数はイノシシの方が36片ほどで，シカの14片より多いが，廃棄の場所には両者とも偏りは見られない。

1．イノシシ

イノシシ標本は，36片程出土している。そのうち主要骨格及び歯牙出現表は，表２・３に示す通りである。寛骨を除いて主要骨格各部位は検出されているが，いずれも１～２点と少ない。表よりする推定最小個体数は２個体となる。

層位的には，岩礁の上にのる厚さ約40ｃｍの青灰色混土貝層，その上の茶色混土貝層（青灰色砂質土層）・灰白色粘質土層に多く出土している。

年令

歯牙はいずれも遊離歯であり，年齢査定は困難であるが，$\underline{M^2}$のエナメル質の摩耗が認められるもの，$\overline{M_3}$の歯根が未成長で咬頭部に若干摩耗が認められるもの（生後20～30か月），$\overline{M_3}$で摩耗

が象牙質に及ぶもの（生後40か月過ぎ）が確認されており，生後20か月を過ぎた成獣の存在を認めることができる。

性別他

雌獣の上顎犬歯（1）が出土しており，雌獣の存在が確認されているが，大型の骨格もあり，雄獣もあったと思われる。

2．シカ

シカの標本は14片のみで，イノシシ標本の半数以下である。標本数の少ない分だけイノシシに比べ，散漫に散布した状態で出土している。主要骨格及び歯牙は表2・3の通りである。　骨の左側小片が3片出土しており，推定最小個体数は3個体となる。

年令

イノシシと同じく検出歯牙は遊離歯で，しかも4個と数も少なく，推定は困難である。咬耗度だけからすれば，2か月前後の歯，他の3個は24か月前後の歯と推定され，いずれも成獣である。幼若獣については明確ではないものの，上腕骨骨体部（r）に小型の標本があり，若獣である可能性がある。

性別他

鹿角などは出土しておらず不明であるが，大腿骨遠位部片に大型のものがあり，雄獣の可能性がある。

3．ネコ

O区から3か所に分かれて，しかも青灰色砂質土層をはさんで，上の青灰色粘土層と下の橙色礫層から出土したことになっている。しかし，貝層でない粘土層で出土したにしては，最近の標本と考えてもおかしくないほど骨質の保存が良く，おそらく後世の掘り込み内から出土した骨を同レベルの層位で取り上げてしまったのではないかと想像されるが，確実なところは分からない。

残存部を示すと，頭蓋骨右側，上顎骨（1），下顎骨（r・1），軸椎，橈骨（r），尺骨（r），寛骨（1），脊椎骨，指骨4で，同一個体と判断される標本である。

4．イルカ類

脊椎骨が2点検出されている。L・L′区の青灰色砂質土層より出土している。推高3.74ｃｍ（一方の骨端分離），推体経幅4.09×4.86ｃｍと，推高2.69ｃｍ(両方の骨端分離)，経幅3.31×3.98ｃｍで，いずれも腰椎である。イルカ類は有明海にも入ってきたと考えられるが，積極的にイルカ猟を行っていたわけではなく，偶然迷い込んだイルカを捕獲したものであろう。

他にクジラ（歯クジラ類を含む）類と思われる大型骨の破片が出土している。

5．カモ類

鳥類の骨が２点（上腕骨）検出されている。

うち１点は，Ｇ区青灰色混土貝層より出土しており，カモ類（マガモ？）の左側上腕骨である。近位骨頭一部を欠くが，全長9.56ｃｍを測る。貝塚全面に広がる干潟には，鳥が多く飛来していたと思われるが，遺存骨は殆どない。

6．エイ類

尾棘が２点と歯板が１点検出されている。尾棘はＧ区の青灰色混土貝層，Ｉ区青灰色砂質土層より出土している。いずれも先端部を欠くが，基部には特別の加工は無い。歯板はＦ区茶色混土貝層より出土している。

7．サメ類

上顎歯が１点Ｈ区灰白色粘質土層より出土している。ホオジロザメ右側上顎歯と思われるが，特別の加工は無い。

以上，出土した動物骨を概観してきたが，全体的には少量であるが，量的にはイノシシが多く，推定最小個体数では多いが骨片量の少ないシカが，全遺存骨の殆どであった。貝類を除く動物質食料に関しては，イノシシ・シカが他より多かったことを示しているわけであるが，貝塚の立地からすればもっと豊富なメニューがあっても良いと思われる。有明海の干潟に面して形成された貝塚であり，ここで取り扱った脊椎動物以外のメニューがあったのかもしれないが，資料として検出することは困難で（貝類を除いて）推測する以外はない。

同じ諫早市域に属する有喜貝塚は，小野宗方遺跡から一山越えた（実際には地峡を抜けた）反対側の橘湾に面し，外海に直接つながっている。渡辺誠氏の報告によれば，哺乳類７種（陸棲５・海棲２），魚類18種と豊富である。漁労具としての骨角器類が多く，石鏃挟み込み式の離頭銛頭も出土している。この両者の貝塚の違いは，貝塚の形成年代の差，小野宗方遺跡が前期曽畑式，有喜貝塚が中期阿高式から漁撈具の発達する後期までという違いもあるかもしれないが，大きく周囲の生態系の違いによるものである。小野宗方遺跡から橘湾まで４ km 弱であり，至近距離といえるが，やはり周囲の生態系に依存していたのであろうか。

第１表　動物遺存体同定結果一覧表①

区	資料番号	取上番号	標高(m)	出土層位	種　名	部　位	備　　考
F	1	1	3.09	灰白粘	イノシシ	$\overline{\lceil C}$	遊離歯
	2	2	3.003	灰白粘	シ　カ	$\underline{M_3}\rfloor$	遊離歯
	3	4	2.979	茶　貝	イノシシ	肩甲骨(ｒ)	
	4	5	2.88	茶　貝	シ　カ	上腕骨(ｒ)	
	5	6	2.84	茶　貝	イノシシ	$\overline{\lceil M_3}$	遊離歯
	6	7	2.452	青灰貝	イノシシ	頭蓋骨	前頭骨,涙骨,破片
G	7	1	2.992	灰白粘	イノシシ	指骨	
	8	2	3.001	茶　貝	不　明		小骨片
	9	3	2.998	茶　貝	不　明		小骨片，磨滅
	10	4	2.956	茶　貝	イノシシ	$\underline{\lceil M_2}$	歯冠小片
	11	5	2.915	茶　貝	不　明		骨体小片
	12	6	2.894	茶　貝	不　明		骨体小片，磨滅
	13	7	2.785	青灰貝	シ　カ	$\overline{\lceil M_2}$	遊離歯
	14	8	2.722	青灰貝	エ　イ	棘	
	15	9	2.499	青灰貝	カ　モ	上腕骨(ℓ)	
	16	10	2.966	灰白粘	イノシシ		歯冠小片
H	17	1	3.174	灰白粘	イノシシ	距骨(ｒ)	破片
	18	2	3.099	灰白粘	不　明	長管骨	焼骨小片，磨滅
	19	4	3.013	灰白粘	サ　メ	歯	加工なし
	20	5	2.994	灰白粘	シ　カ	肩甲骨(ℓ)	近位，棘欠損
	21	6	3.097	灰白粘	イノシシ	$\overline{M_2\rfloor}$	歯冠小片(頰側のみ)
	22	7	2.95	茶　貝	不　明	肋骨	小動物
	23	8	2.905	茶　貝	シ　カ	$\underline{M_2}\rfloor$	遊離歯
	24	9	2.951	茶　貝	不　明	長管骨	骨体小片
	25	10	3.023	茶　貝	イノシシ	尺骨(ℓ)	骨体片
	26	11	2.857	茶　貝	不　明	長管骨	骨体小片，磨滅
	27	12	2.845	茶　貝	不　明	長管骨	骨体小片

動物遺存体同定結果一覧表②

区	資料番号	取上番号	標高(m)	出土層位	種　名	部　位	備　　考
	28	14	2.888	茶　貝	不　　明		骨体小片，磨滅
	29	15	2.861	茶　貝	イノシシ	$\underline{M^2}$	歯冠片
	30	17	2.678	茶　貝	シ　　カ	仙骨	
	31	18	2.96	茶　貝	イノシシ	$\overline{\ell_2}$	遊離歯
	32	19	3.03	茶　貝	イノシシ（？）	大腿骨（ℓ）	骨体小片
	33	20	3.023	茶　貝	不　　明		骨体小片，磨滅
I	34	1	2.997	灰白粘	不　　明	長管骨	骨体小片，磨滅
	35	2	3.0	灰白粘	シ　　カ	大腿骨（ℓ）	遠位
	36	3	2.96	灰白粘	イノシシ	指骨	
	37	4	2.949	灰白粘	不　　明		骨体小片
	38	5	2.949	灰白粘	不　　明	長管骨	骨体小片
	39	6	2.958	青灰砂	エ　　イ	棘	
	40	7	2.823	青灰砂	イノシシ	$\overline{\ell_2}$	遊離歯片
J	41	1	2.8906	青灰砂	不　　明		骨体小片
K	42	1	2.8756	青灰貝	イノシシ	頭蓋骨	頭頂骨，後頭骨破片
	43	2	2.9106	青灰砂	イノシシ	上腕骨（r）	破片
	44	3	2.8356	青灰貝	不　　明		骨体小片
	45	4	2.8456	青灰貝	シカ（？）	脛骨（ℓ）	骨体遠位
	46	5	2.7436	青灰貝	不　　明	上腕骨（r）	鳥骨片
	47	6	2.7536	青灰貝	イノシシ	橈骨（ℓ）	遠位
	48	7	2.7636	青灰貝	イノシシ	肩甲骨（ℓ）	近位
	49	8	2.7986	青灰貝	シカ（？）	脛骨（ℓ）	骨体遠位
L	50	1	3.0356	橙色礫	イノシシ	下顎骨（r）	下顎角破片
	51	2	2.9806	橙色礫	イノシシ	$\overline{\ell_3}$	
	52	3	3.0606	橙色礫	イノシシ	頭蓋骨	破片
	53	5	2.9756	橙色礫	イノシシ	下顎骨	P^2－M^3までの頬側面破片
	54	6	2.9806	橙色礫	イノシシ	環椎	

動物遺存体同定結果一覧表③

区	資料番号	取上番号	標　高	出土層位	種　名	部　位	備　　考
L	55	7	2.9656	橙色礫	イルカ	脊椎骨	骨端分離
	56	8	2.9776	橙色礫	イノシシ	肩甲骨(ℓ)	近位
	57	9	3.0336	橙色礫	シカ	脛骨(ℓ)	遠位
	58	10	3.0556	橙色礫	イノシシ	腰椎	
	59	11	2.9676	橙色礫	ヒト	上腕骨(ℓ)	遠位
	60	12	2.9666	橙色礫	不明		海棲哺乳類 脊椎骨破片
	61	13	2.9236	橙色礫	イノシシ	脛骨(ℓ)	骨体近位後面破片
	62	14	2.8986	橙色礫	シカ	肩甲骨(r)	近位
	63	16	2.9186	橙色礫	不明		海棲哺乳類 脊椎骨破片
	64	17	2.9586	橙色礫	不明		骨体小片
	65	18	2.6286	青灰貝	イノシシ	距骨(ℓ)	完形
	66	19	2.8286	青灰貝	不明	脊椎骨	椎体破片
	67	20	2.9936	橙色礫	不明	胸椎	棘突起部分破片
L′	68	1	2.9116	橙色礫	不明	肋骨	小破片
	69	2	2.9296	青灰貝	イノシシ	上顎骨(ℓ)	破片
	70	3	2.7216	青灰砂	イルカ類	脊椎骨	
	71	5	2.7716	青灰貝	イノシシ(?)	胸椎	棘突起破片
	72	6	2.5946	青灰砂	イノシシ(?)	脊椎骨	椎体破片
O	73	2	3.3181	橙色礫	ネコ		
	74	3	3.2311	橙色礫	ネコ		
	75	4	3.1421	橙色礫	イノシシ		歯冠小片
P	76	2	3.2351	青灰砂	イノシシ		歯冠小片
	77	3	3.2721	青灰砂	シカ		歯冠小片
	78	5	3.1701	青灰砂	イノシシ		歯冠小片
Q	79	1	3.1981	橙色礫	イノシシ		歯冠小片
	80	2	3.3521	青灰砂	イノシシ	$\overline{\mathrm{M}}_3$	遊離歯
	81	4	3.1951	青灰砂	シカ(?)		歯冠小片

第 2 表 部位別遺存骨表

	頭蓋骨 Cranium	Max Mand r	Max Mand ℓ	脊椎 Vertebr	肩甲骨 ScaPula r	肩甲骨 ScaPula ℓ	上腕骨 Humerus r	上腕骨 Humerus ℓ	橈骨 Radius r	橈骨 Radius ℓ	尺骨 Ulna r	尺骨 Ulna ℓ	寛骨 Pelvis r	寛骨 Pelvis ℓ	大腿骨 Femur r	大腿骨 Femur ℓ	脛骨 Tibia r	脛骨 Tibia ℓ	距骨 Talus r	距骨 Talus ℓ	踵骨 Calcaneus r	踵骨 Calcaneus ℓ	中手骨 中足骨 r	中手骨 中足骨 ℓ
Sus	F区 青灰貝	Max L′区青灰貝		Atlas L区橙礫層	H区 茶貝	K区 青灰貝	K区 明茶砂			K区 青灰貝		H区 茶貝				H区 茶貝		L区 橙礫層	H区 灰白粘	L区 青灰貝				
	K区 青灰貝	Mand L区橙礫層		T. V. L区橙礫層		L区 橙礫層																		
	L区 橙礫層			L. V. L区青灰貝																				
Cervus				仙骨 H区茶貝	L区 橙礫層	H区 灰白粘	F区 茶貝									I区 灰白粘		K区 青灰貝						
																		K区 青灰貝						
																		L区 橙礫層						

第 3 表 歯牙出現表

		r												ℓ											
		M_3	M_2	M_1	P_4	P_3	P_2	P_1	C	I_3	I_2	I_1			I_1	I_2	I_3	C	P_1	P_2	P_3	P_4	M1	M_2	M_3	
					m^4	m^3	m^2		C	i_3	i_2	i_1			i_1	i_2	i_3	C	m^2	m^3	m^4					
Sus	Max		H区 茶貝															F区 灰白粘						G区 茶貝		
	Mand	L区 橙礫層	H区 灰白粘								H区 茶貝														F区 茶貝	
											I区 青灰砂														Q区 橙礫層	
Cervus	Max	F区 灰白粘	H区 茶貝																				BSⅢ 灰白粘			
	Mand																							G区 青灰貝		

3．小野宗方遺跡出土の植物種子および土壌に関する自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

有明海に面する沖積低地の奥部に位置する小野宗方遺跡の背後には，古第三紀に形成された砂岩や泥岩層および第四紀前期更新世に噴出したとされる長崎火山岩類から構成される丘陵が広がる（日本の地質「九州地方」編集委員会，1992）。特に遺跡の位置する沖積低地のすぐ東側には，長崎火山の一つである金比羅岳の北西斜面が伸びている。

本遺跡では，沖積層中から縄文土器や弥生土器の小片，黒曜石や安山岩製の石器および獣骨や植物遺体などが出土している。また，杭および杭列も検出されている。これらの遺物や遺構が出土あるいは検出された沖積層の下位には，マガキが大半を占める貝層が認められている。これは，いわゆる縄文海進時に当地が汀線付近にあったことを示すものと推定されている。調査区の一部では，この貝層が認められずに円礫層が堆積し，その下位に火山灰様の灰色土層の堆積が認められている。

本報告では，上記のような遺跡の調査区で認められた沖積層の年代資料を得るために，土層中より年代指標となるテフラの検出を試みる。また，土層中より検出された植物遺体を同定し，その種類構成から，当時の植生および植物利用状況について検討する。

2．テフラの検出

1．試料

試料は，本遺跡調査区で作成された土層断面で最も下位に堆積する火山灰様の灰色土層より採取された4点である。各試料は，O，O′，R，Uの各区から各1点づつ採取された。

2．分析方法

試料は，適量を蒸発皿に取り，泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散，上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を実体顕微鏡で観察，スコリア・火山ガラス・軽石の特徴や含まれる量の多少を定性的に調べる。それらの特徴からテフラを識別し，地層の堆積年代推定に用いる。

3．結果

処理後に得られた砂分の特徴を各試料ごとに述べる。

・O区試料

比較的新鮮な斜長石の結晶と磁鉄鉱などの磁性鉱物粒を特徴とする。また，少量の自形を呈する新鮮な角閃石の結晶も含まれる。スコリアおよび軽石は全く認められず，火山ガラスが微量認められる。火山ガラスは，淡い褐色を呈し，緩い曲率を持った薄い平板状のバブル型とよばれる形状を示す。

・O′試料

O区試料と同様に比較的新鮮な斜長石の結晶と磁性鉱物粒，さらに，多量の風化して円磨した安山岩の礫を特徴とする。礫中には輝石類の斑晶が認められる。また，少量の自形を呈する新鮮な角閃石の結晶も含まれる。スコリアおよび軽石は全く認められず，火山ガラスが微量認められる。火山ガラスは，無色透明および淡い褐色を呈したバブル型である。

・R区試料

多量の風化粒と磁性鉱物粒を特徴とする。風化粒は，変質の程度が進み原岩の特徴をとどめていない。おそらく安山岩などの礫に由来すると考えられる。他に，上記試料と同様の比較的新鮮な斜長石の結晶や自形を呈する新鮮な角閃石の結晶も含まれる。スコリアおよび軽石は全く認められず，火山ガラスが微量認められる。火山ガラスは無色透明のバブル型である。

・U区試料

新鮮な斜長石の結晶と磁性鉱物粒，さらに，多量の風化して円磨した安山岩礫と自形を呈する新鮮な角閃石の結晶を特徴とする。礫中には輝石類の他に角閃石の斑晶も認められる。スコリアおよび軽石は全く認められず，火山ガラスが微量認められる。火山ガラスは，無色透明のバブル型である。

4．考察

上述のように，テフラ同定の指標となる砕屑物は，どの試料においても微量の火山ガラスしか検出されなかった。これらの火山ガラスは，その形態と色調から，鬼界カルデラをはじめとして阿多，姶良，阿蘇などの巨大カルデラから噴出したテフラに由来すると考えられるが，特定はできない。また，その産状から，この火山ガラスの由来するテフラの降灰年代と試料が採取された灰色土層の堆積年代とも全く関連性はないと考えられる。したがって，本分析からは，灰色土層の堆積年代を推定することはできない。

なお，試料中に認められた礫は，遺跡の後背に広がる丘陵地から供給されたと考えられる。また，新鮮な斜長石や角閃石の結晶は，有明海研究グループ(1965)に示された普賢火山灰層などの記載から，雲仙火山の噴出物を主な母材とする火山灰土に由来する可能性がある。

3．種実同定

1．試料

試料は，各調査区から検出された種実遺体である。試料の詳細については，結果とあわせて表1に示す。

2．結果

結果を表1に示す。以下に今回検出された種類の形態的特徴について記す。

・アカマツかクロマツ　Pinus densiflora Sieb, et Zicc, or Pinus Thunbergii Parlatore. マツ科

球果が検出された。円錐状卵型で，大きなもので5 cm程度。柄はほとんどない。種燐は長楕円状の矩形を呈し，先端部は肥厚する。先端部の肥厚は，不規則な4～5角形である。アカマツとクロマツの違いは，種燐の肥厚部がクロマツの方が厚いこと，アカマツには肥厚部の中央に短い突起があることで区別されるが，今回検出されたいずれの試料も表面が摩耗し，判別するのが難しい。

・イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* (knight) K. Koch　イヌガヤ科

種子が検出された。黒褐色で側面観は長卵形，上面観は凸レンズ型。大きさは13mm程度。種皮は堅く，表面に顆粒状の隆起がある。

・カヤ　Torreya nuciferd Sieb. et Zucc.　イチイ科

種子が検出された。褐色で側面観は長楕円形，上面観は凸レンズ型。大きさは13mm程度。種皮は堅くイヌガヤに似るが，表面の隆起は縦長に配列する。

・オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura　クルミ科

核の破片が検出された。褐灰色。大きさは1.5cm程度。実際は表面は荒いしわ状となるが，この個体は摩耗している。

・アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis sp.*　ブナ科

殻斗および果実が検出された。殻斗は，おわん型で大きさは1 cm程度であり，秕である。鱗片は癒着して同心円状の輪のように見える。果実は楕円形で大きさ1.7cm程度。基部には殻斗の座についていた跡が円形のざらつく部分として残る。先端部の花柱の根元には，輪状の模様がある。なお，果実のうち，先端部の輪状紋がはっきりしないものについては，コナラ亜属との判別がつきにくいためコナラ属とした。

・スダジイ　Castanopsis cuspidata var. Sieboldii (Makino) Nakai　ブナ科

殻斗および果実が検出された。殻斗は，楕円形で大きさ1 cm程度であり，秕である。先端部は3裂し，鱗片は癒着する。果実は卵型で先端部は細くなる。大きさは1.8cm程度。基部には小さくて丸くへこんだ臍がある。

・クスノキ科　Lauracede sp.

種子が検出された。ほぼ球形で，直径は 6 mm 程度。黒～茶褐色。種皮は薄くて堅く，表面は平滑。

・ヤブツバキ　Camelloa japonica　ツバキ科

種子が検出された。半月形で，大きさは1.5mm 程度。種皮は黒色で厚く堅い。

・モモ　*Prunus Parsica* Batsch　バラ科

核の破片が検出された。褐色，核の形は楕円形でやや偏平である。大きさは2.3cm 程度。丸く大きな臍点がありへこむ。表面は，不規則な線状のくぼみがあり，全体として荒いしわ状に見える。

・ウメ　Prunus mume (Sied) et Zicc　バラ科

核が検出された。褐色，核の形は楕円形で偏平である。大きさは2cm 程度。丸く大きな臍点がありへこむ。側面の一方には縫合線が発達する。表面は，不規則な丸いくぼみがある。

・サクラ属　*Prunus* sp　バラ科

核（内果皮）が検出された。褐色，核の形はほぼ円形で，やや偏平である。大きさは1mm 程度。丸く大きな臍点がある。一方の側面にのみ，縫合線が顕著に見られる。表面は，しわ状の模様がある。

・ホウノキ　Magnoria obovata Thunb　モクレン科

種子が検出された。黒色で大きさ 1 cm 程度。楕円形～円形で，片側の中央部はへこみ，全体に浅い溝が走る。

・センダン　*Melia Azedarach* L. var. *subtripinnata* Migval　センダン科

核が検出された。褐色で堅い。側面観は楕円形で，上面観は星型。大きさは1.2cm 程度。縦方向に数本の陵が見られる。

・エゴノキ　*Styrax* japonica Sied. et Zicc　エゴノキ科

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形，上面観は円形。大きさは 1 cm 程度。下端に大きな「へそ」があり，表面に 3 本の浅い溝がある。核は厚く堅い。

・ヒョウタン類　*Lagenaria* sp　ウリ科

種子の破片が検出された。長さ1.2cm 程度で，長楕円形を呈す。

・不明A

大きさは1.5cm 程度。いびつな円形で，皮は薄くて黒く，堅い。

・不明B

大きさは 2 cm 程度。木質で内部は 5 室に分かれる。

・不明C

大きさは0.5cm 程度。半月形で表面には荒いしわ模様がある。

・不明D

大きさは4 cm程度。断面はスポンジ状によく発泡する。

・不明E

大きさは1 cm程度。涙型で，縦方向に筋が見られる。

3．考察

今回同定された種実は，栽培植物や食用などに利用可能なものが多い。これらの大部分は表面が摩耗しており，食用には適さない秕（幼果）も多い。このような産状から考えると，これらの種実は食用などに利用された残滓が廃棄されたというよりは，むしろ流入してきたものの可能性が高い。したがって，栽培種とされるウメ・モモ・ヒョウタン類以外の種実は，周辺の山野からもたらされたものと考えられる。今回検出された種類は，マツやホウノキなど，ほぼ全域に分布する種類も多いが，スダジイ・カシ類（アカガシ亜属）・センダン・ヤブツバキといった暖温帯林（照葉樹林）に特有の種類も見られる。これらの種類は，いずれも現在周囲の山林や野原などで普通に見られるものである。九州では，1500年前以降人類の影響によりシイ・カシ類などの照葉樹林が減少し，マツ属やイネ科が増加を開始したと言われている(Hatanaka, 1985)。今回の同定結果でも，各層位でマツが多い。ただし，マツの球果は大型で堅く，化石として残りやすいと考えられることから，これがマツの増加と関係しているかどうかは不明である。

今回検出された種類は周辺で平易に入手可能であったと考えられることから，過去の人間が食用などに利用していた可能性は十分にある。本遺跡の堆積層に関しては，添付資料やテフラ分析結果から詳細な年代観を得られていないのが現状である。そこで，今回検出された種実遺体のうち，有用な植物についてその用途を略記するにとどめる。

カヤ・オニグルミ・シイ類・サクラ属は古くから食用として利用されてきた。カヤ・オニグルミ・シイ類・サクラ属は生食可能であるが，カシ類については「あくぬき」が必要となる。カシ類の利用は「あくぬき」の技術が一般化した縄文時代中期以降であるといわれている。（渡辺，1984）

モモ・ウメ・ヒョウタン類は栽培のために渡来したものであると言われている。モモは，古くは縄文時代前期に検出例が知られているが（長崎県伊木力遺跡），検出例・個体数が増加するのは弥生時代以降である(粉川，1988)。花の鑑賞用のほか果実を食用にし，また種子も食べられる。ウメは，弥生時代にはわずかに検出されるだけであるが(東京の野川泥炭層など)，白鳳・奈良時代以降多くの検出例が知られている（粉川，1988)。花の鑑賞用のほか，果実を食用にし，また種子も食べられる(薬用)。ヒョウタン類は，日本での検出例は縄文時代前期にまでさかのぼることができるが(千葉県富津市の貝塚，福井県の鳥浜貝塚)，多くの検出例が知られるようになるのは弥生時代以降である(粉川，1988)。ヒョウタン類には，果皮を容器として利用されるヒョウタンのほか，果肉を食用とする（干瓢）ユウガオがある。

栽培・食用以外の用途としては，イヌガヤやヤブツバキの実は搾油に用いられる。センダンはその実を糸に通して数珠が作られる。ホウノキの実は薬用として利用される。エゴノキについてはサポニンをふくんでいるので，洗剤として使ったり，絞り汁を川に流して魚を取ることも行われる。

〈引用文献〉

有明海研究グループ（1965）有明・不知火海域の第四系．地団研専報，11，86p

Hatanaka Ken-ichi (1985) PALYNOLOGICAL STADIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS.Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B),18.p.29-71

日本の地質「九州地方」編集委員会（1992）日本の地質 9　九州地方．371p.,共立出版．

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．弥生文化の研究 2　「生業」，p112-115.,雄山閣．

渡辺　誠（1984）縄文時代の植物食．p.247.,雄山閣

種実同定結果一覧表①

区	試料番号	取上番号	標高(m)	出土層位	同定結果
A	1	17	3.129	青灰(茶)色粘土	不明A
	2	18	3.117	青灰(茶)色粘土	コナラ属
	3	19	3.170	青灰(茶)色粘土	アカマツかクロマツ
	4	20	3.159	青灰(茶)色粘土	アカマツかクロマツ
	5	21	3.145	青灰(茶)色粘土	不明A
	6	22	3.140	青灰(茶)色粘土	アカマツかクロマツ
	7	23	3.137	青灰(茶)色粘土	アカマツかクロマツ
B	8	イ5	2.736	土壙内	不明B
	9	イ6	2.996	土壙内	不明B
	10	14	3.341	暗灰黒粘土	エゴノキ
	11	15	3.320	暗灰黒粘土	クスノキ科
	12	16	3.368	暗灰黒粘土	エゴノキ
	13	17	3.328	暗灰黒粘土	不明B
	14	18	3.372	暗灰黒粘土	アカマツかクロマツ
	15	19	3.335	暗灰黒粘土	クスノキ科
	16	20	3.339	暗灰黒粘土	エゴノキ
	17	21	3.284	暗灰黒粘土	クスノキ科
	18	22	3.288	暗灰黒粘土	不明
	19	24	3.320	暗灰黒粘土	エゴノキ
	20	26	3.300	暗灰黒粘土	クスノキ科
C	21	1	3.336	暗灰黒粘土	クスノキ科
	22	2	3.333	暗灰黒粘土	クスノキ科
	23	3	3.332	暗灰黒粘土	クスノキ科
	24	4	3.329	暗灰黒粘土	アカマツかクロマツ
	25	5	3.346	暗灰黒粘土	ウメ
	26	7	3.360	暗灰黒粘土	不能
D	27	2	3.392	灰白粘質土	不明D
	28	3	3.355	灰白粘質土	不明B
	29	5	3.331	灰白粘質土	不明B
	30	6	3.342	灰白粘質土	ウメ
	31	7	3.315	灰白粘質土	不能
	32	8	3.180	灰白粘質土	コナラ属
	33	9	3.402	灰白粘質土	ヤブツバキ
F	34	1	3.041	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	35	2	3.080	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	36	3	3.005	灰白粘質土	アカマツかクロマツ

種実同定結果一覧表②

区	試料番号	取上番号	標高(m)	出土層位	同定結果
F	37	4	2.916	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	38	5	2.916	灰白粘質土	エゴノキ(2)
	39	6	2.969	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	40	7	2.827	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	41	8	2.566	青灰色混貝土	アカマツかクロマツ
	42	12	3.063	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
G	43	1	3.065	青灰色混貝土	アカマツかクロマツ
	44	4	3.217	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	45	5	3.077	灰白粘質土	イヌガヤ
	46	6	2.783	青灰色混貝土	アカマツかクロマツ
H	47	1	3.132	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	48	2	3.099	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	49	7	2.987	茶色混貝土	不能
	50	10	2.864	灰白粘質土	イヌガヤ
	51	11	2.906	灰白粘質土	不能
	52	12	2.839	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	53	14	2.852	茶色混貝土	ヤブツバキ
	54	15	2.809	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	55	18	2.769	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	56	20	2.718	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	57	23	2.943	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	58	24	2.845	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
I	59	1	3.100	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	60	3	3.113	灰白粘質土	イヌガヤとエゴノキ
	61	4	3.063	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	62	5	3.075	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	63	6	3.083	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	64	7	3.081	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	65	8	3.073	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	66	14	3.094	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	67	15	3.040	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	68	16	3.042	灰白粘質土	アカガシ亜属
	69	17	3.094	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	70	19	3.053	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	71	21	3.068	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	72	22	3.040	灰白粘質土	アカガシ亜属

種実同定結果一覧表③

区	試料番号	取上番号	標高(m)	出土層位	同定結果
I	73	23	3.047	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	74	24	3.047	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	75	25	3.051	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	76	30	2.963	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	77	31	2.972	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	78	34	2.942	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	79	35	2.894	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	80	37	2.929	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	81	38	2.903	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	82	40	3.009	青灰砂質土	アカマツかクロマツ
	83	43	2.749	青灰混貝土	アカマツかクロマツ
	84	44	2.795	青灰砂質土	コナラ属
	85	45	3.120	灰白粘質土	アカマツかクロマツ，イヌガヤ
	86	46	2.777	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	87	48	2.835	茶色混貝土	コナラ属
	88	49	2.788	青色混貝土	オニグルミ
	89	50	2.836	青色混貝土	アカマツかクロマツ
	90	52	2.805	青色混貝土	アカマツかクロマツ
	91	54	2.807	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
	92	56	2.859	茶色混貝土	コナラ属
	93	58	2.983	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	94	61	2.985	灰白粘質土	アカマツかクロマツ
	95	62	2.919	灰白粘質土	イヌガヤ
	96	67	2.878	茶色混貝土	アカマツかクロマツ
J	97	1	3.1336	明茶褐砂質土	オニグルミ
	98	2	3.0436	明茶褐砂質土	アカマツかクロマツ
K	99	1	2.9686	明茶褐砂質土	アカマツかクロマツ(3)
	100	2	3.0336	明茶褐砂質土	アカマツかクロマツ
	101	4	3.0186	明茶褐砂質土	アカマツかクロマツ
	102	5	3.0036	明茶褐砂質土	不能
	103	6	3.0086	明茶褐砂質土	アカマツかクロマツ
L	104	2	3.2456	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	105	4	2.8686	青灰粘質土	アカマツかクロマツ，アカガシ亜属
N	106	1	3.5466	青灰粘質土	アカマツかクロマツ，コナラ属，クスノキ科(9)
					エゴノキ，不明B

種実同定結果一覧表④

区	試料番号	取上番号	標高(m)	出土層位	同定結果
O	107	1	3.7701	黒褐粘質土	ヒョウタン類
	108	2	3.7201	黒褐粘質土	クスノキ科(3)
	109	3	3.8291	茶褐粘質土	不明B
	110	5	3.8471	茶褐粘質土	クスノキ科(2)，不明B
	111	6	3.6081	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	112	7	3.6601	青灰粘質土	不明B
	113	9	3.5351	青灰粘質土	不能
	114	10	3.4971	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	115	11	3.4971	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	116	12	3.4901	青灰粘質土	不明B
	117	13	3.5841	青灰粘質土	イヌガヤ
	118	14	3.4071	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	119	17	3.3371	青灰粘質土	コナラ属
P	120	1	3.7021	青灰粘質土	不明B
	121	5	3.6331	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	122	8	3.0921	橙色礫	アカマツかクロマツ
	123	10	3.5791	青灰粘質土	アカマツかクロマツ
	124	6	3.3301	青灰粘質土	不明B
L	125			青灰砂質土	カヤ(3)，アカマツかクロマツ(3)，アカガシ亜属(3)
					コナラ属(3)，スダジイ(8)，サクラ属(13)
					センダン(7)，エゴノキ
P	126			青灰粘質土	アカマツかクロマツ(5)
R	127			橙色礫	アカマツかクロマツ，カヤ，クスノキ科(2)
					サクラ属(2)，センダン(4)，エゴノキ(4)，不明E
S	128			黒色粘質土	不明A
	129			青灰粘質土	コナラ属，クスノキ科(5)，不明B(2)
					アカマツかクロマツ
	130			橙色礫	アカマツかクロマツ(10)，イヌガヤ，アカガシ亜属(10)
					スダジイ，クスノキ科(10)，サクラ属，センダン(3)
					エゴノキ(13)，不明A(3)，カヤ(6)，不明E(3)
T	131			橙色礫	アカマツかクロマツ(5)，カヤ(11)，イヌガヤ
					アカガシ亜属(5)，コナラ属(7)，スダジイ
					クスノキ科(13)，サクラ属(87)，センダン(8)
					ホウノキ(20)，エゴノキ(14)，不明C(3)
U	132			橙色礫	カヤ(2)，アカガシ亜属，コナラ属(5)，クスノキ科(9)
					サクラ属(91)，センダン(7)，エゴノキ(2)，不明C(101)
B	133	イ1	3.1000	土壙内	モモ
O	134			青灰砂質土	クスノキ科(22)，サクラ属，エゴノキ(2)

＊数字のないものは1個

4．小野宗方遺跡のC^{14}年代測定結果

TELEDYNE
BROWN ENGINEERING
Environmental Services

50 VAN BUREN AVENUE
P.O. BOX 1235
WESTWOOD, NEW JERSEY 07675-1235
(201) 664-7070 FAX (201) 664-5586

Mr. Y. Ohyama
Teledyne Japan K.K.
Nihonseimei Akasaka Bldg.
8-1-19 Akasaka, Minato-Ku
Tokyo 107, Japan

P.O. #I01-2171
Customer: Isahaya-City
W.O.# 3-8247-072

Dear Mr. Ohyama:

We have listed below the radiocarbon ages we have determined on the samples you submitted for analysis.

ISOTOPES Sample Number	Sample	- δ C^{14}	Age in Years B.P.
I-17,683	C-01	457 ± 8	4910 ± 110
I-17,684	C-02	471 ± 8	5120 ± 110
I-17,685	C-03	474 ± 8	5160 ± 110
I-17,686	C-04	122 ± 9	1050 ± 80
I-17,687	C-05	426 ± 8	4460 ± 110
I-17,688	C-06	278 ± 8	2620 ± 90
I-17,689	C-07	239 ± 8	2190 ± 80
I-17,690	C-08	193 ± 8	1720 ± 80

We removed the outer 30% of shell with acid washes before dating the inner remainder. The wood samples were treated for the removal of carbonates and humic acids.

The Libby half-life of 5568 years was used to calculate the ages.

If you have any questions concerning these results, please contact us. We shall be happy to help in any way possible.

We hope these results will prove helpful in your work and we look forward to serving you again soon.

Sincerely yours,

J Buckley

James Buckley
Radiocarbon Laboratory

テレダイン ジャパン 株式会社

JB:mak

第5章　総　　括

発掘調査の結果，小野宗方遺跡は，縄文時代前期から中・近世の各時代にわたる遺構・遺物が包含された複合遺跡であることが判明した。縄文時代については前期の汀線・同時期の土器や石器，動物遺存体などが出土し，一部で貝塚を形成していた。弥生時代については前期後半の土器・石器および土壙・稲作農耕に関連すると思われる板列や杭列が出土し，古墳時代については前期初頭の土器，中・近世については陶磁器の出土をみた。そこで各時代について若干の私見を述べて，総括としたい。

1．縄文時代について

まず貝塚についてであるが，金比羅，蓮華石岳等の火山から供給されたと推定される凝灰角礫岩層（拳大から人頭大までの亜角礫などがあり，岩礁のような様相を呈している）の上層に形成されており，貝層は標高約2.0～2.5mに存在する。構成種の大半を小型のマガキが占めており，同種が汀線付近に生息する種であること，貝層直下は凝灰角礫岩の基盤であり，点在する平均１m大の岩にカキ殻が付着していることから見て，当時の汀線付近に立地しているものと推測される。貝層は茶色混土貝層と青灰色混土貝層の２層に分離しており，C^{14}測定によれば両者に年代差が認められるものの，土器型式での年代差については判然としなかった。遺物は主に茶色混土貝層から出土しており，その内容は土器・石器・木質遺物（植物種子を含む）・動物遺存体である。

当時の自然環境としては，貝層構成種であるマガキが小型であることやＬ区木質遺物が標高3.0mにあり，これが貝層形成時の最高水位を示すと考えられることから現在よりもかなり温暖であったと思われる。水位に関しては，「縄文海進」は前期にそのピークを迎えるといわれているが，後述するように本遺跡から出土する土器は前期の曽畑式土器を主体としており，この時期には水位は標高3.0mに達していたと思われる。立地については，木質遺物の堆積が見られ，この堆積が海からの漂着物が水による撹拌の作用を受けずに滞留した結果であろうと思われることから，海水の流入があったものの波の作用を受けにくい内湾であったと考えられる。

土器についてであるが，前期の単純期と判断される。これらは曽畑式土器を主体としているが，いわゆる典型的な曽畑式土器を中間に，これに先行すると言われる沈線文を主とするプロト的なもの，胎土に滑石を含まず文様も崩れてくるなど後出的な様相を見せるものと，点数は少ないものの，曽畑式土器の変遷が一応確認されるようである。

2．弥生時代について

標高約3.2～3.5mで弥生時代前期後半の土器，板列・杭列等が検出されていることから，当時の生活面がこのレベルにあったと想定しても良いと思われる。板列・杭列などの遺構が持つ

性格については，水田関連のものと思われ，収穫具である石庖丁の出土が見られることからも当時における稲作農耕の存在が予想される。水田部位での調査例が無いため不明であるが，西彼外海町出津遺跡（前期後半～）３～５ｍ，有川町浜郷遺跡（前期後半～）４～５ｍ，長崎市深堀遺跡（前期末～）約４ｍ，佐世保市宮の本遺跡（中期前半～）４～５ｍ，富の原遺跡（中期末～）約５ｍと前期～中期においては４ｍ前後に立地している。また和島誠一氏によれば前期3.5m，中・後期２ｍ以下の海水面を有明海周縁の遺跡をもとに想定されている。[註1] 従来本市においては弥生時代の生活面が標高3.0～3.5mにあったのではという推測がなされていたが，今回の調査結果では出土レベルにおいて遺物および遺構の両面から確認された形となった。周辺の遺跡である宮崎館遺跡や林ノ辻遺跡では広範囲におよぶ石棺・甕棺などの弥生時代の墓群が確認されていたものの，その被葬者階級の経済的基盤である生産跡はこれまで未確認であり，推測の域を出なかった。しかし，前述の杭列・板列が水田関連遺構である可能性があり，標高3.5ｍでこれらの生産跡的な遺構が押さえられたことは，当時この一帯が湿田的な可耕地であったことを想定させる。

３．弥生時代以降について

遺構の把握はできなかったが，遺物として，土師器，中・近世陶器，青磁・白磁の出土が見られた。土師器については高坏，複合口縁壺という器種構成であったが，前出の林ノ辻遺跡では弥生時代中期と思われる集石遺構が確認され，[註2] 祭祀遺構の可能性が指摘されていること，周辺の小野古墳など広範囲に及ぶと思われる墓群が存在することから弥生時代から古墳時代にわたって，当時周辺が古墳を築造しうる階級による埋葬を主体とする場であったことが推測される。また中世以降においては小野城跡が営まれていることからも，各時代の権力者たちの活動の場として，経済基盤である生産の場としてこの地が大きな役割をもっていたのではないだろうか。

以上が今回の調査における成果である。縄文時代の貝塚からは人々の生活の様子が極めて部分的ではあるもののかいま見られ，弥生時代については水田関連遺構と思われる杭列・板列が確認されるなど，遺跡の性格が当時の人々の生活のにおいのするものであったことは，当地における縄文・弥生時代の生活跡・生産跡の追及という従来からの問題点に対する回答の一助となりうるであろう。限られた範囲での調査であったため，本報告では遺跡の有する性格を断片的に提示することしかできないものの，有明海沿岸における縄文前期の貝塚を伴う遺跡についての新資料の提示ができたという意味では，その成果は予想外に大きなものであったと思われる。

今後の課題としてはこれらの遺構が営まれた背景にある生活跡・住居跡の追及が上げられるが，これらが確認されることで，当地域のより具体的な様相が見えてくるのではないだろうか。

今後の調査により確認されることを期待したい。

註１．和島誠一他「北九州における後氷期の海進海退について」
『資料科学研究所彙報』63　1967
２．秀島貞康他『林ノ辻遺跡』諫早市教育委員会　1983

参考文献

１．副島和明他「浜田遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
長崎県教育委員会　1981
２．中島直幸他『菜畑』唐津市教育委員会　1982
３．岡崎　敬他『末盧国』唐津湾周辺遺跡調査委員会 1982
４．永松　実他『長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
長崎市教育委員会　1984
５．江本　直他『曽畑』熊本県教育委員会　1988
６．松藤和人他『伊木力遺跡』多良見町教育委員会　1990